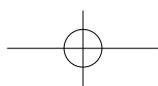
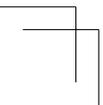
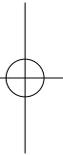
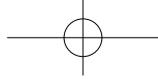
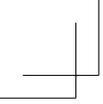




昆布山谷地区第5地点完掘状況（西より）



昆布山谷地区第5地点第1トレンチ完掘状況（北より）

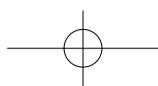
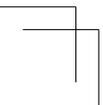
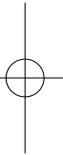
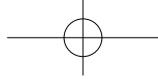
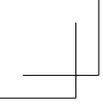




昆布山谷地区第5地点SX28・SD05（西より）



昆布山谷地区第5地点SK03・SK04（南東より）



石見銀山

Iwami-Ginzan Silver Mine Site

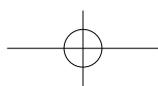
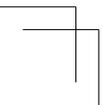
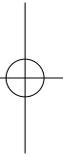
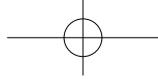
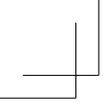
石見銀山遺跡発掘調査概要26



—昆布山谷地区・金森家地点・豊栄神社地点—

2018年3月

島根県大田市教育委員会



序

石見銀山遺跡は16世紀から20世紀にかけて採掘から精錬までが行われた鉱山跡を中心として、周囲の山城跡や銀鉱山から港までを結ぶ2本の街道、鉱石・銀の積み出しや諸物資を搬入した港湾などからなる複合遺跡です。

遺跡の発掘調査は33年目となり、今年度は銀山地区内の昆布山谷地区と伝建地区内の金森家地点、豊栄神社地点などの発掘調査を実施したところです。

昆布山谷地区の発掘調査は今年度で8年目となりました。本年度の調査では、江戸時代前半頃に比定できる水溜めや炉跡など、生産活動に関連する良好な資料が得られました。また、江戸時代初期頃にさかのぼる、岩盤を加工した遺構も確認できました。

金森家地点では修理整備に伴う発掘調査を平成28年度から実施しております。本年度は床下部分の発掘調査を実施し、前身建物に関連する遺構の他に、嘉永3(1840)年頃と推定される建物の地鎮に関連する遺構が見つかりました。

豊栄神社地点では拝殿床下部分の調査を実施し、拝殿建設時の実態が明らかとなりました。

昆布山谷地区においては、調査成果の公開・説明と普及をはかったところです。

発掘調査にあたっては、土地所有者、地元関係者、作業員の皆さまのご理解と多大な協力を頂き、誠にありがとうございました。また、調査指導を賜りました諸先生方にも、あらためて御礼申し上げます。

平成30年3月

島根県大田市教育委員会

教育長 大 國 晴 雄

例 言

1. 本書は、鳥根県大田市大森町に所在する史跡石見銀山遺跡の発掘調査概要である。
2. 調査は国庫補助事業として大田市教育委員会が事業主体となって実施した。
3. 本書は、平成 29 年度の昆布山谷地区、金森家地点・豊栄神社地点及び、伝統的建造物群保存地区で実施した調査の概要をまとめたものである。
4. 調査体制は下記のとおりである。

〔石見銀山遺跡調査整備活用委員会〕

| | |
|--------------------------|---------------------------|
| 太田洋子 (熊谷家住宅家の女たち代表) | 黒田乃生 (筑波大学大学院教授) |
| 高安克己 (鳥根大学名誉教授) | 田邊征夫 ((公財)大阪府文化財センター理事長) |
| 田中哲雄 (元東北芸術工科大学教授) | 玉串和代 (元鳥根県立古代出雲歴史博物館館長) |
| 内藤ユミイザベル (日本イコモス国内委員会理事) | 中塩 弘 (DOWAホールディングス(株)取締役) |
| 仲野義文 (石見銀山資料館館長) | 中村俊郎 (中村ブレイス(株)代表取締役会長) |
| 村田信夫 (歴史的建造物修復建築家) | 和上豊子 (元石見銀山ガイドの会会長) |

〔石見銀山遺跡調査専門委員会〕

| | |
|---------------------------|------------------------|
| 井上雅仁 (鳥根県立三瓶自然館学芸課課長代理) | 大橋泰夫 (鳥根大学法文学部教授) |
| 岡美穂子 (東京大学史料編纂所准教授) | 黒田乃生 (筑波大学大学院教授) |
| 高妻洋成 (奈良文化財研究所埋蔵文化財センター長) | 佐々木愛 (鳥根大学法文学部教授) |
| 田邊征夫 ((公財)大阪府文化財センター理事長) | 津村眞輝子 (古代オリエント博物館研究部長) |
| 中西哲也 (九州大学総合研究博物館准教授) | 仲野義文 (石見銀山資料館館長) |
| 原田洋一郎 (東京都立産業技術高等専門学校教授) | 松村恵司 (奈良文化財研究所所長) |
| 山村亜紀 (京都大学大学院准教授) | |

〔事務局〕 大田市教育委員会教育部石見銀山課

〔調査員〕 山手貴生・新川 隆・尾村 勝 (大田市教育委員会教育部石見銀山課)

〔遺物整理〕 高村玲子・井上伸子・浅野美貴

〔調査指導〕 文化庁記念物課、独立行政法人奈良文化財研究所、鳥根県教育委員会

5. 挿図の縮尺は、図中に示した。
6. 挿図中の座標は、昆布山谷地区は世界測地系を、金森家地点・豊栄神社地点は旧日本測地系の座標を使用した。またレベル高は標高を示す。
7. Fig. 1・Fig. 2は国土交通省国土地理院発行の地形図を縮小編集し、一部加筆して使用した。
8. 本文中に使用した略号は下記のとおりである。
SB - 住居跡 SD - 溝跡 SK - 土坑 SP - 柱穴 SW - 石垣・石積み SX - 炉跡、特殊遺構
9. 挿図中のマンセル表記及び土色は農林水産省技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』によった。
10. 発掘調査に当たっては大橋泰夫氏より、現地指導を賜った。
11. 昆布山谷地区第5地点の土壌サンプル採取は、鳥根県古代出雲歴史博物館学芸員の澤田正明氏の立会いの下で実施した。
12. 本書の執筆は第2章第4節1項を新川・近藤可奈・島田莉菜が、それ以外を山手が行った。本文中の挿図は、遺構図については尾村が、遺物実測図については新川が中心になって作成した。写真については、遺構写真は各担当者が、遺物写真については山手が撮影した。編集は筆者協議の上、新川が行った。
13. 出土資料及び実測図・写真などは大田市教育委員会で保管している。

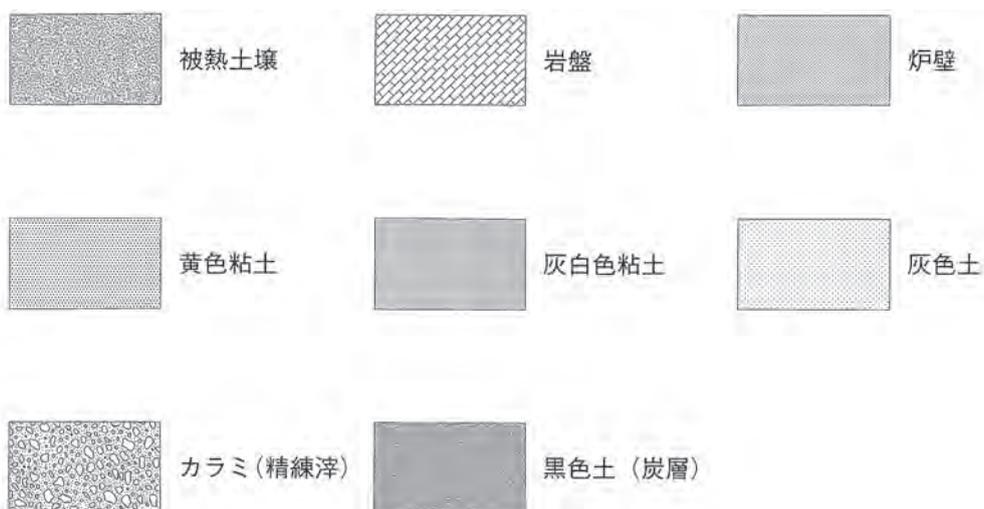
凡 例

1. 図版の表現

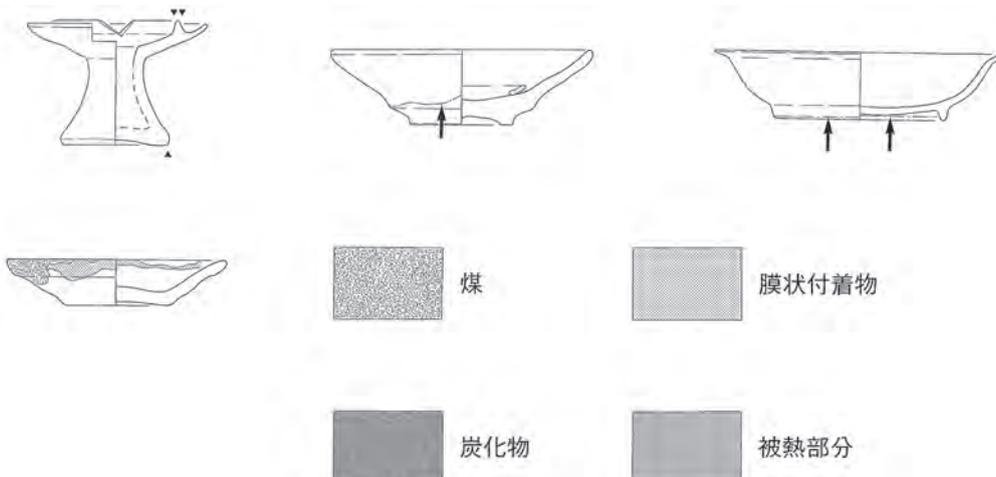
遺構・遺物図版中における表記は下記による。

これ以外のものについては個別に図中に示した。

〔遺 構〕



〔遺 物〕



図中の▼印あるいは一点鎖線(図中↑箇所)は施釉範囲の境界を示す。

2. 本文中の語句

以下の語句については、カタカナ表記に統一し、その意味を定義しておく。

ズ リ・・・選鉱過程にて除去される化学的変化に起因しない目的外鉱物をいう

ユリカス・・・比重選鉱により除去された砂粒

カ ラ ミ・・・広義の製錬工程にて排出された鉱滓

本文目次

| | |
|---------------------|----|
| 第1章 遺跡の概要 | |
| 第1節 遺跡の位置と概要 | 1 |
| 第2節 平成29（2017）年度の調査 | 2 |
| 第2章 昆布山谷地区の調査 | |
| 第1節 調査地の周辺環境 | 5 |
| 第2節 調査の概要 | 5 |
| 第3節 第5地点I区 | 10 |
| 第4節 第5地点第1トレンチ | 25 |
| 第5節 小結 | 29 |
| 第3章 金森家地点の調査 | |
| 第1節 調査の概要 | 31 |
| 第2節 調査の成果 | 31 |
| 第3節 小結 | 39 |
| 第4章 豊栄神社地点の調査 | |
| 第1節 調査の概要 | 43 |
| 第2節 調査の成果 | 45 |
| 第3節 小結 | 48 |
| 第5章 本年度の試掘・立会調査 | |
| 第1節 平成29年度の調査地点 | 49 |
| 第2節 福石家地点の調査 | 49 |
| 第3節 林家地点の調査 | 53 |
| 第4節 ひまわり館地点の調査 | 57 |
| 第6章 総括 | |
| 第1節 昆布山谷地区 | 59 |
| 第2節 金森家地点 | 60 |
| 第3節 豊栄神社地点 | 61 |

挿図目次

| | | |
|---------|---|----|
| Fig. 1 | 石見銀山遺跡位置図 (S = 1 / 100,000) | 1 |
| Fig. 2 | 石見銀山遺跡調査地点位置図 (S = 1 / 20,000) | 4 |
| Fig. 3 | 昆布山谷地区調査地点位置図 (S = 1 / 1,500) | 6 |
| Fig. 4 | 昆布山谷地区第5地点検出遺構配置図 (S = 1 / 60) | 7 |
| Fig. 5 | 昆布山谷地区第5地点土層断面図Ⅰ (S = 1 / 40) | 8 |
| Fig. 6 | 昆布山谷地区第5地点土層断面図Ⅱ (S = 1 / 40) | 9 |
| Fig. 7 | 昆布山谷地区第5地点岩盤加工遺構 SX 0 2 平面図・立面図 (S = 1 / 60) | 11 |
| Fig. 8 | 昆布山谷地区第5地点 SK 0 3・0 4 平面図・土層断面図 (S = 1 / 40) | 12 |
| Fig. 9 | 昆布山谷地区第5地点 SK 0 3・0 4 石積み立面図 (S = 1 / 40) | 13 |
| Fig. 10 | 昆布山谷地区第5地点 SK 0 5 平面図・立面図・土層断面図 (S = 1 / 40) | 14 |
| Fig. 11 | 昆布山谷地区第5地点 SD 0 9～1 1 平面図・土層断面図 (S = 1 / 40) | 15 |
| Fig. 12 | 昆布山谷地区第5地点 SX 2 8・SD 0 5 平面図・土層断面図 (S = 1 / 20) | 17 |
| Fig. 13 | 昆布山谷地区第5地点出土遺物実測図Ⅰ (S = 1 / 2、1 / 3、1 / 4) | 20 |
| Fig. 14 | 昆布山谷地区第5地点出土遺物実測図Ⅱ (S = 1 / 3) | 22 |
| Fig. 15 | 昆布山谷地区第5地点出土遺物実測図Ⅲ (S = 1 / 2、1 / 3、1 / 4) | 24 |
| Fig. 16 | 昆布山谷地区第5地点第1トレンチ平面図・土層断面図 (S = 1 / 40) | 26 |
| Fig. 17 | 昆布山谷地区第5地点第1トレンチ平面図・立面図 (S = 1 / 40) | 27 |
| Fig. 18 | 昆布山谷地区第5地点第1トレンチ出土遺物実測図 (1 / 2、1 / 3、1 / 6) | 29 |
| Fig. 19 | 大森銀山伝建地区内発掘調査・試掘・立会地点位置図 (S = 1 / 10,000) | 30 |
| Fig. 20 | 金森家地点周辺地形図・調査区配置図 (S = 1 / 500) | 32 |
| Fig. 21 | 金森家地点トレンチ配置図 (S = 1 / 100) | 33 |
| Fig. 22 | 金森家地点トレンチ平面図 (S = 1 / 60) | 34 |
| Fig. 23 | 金森家地点トレンチ土層断面図 (S = 1 / 60) | 35 |
| Fig. 24 | 金森家地点 SK 0 1 平面図・断面図 (S = 1 / 15) | 37 |
| Fig. 25 | 金森家地点 SK 0 2 平面図・土層断面図 (S = 1 / 15) | 38 |
| Fig. 26 | 金森家地点出土遺物実測図Ⅰ (S = 1 / 1、1 / 4) | 40 |
| Fig. 27 | 金森家地点出土遺物実測図Ⅱ (S = 1 / 3、1 / 4) | 41 |
| Fig. 28 | 豊栄神社地点調査区配置図 (S = 1 / 500) | 44 |
| Fig. 29 | 豊栄神社地点トレンチ平面図・土層断面図Ⅰ (S = 1 / 40) | 46 |
| Fig. 30 | 豊栄神社地点トレンチ平面図・土層断面図Ⅱ (S = 1 / 40) | 47 |
| Fig. 31 | 豊栄神社地点出土遺物実測図 (S = 1 / 2、1 / 3) | 48 |
| Fig. 32 | 福石家地点検出遺構配置図 (S = 1 / 80) | 50 |
| Fig. 33 | 福石家地点トレンチ平面図・土層断面図 (S = 1 / 40) | 51 |
| Fig. 34 | 福石家地点 SX 0 1～SX 0 3 平面図・土層断面図 (S = 1 / 20) | 52 |
| Fig. 35 | 林家地点トレンチ配置図・土層断面図 (S = 1 / 80) | 54 |
| Fig. 36 | 林家地点出土遺物実測図 (S = 1 / 2、1 / 3) | 55 |
| Fig. 37 | ひまわり館地点トレンチ平面図 (S = 1 / 15) | 57 |
| Fig. 38 | ひまわり館地点出土遺物実測図 (S = 1 / 3) | 58 |

図版目次

| | |
|-------------------------------------|-------------------------------------|
| 巻頭図版1 昆布山谷地区第5地点完掘状況(西より) | PL.14 昆布山谷地区第5地点 SK06 検出状況(南東より) |
| 昆布山谷地区第5地点第1トレンチ完掘状況(北より) | 同 SK06 掘下げ状況(東より) |
| 巻頭図版2 昆布山谷地区第5地点SX 28・SD 05(西より) | 同 南北トレンチ西壁土層断面(北東より) |
| 昆布山谷地区第5地点SK 03・SK 04(南東より) | 同 調査区北端部断割り状況(南東より) |
| PL.01 昆布山谷地区第5地点 完掘状況(南西より) | 同 発掘調査現地説明会 |
| 同 調査風景(北西より) | PL.15 昆布山谷地区第5地点 第1トレンチ 調査前(北西より) |
| 同 調査風景(南西より) | 同 第1遺構面検出状況(東より) |
| 同 南端部間歩(東より) | 同 第1遺構面検出状況(南東より) |
| PL.02 昆布山谷地区第5地点 東壁(南西より) | 同 瓦積遺構検出状況(東より) |
| 同 南壁(北西より) | 同 瓦積遺構検出状況(北東より) |
| PL.03 昆布山谷地区第5地点拡張部 第1遺構面検出状況(南西より) | PL.16 昆布山谷地区第5地点第1トレンチSW07検出状況(東より) |
| 昆布山谷地区第5地点 SK03 検出状況(南東より) | 同 SW07検出状況(北より) |
| PL.04 昆布山谷地区第5地点 SK03 掘下状況(南西より) | PL.17 昆布山谷地区第5地点第1トレンチSW07検出状況(東より) |
| 同 (西より) | 同 SW07南部検出状況(北東より) |
| PL.05 昆布山谷地区第5地点 SK03 掘下状況(南東より) | 同 SW07北部検出状況(北東より) |
| 同 SK03 南壁(北西より) | 同 SW07上面礎石検出状況(北西より) |
| 同 東西土層断面(北西より) | 同 断割土層断面(北より) |
| 同 南北土層断面①(北東より) | PL.18 昆布山谷地区第5地点 第1トレンチ 西壁(北より) |
| 同 南北土層断面②(北東より) | 同 第1トレンチ 西壁(東より) |
| 同 南北土層断面③(北東より) | PL.19 昆布山谷地区第5地点 第1トレンチ 東壁(南より) |
| 同 南北土層断面②南半(北東より) | 同 第1トレンチ 東壁(西より) |
| 同 南北土層断面②北半(北東より) | PL.20 昆布山谷地区第5地点 第1トレンチ 南壁(北西より) |
| PL.06 昆布山谷地区第5地点 南半部完掘状況(南西より) | 同 東壁北半(南西より) |
| 同 SK03 完掘状況(南東より) | 同 北端部サブトレンチ東壁(南西より) |
| PL.07 昆布山谷地区第5地点 SK03 下層断面(北西より) | 同 北端部サブトレンチ西壁(北東より) |
| 同 SK03 下層(SD09)断面(北東より) | 同 北端部サブトレンチ北壁(南東より) |
| 同 SK03 下層断面(北東より) | PL.21 昆布山谷地区第5地点 第1トレンチ 完掘(北より) |
| 同 SK03 下層(SD09)断面(南東より) | 同 完掘(北西より) |
| 同 SK03 北面石積検出状況(南東より) | 同 SW07・SW08 検出状況(北東より) |
| PL.08 昆布山谷地区第5地点 SK04 完掘状況(南東より) | 同 SW08 検出状況(北より) |
| 同 南半完掘状況(南東より) | PL.22 金森家地点 北半 調査前(西より) |
| PL.09 昆布山谷地区第5地点 SK05 検出状況(北東より) | 同 第1・2トレンチ建物構築面検出状況(西より) |
| 同 SK05 半截状況(北東より) | 同 第1トレンチ断層検出状況(西より) |
| PL.10 昆布山谷地区第5地点 SK05 半截状況(東より) | PL.23 金森家地点 第1・2トレンチ 完掘(西より) |
| 同 SK05 東壁検出状況(南西より) | 同 第1トレンチ東部北壁土層断面(南西より) |
| 同 SK05 土層断面(北西より) | 同 第1トレンチ西部北壁土層断面(南東より) |
| 同 SK05 南端付近刻込み(北西より) | 同 第1トレンチ中央部北壁土層断面(南西より) |
| PL.11 昆布山谷地区第5地点 第4遺構面検出状況(北より) | 同 第1トレンチ東端北壁土層断面(南西より) |
| 同 SD08 完掘状況(北より) | PL.24 金森家地点 第2トレンチ 完掘(東より) |
| 同 トレンチ北面土層断面(南東より) | 同 東部南壁(北東より) |
| 同 SD09 土層断面(南東より) | 同 中央部南壁(北東より) |
| PL.12 昆布山谷地区第5地点 SX28 検出状況(南西より) | 同 中央部南壁(北西より) |
| 同 SX28 検出状況(北より) | 同 東部南壁(北西より) |
| 同 SX28 上層断割状況(北西より) | 同 東部南壁(北東より) |
| 同 SX28 上層断割状況(南西より) | 同 西部南壁(北西より) |
| 同 SX28 上層断割状況(南東より) | PL.25 金森家地点 第1トレンチSP02 検出状況(南より) |
| PL.13 昆布山谷地区第5地点 SX28 調査完了状況(南西より) | 同 第2トレンチSP03 掘下状況(北より) |
| 同 SX28 半截状況(南より) | 同 SP04 据付痕跡断面(北より) |
| 同 SX28 底面(北西より) | 同 SP04 据付痕跡(北西より) |
| 同 SX28 土層断面(南東より) | 同 SP04 据付痕跡(北西より) |
| 同 SX28 炉壁(北西より) | 同 SP05 据付痕跡(北東より) |

| | | | | |
|--------------|-----------|------------------------|---------------------------------|-----------------------|
| | 同 | SP06 据付痕跡 (北より) | 同 | 第2トレンチ 東半土層断面 (北より) |
| | 同 | SP07 据付痕跡 (北より) | 同 | 第2トレンチ 西半土層断面 (北より) |
| PL.26 金森家地点 | 南半 | 調査前 (東より) | PL.36 豊栄神社地点 | 第1トレンチ南端礎石 (北より) |
| | 同 | 第3・4トレンチ 完掘 (南より) | 同 | 第1トレンチ北端礎石 (南より) |
| PL.27 金森家地点 | 調査区北端 | 調査前 (東より) | 同 | 第2トレンチ東端礎石 (西より) |
| | 同 | 第3トレンチ南半 遺構面検出状況 (南より) | 同 | 第2トレンチ西端礎石 (東より) |
| | 同 | 第3トレンチ南半 西壁 (北東より) | 同 | 第3トレンチ完掘 (北東より) |
| | 同 | 第3トレンチ南半 西壁 (南より) | 同 | 第3トレンチ南側礎石 (北東より) |
| | 同 | 第3トレンチ北端石列検出状況 (北東より) | 同 | 第3トレンチ東壁土層断面 (東より) |
| | 同 | 第3トレンチ北半西壁 (北東より) | 同 | 第3トレンチ北壁土層断面 (北より) |
| PL.28 金森家地点 | 第3・4トレンチ | 完掘 (北より) | PL.37 豊栄神社地点 | 第4トレンチ調査前 (北西より) |
| | 同 | 第4トレンチ 建物構築面検出状況 (南より) | 同 | 第4トレンチ延石除去状況 (西より) |
| | 同 | 第4トレンチ 完掘 (南より) | 同 | 第4トレンチ完掘 (南より) |
| PL.29 金森家地点 | 第4トレンチ | 北端完掘 (北より) | 同 | 第4トレンチ北壁土層断面 (北より) |
| | 同 | 第5トレンチ 木質検出状況 (南東より) | 同 | 第4トレンチ礎石・西壁土層断面 (西より) |
| | 同 | 第4トレンチ 北半盛土 (西より) | 同 | 第5トレンチ南側延石除去状況 (北より) |
| | 同 | 第2トレンチ SP10土層断面 (北より) | PL.38 豊栄神社地点 | 第5トレンチ東側延石除去状況 (北より) |
| | 同 | 第2トレンチ SP01検出状況 (北西より) | 同 | 第5トレンチ東側完掘 (北より) |
| | 同 | 第2トレンチ SP01完掘 (北より) | 同 | 第5トレンチ完掘 (南東より) |
| | 同 | 第4トレンチ SP08据付痕跡 (北より) | 同 | 第5トレンチ南側完掘 (北より) |
| | 同 | 第4トレンチ SP08据付痕跡 (西より) | 同 | 第5トレンチ南壁土層断面 (南より) |
| PL.30 金森家地点 | 第4トレンチ | 東壁 (北西より) | 同 | 第5トレンチ東壁土層断面 (東より) |
| | 同 | 第4トレンチ北端 東壁 (西より) | PL.39 福石家地点 | SB01検出状況 (南より) |
| | 同 | 第4トレンチ北端 西壁 (北東より) | 同 | SX01~SX03検出状況 (東より) |
| | 同 | 第4トレンチ北半 東壁 (北西より) | 同 | SX01土層断面 (南東より) |
| | 同 | 第4トレンチ中央部 東壁 (北西より) | 同 | SX01~SX03完掘 (東より) |
| | 同 | 第4トレンチ南半 西壁 (北東より) | 同 | SX02土層断面 (東より) |
| | 同 | 第4トレンチ南半 東壁 (南西より) | PL.40 福石家地点 | SB01石敷検出状況 (北西より) |
| | 同 | 第4トレンチ南半 西壁 (南東より) | 同 | SB02検出状況 (南より) |
| PL.31 金森家地点 | 第5トレンチ | 完掘 (北より) | 同 | 池跡トレンチ完掘 (南西より) |
| | 同 | 第5トレンチ 北半東壁 (西より) | 同 | 池跡トレンチ完掘 (南東より) |
| | 同 | 第5トレンチ 南半東壁 (北西より) | 林家地点 | 調査前 (北より) |
| | 同 | 第5トレンチ 南半西壁 (東より) | PL.41 林家地点 | 第1トレンチ遺構面検出状況 (南東より) |
| | 同 | 第5トレンチ 北側石積 (北より) | 同 | 第1トレンチ遺構面検出状況 (北西より) |
| | 同 | 第6トレンチ 南壁 (北西より) | 同 | 第2トレンチ完掘 (北西より) |
| | 同 | 第6トレンチ 西端石列検出状況 (西より) | 同 | 第2トレンチ完掘 (南西より) |
| PL.32 金森家地点 | SK01 | 甕検出状況 (南から) | PL.42 林家地点 | 第2トレンチ石敷遺構検出状況 (東より) |
| | 同 | SK01 陶板検出状況 (南西より) | 同 | 第3トレンチ完掘 (北西より) |
| | 同 | SK01 炭化物出土状況 (南西より) | 同 | 第1トレンチ南壁 (北より) |
| | 同 | SK01 木箱出土状況 (南より) | 同 | 第1トレンチ南壁 (北より) |
| | 同 | SK01 完掘 (南より) | 同 | 第2トレンチ西壁 (南より) |
| PL.33 金森家地点 | SK02 | 甕検出状況 (南から) | 同 | 第2トレンチ西壁 (南より) |
| | 同 | SK02 検出状況 (南より) | 同 | 第2トレンチ南東部西壁 (南東より) |
| | 同 | SK02 平瓦・建瓦出土状況 (南から) | 同 | 第2トレンチ南壁 (東より) |
| | 同 | SK02 完掘 (南より) | PL.43 昆布山谷地区第5地点出土遺物 I | |
| | 同 | 調査風景 (西より) | PL.44 昆布山谷地区第5地点出土遺物 II | |
| PL.34 豊栄神社地点 | 調査前 | (西より) | PL.45 昆布山谷地区第5地点出土遺物 III | |
| | 同 | 遺構面検出状況 (西より) | PL.46 金森家地点 SK01 出土遺物 | |
| PL.35 豊栄神社地点 | 建物構築面検出状況 | (西より) | PL.47 金森家地点 SK02 出土遺物 I | |
| | 同 | 第1トレンチ 南半土層断面 (東より) | PL.48 金森家地点SK02・豊栄神社地点・林家地点出土遺物 | |
| | 同 | 第1トレンチ 北半土層断面 (東より) | PL.49 豊栄神社地点・林家地点・ひまわり館地点出土遺物 | |

表目次

| | | |
|--------|-------------------------|----|
| Tab. 1 | 石見銀山遺跡調査一覧 | 3 |
| Tab. 2 | 昆布山谷地区第5地点出土遺物一覧表 I | 21 |
| Tab. 3 | 昆布山谷地区第5地点出土遺物一覧表 II | 23 |
| Tab. 4 | 昆布山谷地区第5地点出土遺物一覧表 III | 25 |
| Tab. 5 | 昆布山谷地区第5地点第1トレンチ出土遺物一覧表 | 29 |
| Tab. 6 | 金森家地点出土遺物一覧表 | 42 |
| Tab. 7 | 豊栄神社地点出土遺物一覧表 | 48 |
| Tab. 8 | 林家地点出土遺物一覧表 | 56 |
| Tab. 9 | ひまわり館地点出土遺物一覧表 | 58 |

第1章 遺跡の概要

第1節 遺跡の位置と概要

第1項 石見銀山遺跡の位置と概要 (Fig. 1)

石見銀山遺跡は、島根県中央部の大田市に位置する鉱山遺跡である。遺跡の中心部は日本海から直線距離で約6kmの内陸部に位置する。遺跡の周辺には大江高山火山群の一角である仙ノ山や、要害山などの海拔400～500mの山々が連なり、山間には深い谷と水系が発達している。山地から海岸に至るまでに平地は極めて少なく、銀を運んだ街道は中小の丘陵や台地、谷間

の水系の間を縫って設けられている。港と港町が位置する沿岸部にはリアス式海岸が展開し、港の奥部には狭い谷が発達している。

本遺跡は16世紀から20世紀にかけて鉱業活動が行われた鉱山跡と鉱山町を中心に、周囲の山城跡や銀鉱山から港までを結ぶ2本の街道、銀鉱石・銀の積出しや銀山で必要な諸物資を搬入した港湾などからなる複合遺跡である。銀の生産から搬出に至る鉱山開発の社会機構及び社会基盤施設の総体を示すこれらの良好な

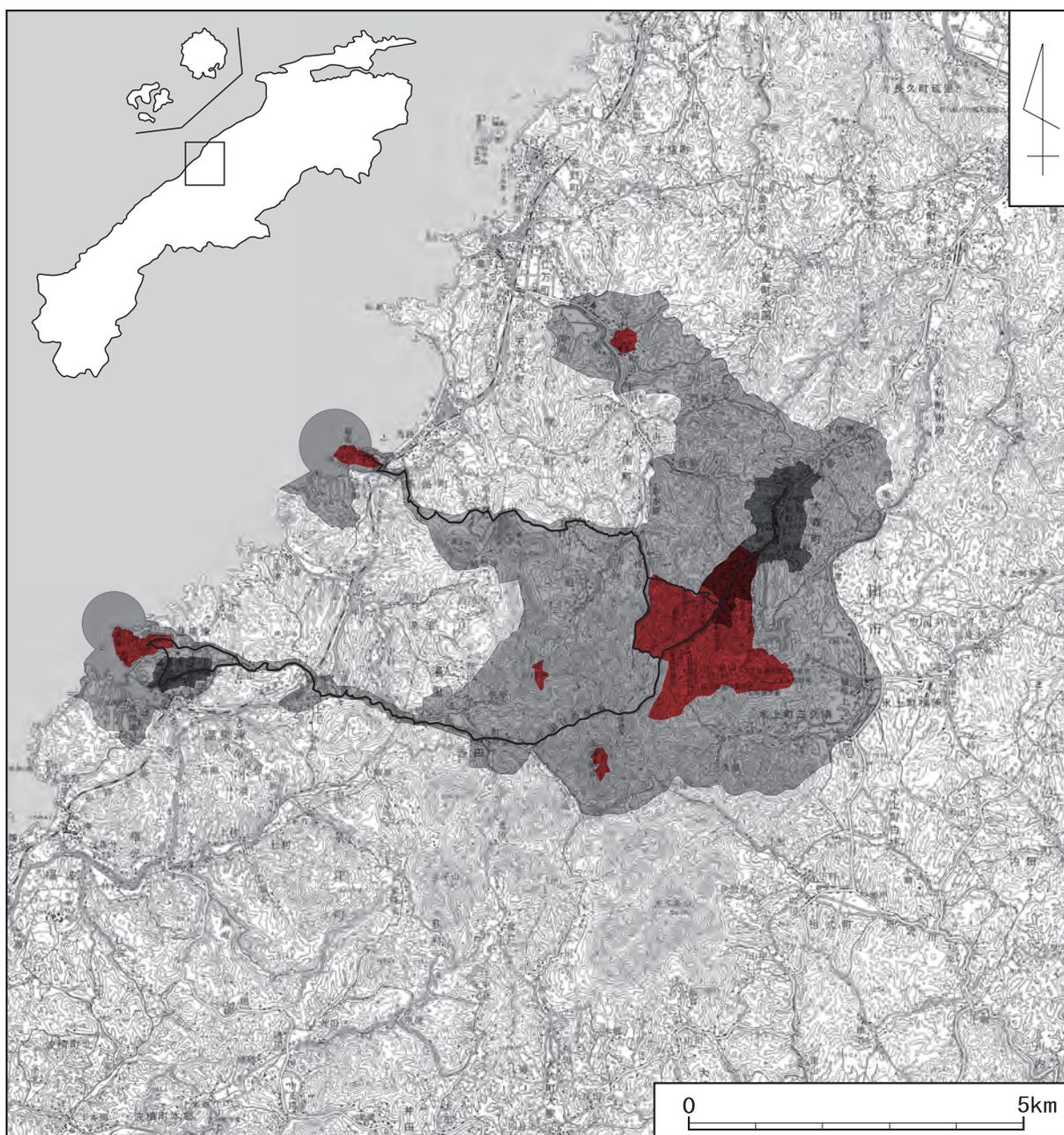


Fig. 1 石見銀山遺跡位置図 (S = 1 / 100,000)

遺跡群は、鉾山町や港湾などの建造物群とともに、当時の土地利用の在り方と機能の一部が現在にも伝達されつつ、自然と共生した顕著な普遍的価値を持つ文化的景観の事例として、平成 19(2007)年にユネスコ世界遺産に登録された。

第2項 調査の経過 (Tab. 1)

石見銀山遺跡の発掘調査は、大田市教育委員会が昭和 58(1983)年度から開始した。昭和 60(1985)年度には鳥根県教育委員会によって『石見銀山遺跡関連遺跡分布調査報告書』が刊行されて、石見銀山遺跡とその周辺の銀山関連遺跡の分布が明らかとなった。昭和 61(1986)年度には県教委によって『石見銀山遺跡総合整備計画策定報告書』が刊行されて、拠点箇所での発掘調査を継続することが、石見銀山の歴史と遺跡を明らかとしていく上で重要であるという指針が示された。その指針に基づいて、昭和 63(1988)年からは県教委と市教委が共同で、平成 18(2006)年からは市教委が主体となって毎年継続して発掘調査を実施している。

平成 8(1996)年度からは石見銀山遺跡総合調査が開始し、平成 14(2002)年度にはその成果として、石見銀山遺跡の広域的な保存を目的とした史跡範囲の追加指定が行われた。その後、調査の進展と共にさらに史跡範囲の拡大と保護措置が図られ、平成 20(2008)年には、史跡指定総面積は 389ha となった。これまでの調査地点と調査の経過は Tab. 1のとおりである。

第2節 平成 29 (2017) 年度の調査

第1項 調査の概要

平成 29 年度は、昆布山谷地区と大田市大森銀山伝統的建造物群保存地区(以下、「伝建地区」と称す)内の金森家地点・豊栄神社地点の発掘調査を実施した。また、史跡地内・伝建地区内・世界遺産指定範囲内において小規模な掘り下げを伴う現状変更行為が発生した際には試掘・立会調査を随時実施し、遺構・遺物の確認と記録を行った。

昆布山谷地区の発掘調査は、平成 22(2010)年度から実施しており、本年度で 8 年目となる。本年度の発掘調査は、第 5 地点を対象として実施した。昨年度の調査では、第 5 地点において選鉱に関連する可能性がある遺構の一部が検出されていたほか、江戸時代前半の遺構

面上に大量のユリカスが廃棄されていることが確認されていた。さらに、調査区端では選鉱に関連する可能性のある遺構が検出されており、当該期において選鉱活動が行われていた可能性が想定されていた。第 8 地点の谷筋に設定したトレンチでは道路遺構及び、道路と平坦面を区画する石垣が検出され、町並みの様相が明らかとなってきた。本年度は、第 5 地点の調査範囲を拡大して選鉱関連遺構全体の検出を図るとともに、遺構面上における活動内容の把握・確認をすることと、より古い時期の遺構を検出して昆布山谷における開発当初の様相を明らかとすることを目的として発掘調査を実施した。また、第 5 地点東側の道筋にトレンチを設定して石垣や道路遺構の検出を行った。昆布山谷地区の発掘調査に当たっては 9 月 4 日～16 日にかけて、鳥根大学考古学研究室と共同で調査を行った。

大森伝建地区内の金森家地点と豊栄神社地点では、保存修理事業に先立つ発掘調査を実施した。金森家地点では主屋床下、豊栄神社地点では拝殿床下をそれぞれ対象とした。金森家地点では、現在の建物に関連する遺構としては、主屋基礎の据付け痕や、工事着工前の地鎮に関連する遺構が検出された。また、前身建物に関連する遺構として、礎石が複数検出された。豊栄神社地点では拝殿基礎の堆積状況が確認でき、建築に当たっての地業が明らかとなった。

試掘調査は伝建地区の福石家地点と林家地点の 2 カ所で、立会調査は伝建地区で 3 カ所、史跡地内で 2 カ所実施した。

第2項 指導関係及び公開事業

本年度の調査に関連して、10 月 25 日に大橋泰夫氏(鳥根大学教授)から昆布山谷地区発掘調査現地にて、調査成果の検証や今後の調査方針などに関する指導を頂いた。また、小野正敏氏(元国立歴史民俗博物館教授)からは、1 月 29 日～31 日にかけて、石見銀山遺跡のこれまでの発掘調査で出土した陶磁器類の、時期及び産地について指導を頂いた。

公開事業としては、速報展と発掘調査現地説明会を開催した。速報展は発掘調査の成果を公表するもので、6 月 28 日～8 月 28 日にかけて石見銀山世界遺産センターで開催した。現地説明会は 12 月 10 日に、昆布山谷地区で開催した。いずれも多くの見学者があった。

Tab. 1 石見銀山遺跡調査一覧

| 年 度 | 西 暦 | 調 査 | 調 査 地 点 | 備 考 |
|---------|------|------|--|-----------------|
| 昭和 58 年 | 1983 | 発掘調査 | ①代官所跡、④蔵泉寺口番所跡 | 石見銀山遺跡総合整備計画の策定 |
| 60 年 | 1985 | 分布調査 | 大田市、温泉津町、仁摩町、邑智町、赤来町、大和村、羽須美村に所在する石見銀山関連遺跡 | |
| 63 年 | 1988 | 発掘調査 | ⑨龍源寺間歩 | |
| 平成元年 | 1989 | 発掘調査 | 蔵泉寺口番所跡、②向陣屋跡、⑧上市場 | |
| 2 年 | 1990 | 発掘調査 | 蔵泉寺口番所跡、⑥大龍寺谷、③旧河島家 | |
| 3 年 | 1991 | 発掘調査 | ⑤下河原吹屋跡 | |
| 4 年 | 1992 | 発掘調査 | ⑦山吹城跡下屋敷 | |
| 5 年 | 1993 | 発掘調査 | ⑫石銀千畳敷 | |
| 6 年 | 1994 | 発掘調査 | 石銀千畳敷 | |
| 7 年 | 1995 | 発掘調査 | 石銀千畳敷 | |
| 8 年 | 1996 | 発掘調査 | ⑬石銀藤田 | 総合調査開始 |
| 9 年 | 1997 | 発掘調査 | ⑰宮ノ前、⑪出土谷、石銀藤田 | |
| 10 年 | 1998 | 発掘調査 | ⑩栃畑谷、石銀藤田、⑭於紅ヶ谷、⑮竹田 | |
| 11 年 | 1999 | 発掘調査 | 宮ノ前、石銀藤田、出土谷、竹田 | |
| 12 年 | 2000 | 発掘調査 | 宮ノ前、石銀藤田、出土谷、竹田 | |
| | | 分布調査 | 柑子谷 | |
| 13 年 | 2001 | 発掘調査 | 宮ノ前、於紅ヶ谷、出土谷、竹田、⑯本谷、町並み保存地区(阿部家、熊谷家) | |
| 14 年 | 2002 | 発掘調査 | 宮ノ前、於紅ヶ谷、出土谷、竹田、本谷、町並み保存地区(阿部家、熊谷家) | |
| 15 年 | 2003 | 発掘調査 | 宮ノ前、下河原下組、出土谷、本谷 | |
| 16 年 | 2004 | 発掘調査 | 宮ノ前、本谷、港湾集落、町並み保存地区 | |
| 17 年 | 2005 | 発掘調査 | 本谷、町並み保存地区(岡家) | |
| 18 年 | 2006 | 発掘調査 | 本谷、町並み保存地区(宗岡家) | |
| 19 年 | 2007 | 発掘調査 | ⑱安原谷、下河原、町並み保存地区(渡辺家) | 世界遺産登録 |
| 20 年 | 2008 | 発掘調査 | 安原谷、町並み保存地区(柳原家、渡辺家)、⑲清水谷製錬所跡 | |
| 21 年 | 2009 | 発掘調査 | 安原谷、本谷、町並み保存地区(杉谷家、渡辺家)、清水谷製錬所跡 | |
| 22 年 | 2010 | 発掘調査 | 安原谷、本谷、⑳昆布山谷、港湾集落 | |
| 23 年 | 2011 | 発掘調査 | 昆布山谷、石銀、町並み保存地区(旧大住家)、港湾集落 | |
| 24 年 | 2012 | 発掘調査 | 昆布山谷、港湾集落 | |
| 25 年 | 2013 | 発掘調査 | 昆布山谷 | |
| 26 年 | 2014 | 発掘調査 | 昆布山谷、町並み保存地区(宗岡家) | |
| 27 年 | 2015 | 発掘調査 | 昆布山谷、町並み保存地区(宗岡家)、㉑豊栄神社 | |
| 28 年 | 2016 | 発掘調査 | 昆布山谷、町並み保存地区(宗岡家、金森家) | |
| 29 年 | 2017 | 発掘調査 | 昆布山谷、町並み保存地区(金森家)、豊栄神社 | |

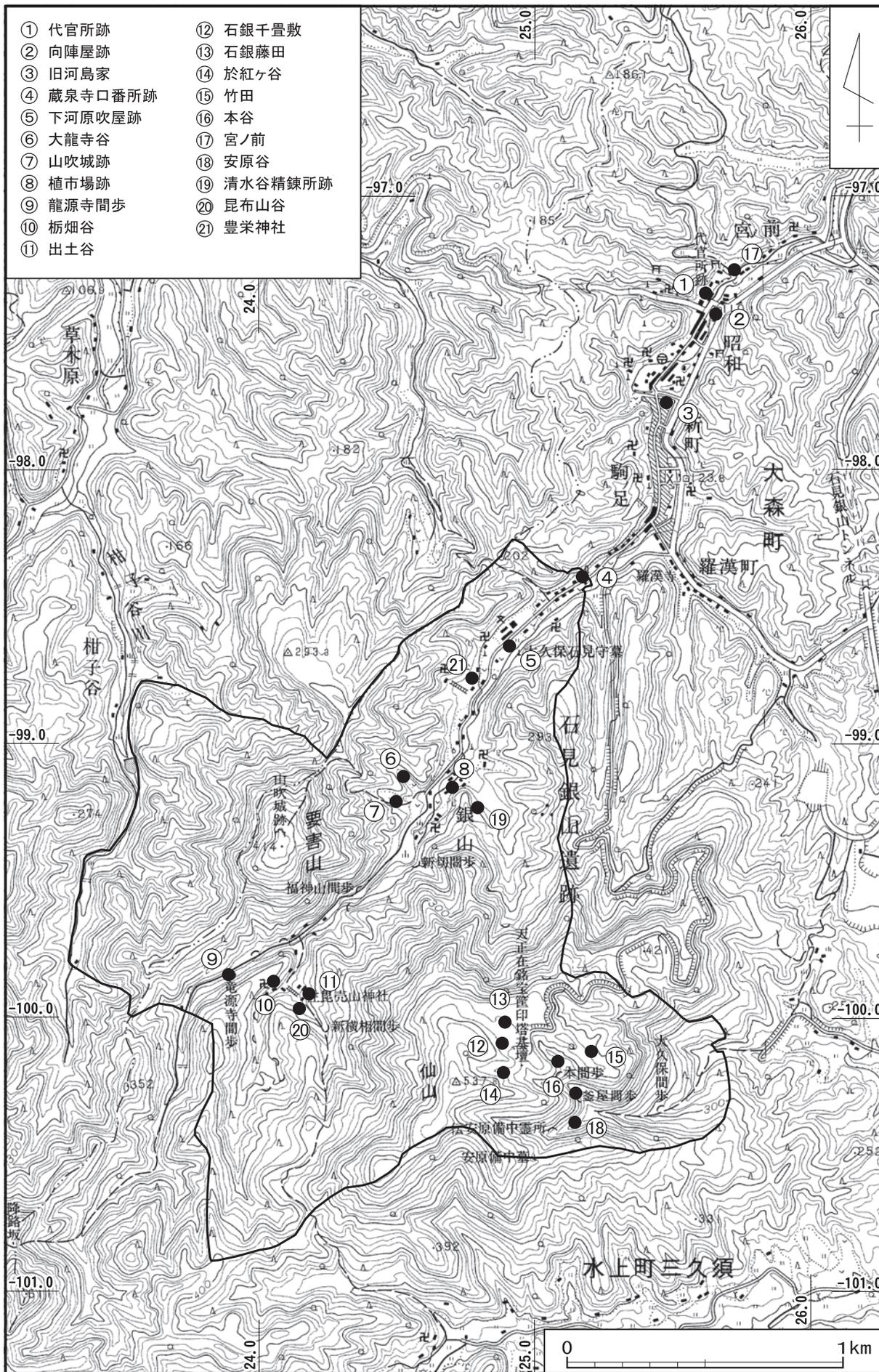


Fig. 2 石見銀山遺跡調査地点位置図 (S = 1 / 20,000)

第2章 昆布山谷地区の調査

第1節 調査地の周辺環境

昆布山谷は、仙ノ山の西側を南北方向に延びる谷である。「銀山柵内」の範囲の中では南西部に位置し、栃畑谷に接している。谷の入口には佐毘売山神社が所在し、谷筋や周辺の尾根上には長楽寺跡や虎岸寺跡などの寺跡や墓が点在している。昆布山谷周辺に点在する墓石には、紀年銘が天正年間(1573～1593年)まで遡るものも含まれており、16世紀代から利用されていたことが窺われる。

文献史料には、天文年間(1532～1555年)に昆布山谷での活動記録があることから、昆布山谷への居住が石見銀山の開発当初から始まっていたことが窺え、近代においても藤田組によって開発されるなど、石見銀山の開発初期から大正期の休山に至るまで利用されていた谷である。平成22(2010)年度から実施している発掘調査によっても江戸時代の前半期から近代に至るまでに、盛衰はあるものの継続的に利用されていた様相が確認できている。以上のように、昆布山谷は石見銀山の開発から隆盛、近代における再開発のいずれにも深く関わっており、石見銀山における鉱業活動や生活を知る上で重要な谷といえる。

第2節 調査の概要

第1項 調査の経緯と成果(Fig. 3)

昆布山谷地区の近辺では、これまでに佐毘売山神社を挟んで東側に位置する出土谷地区や、西側に隣接する栃畑谷地区で発掘調査が実施されており、16世紀後半に遡る遺構・遺物や、18世紀後半の銅製鍊にも関わる遺構が検出されている。昆布山谷地区の発掘調査は、平成22(2010)年度から開始され、本年度で8年目である。これまでに第1～8地点の調査が実施され、谷筋の広い範囲で江戸時代後半から幕末と、近代の遺構・遺物が見つかった。特に、第5地点においては平成26(2014)年度からの継続的な調査によって、江戸時代を通しての地形の変化や、利用の変遷が明らかとなりつつある。第6・7地点ではそれぞれで岩盤加工遺構が検出され、谷筋に露出した岩盤を加工し、

利用していたことが明らかとなっている。特に第6地点では、尾根上へと登る巨大な階段遺構(SX25)も検出された。

第8地点では道路と平坦面を区画する石垣(SW06)が検出され、かつての町並みを復元する上で重要な資料が得られている。トレンチの最下部では土壁の木舞が出土しており、隣接する平坦面にはかつて土壁を持った建物があったことが判明している。また、トレンチの堆積状況により、検出された石垣は幕末までは機能していたが、近代以降に発生した水害によって埋もれてしまったことも明らかとなった。

本年度は第5地点(大森町ニ270番地1)の発掘調査を実施した。第5地点は昆布山谷の入口に所在する佐毘売山神社から約130m登った場所に設定した調査地点で、新横相間歩や新横相上坑などに近接している。調査区の西側に岩盤加工遺構があり、その前面に広がる平坦面は石垣によって2段に区画されている。平成26(2014)年度から調査を開始し、継続的に調査を実施してきた調査地点である。これまでの発掘調査によって、調査区に広がる平坦面上からは江戸時代後半～幕末の建物が2棟と、近代の建物が1棟検出された。調査成果を踏まえた上で、下層確認トレンチを設定して深く掘り下げた結果、調査区の西部に位置する岩盤加工遺構(SX02)が17世紀前半頃には利用されていたことが明らかとなった。また、下層においては炉跡などが検出され、現在の地形が形成される以前には生産活動が行われていたことが判明していた。

また、平坦面と道との関係を把握し、空間の利用状況を明らかとすることを目的として、第5地点の東部にトレンチ(第1トレンチ)を設定して調査を実施した。第5地点第1トレンチでは、第8地点と同様に道路と石垣(SW07)が検出された。第8地点で検出されたSW06に比べ、調査地点では道路までが比較的浅かったため、下層確認を実施したところ、さらに古い石垣(SW08)が検出された。SW08の検出によって、江戸時代においては道や宅地の整備が継続的に行われていたことが明らかとなった。

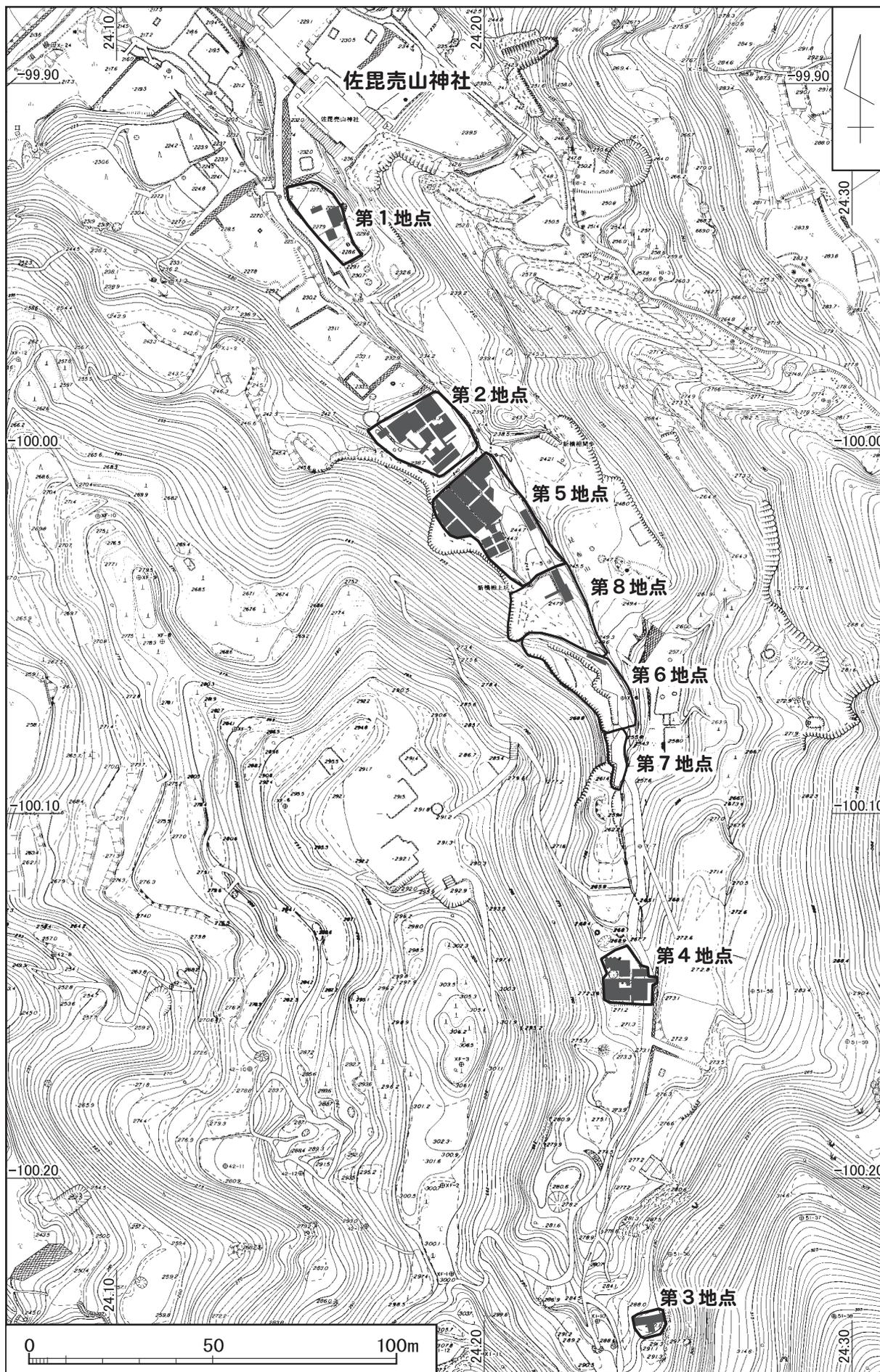


Fig. 3 昆布山谷地区調査地点位置図 (S = 1 / 1,500)



Fig. 4 昆布山谷地区第5地点検出遺構配置図 (S = 1 / 60)

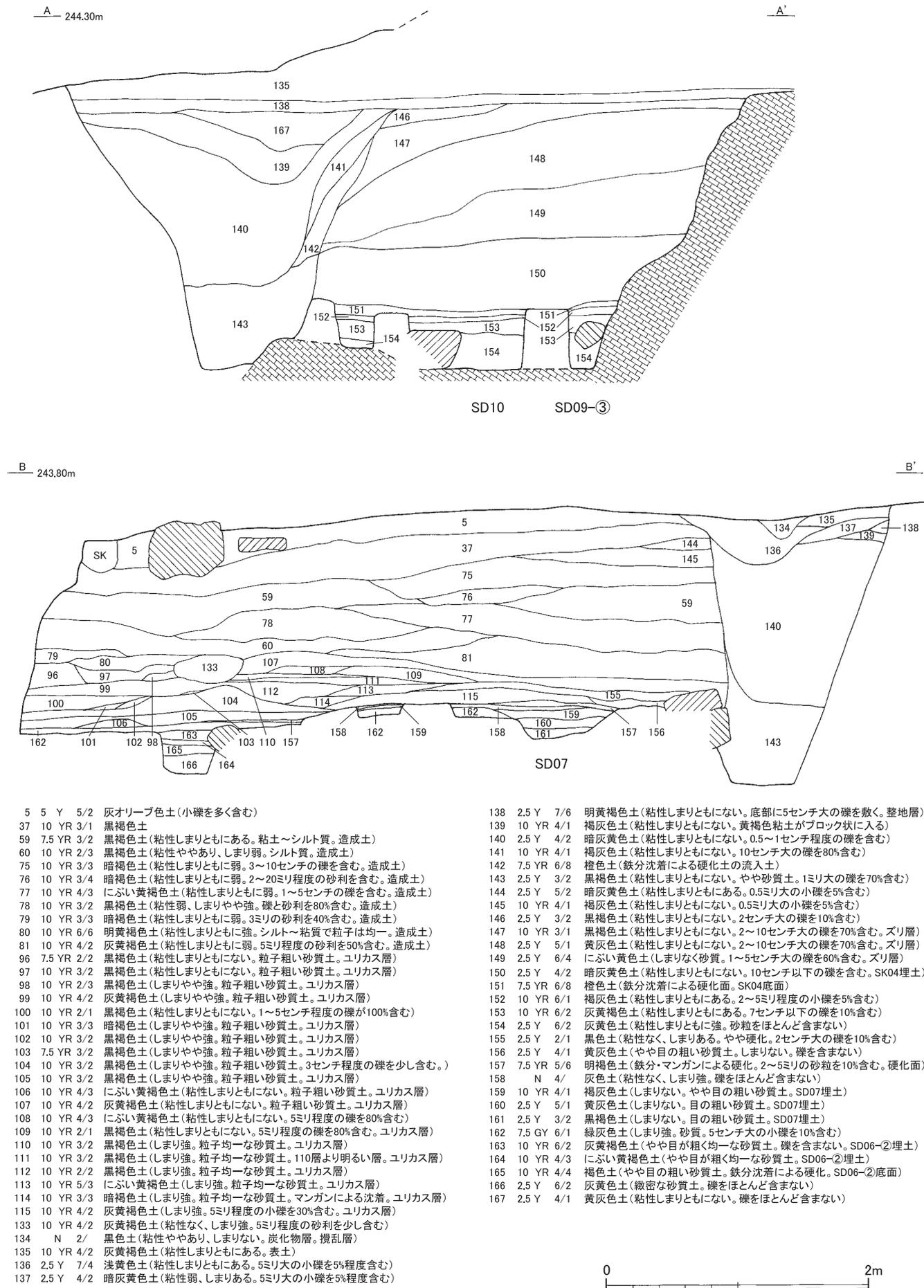
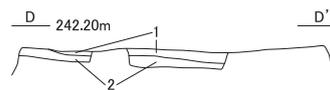
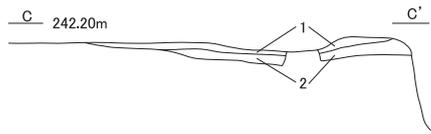
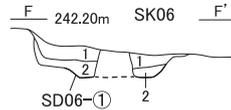
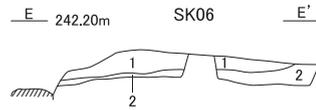


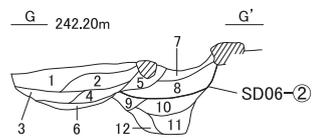
Fig. 5 昆布山谷地区第5地点土層断面図 I (S = 1 / 40)



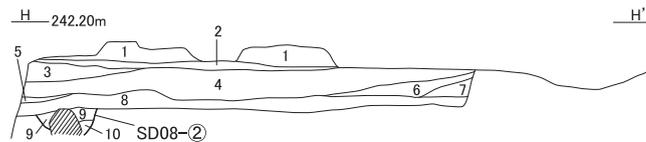
- 1 7.5 Y 7/4 浅黄色土(しまりあり。2~10センチ大の礫を40%含む。SX28上面整地層)
- 2 2.5 Y 3/2 黒褐色土(粘性なく、しまり弱。やや砂質。炭化物を多く含む)



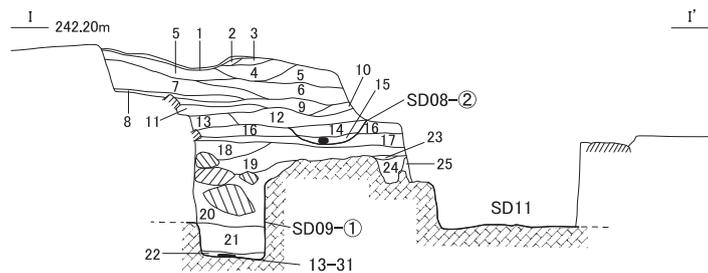
- 1 N 1.5/ 黒色土(やや砂質。緻密な炭化物層)
- 2 10 YR 3/3 暗褐色土(しまり弱。目の粗い砂質土。SD06-①埋土)



- 1 2.5 Y 7/3 浅黄色土(粘性しまりともにない。やや砂質。上面硬化)
- 2 2.5 Y 6/3 にぶい黄褐色土(しまりない。目の粗い均一な砂質土)
- 3 10 YR 4/6 オリーブ褐色土(かなり目の粗い砂質土。灰色粘土がブロック状に入る)
- 4 2.5 Y 6/4 にぶい黄褐色土(しまりない。2ミリ大の小礫を5%含む)
- 5 10 YR 5/1 褐灰色土(やや粘質で、しまりあり。砂粒を含む)
- 6 5 Y 5/1 灰色土(粘性弱、しまりない。緻密な砂質土)
- 7 5 Y 6/1 灰色土(粘性弱、しまり強。2ミリ大の小礫を5%含む。SD06-②埋土)
- 8 5 Y 5/2 灰オリーブ色土(粘性しまりともに弱。SD06-②埋土)
- 9 2.5 Y 4/1 黄灰色土(粘性しまりともにない。2~5ミリ大の小礫を30%含む)
- 10 10 YR 5/4 にぶい黄褐色土(粘性ない砂質土。上面硬化。SD06-②底面)
- 11 N 5/ 灰色土(粘性強。しまりあり。5ミリ大の小礫を5%含む)
- 12 10 YR 3/4 暗褐色土(粘性弱、しまりあり。やや砂質土)



- 1 7.5 Y 7/4 浅黄色土(しまりあり。2~10センチ大の礫を40%含む。SX28上面整地層)
- 2 10 YR 4/1 褐灰色土(やや目の粗い砂質土。炭化物を含む)
- 3 10 YR 5/3 にぶい黄褐色土(しまり弱。やや砂質)
- 4 2.5 Y 6/2 灰黄色土(しまり弱。やや砂質。2センチ大の礫を微量含む)
- 5 10 YR 6/4 にぶい黄褐色土(粘性強、しまりない)
- 6 2.5 Y 7/4 浅黄色土(やや砂質。明黄褐色粘土がブロック状に入る)
- 7 10 YR 4/3 にぶい黄褐色土(しまりない。目の粗い砂質土)
- 8 2.5 Y 4/2 暗黄褐色土(やや砂質。3~5ミリ大の粒子を10%含む)
- 9 10 YR 4/3 にぶい黄褐色土(しまり弱。2ミリの白色砂粒を含む。SD08-②埋土)
- 10 10 YR 4/1 褐灰色土(粘性強、しまりない。2ミリの白色砂粒を含む。SD-②埋土)



- 1 N 1.5/ 黒色土(3ミリ大の炭を含む炭化物層)
- 2 7.5 YR 6/6 明褐色土(しまりない。やや砂質。5ミリ大の小礫を5%含む)
- 3 5 Y 7/4 浅黄色土(しまりない。0.5~4センチ大の礫層)
- 4 7.5 YR 5/4 にぶい褐色土(やや砂質。上面は黒色の炭化物を含む焼土層)
- 5 10 YR 5/3 にぶい黄褐色土(しまり弱。やや砂質で礫は含まない)
- 6 2.5 Y 6/2 灰黄色土(しまり弱。やや砂質。2センチ大の礫を少量含む)
- 7 2.5 Y 5/3 黄褐色土(しまり弱。3センチ以下の小礫を10%含む)
- 8 2.5 Y 3/3 暗オリーブ褐色土(しまり弱。やや砂質)
- 9 2.5 Y 5/2 暗黄褐色土(しまり弱。やや砂質。黄褐色粘土をブロック状に含む)
- 10 10 YR 6/4 にぶい黄褐色土(粘性強、しまりない)
- 11 10 YR 3/1 黒褐色土(粘性強、しまり弱。炭化物を含む)
- 12 2.5 Y 4/2 暗黄褐色土(やや砂質。3~5ミリの粒子を10%含む)
- 13 2.5 Y 7/3 浅黄色土(粘性強、しまり弱。SD08-②検出遺構面)
- 14 10 YR 4/3 にぶい黄褐色土(しまり弱。2ミリ大の白色砂粒を少量含む。SD08-②埋土)
- 15 10 YR 4/1 褐灰色土(粘性強、しまりない。2ミリ大の白色砂粒を少量含む。SD08-②埋土)
- 16 2.5 Y 4/1 黄灰色土(粘性しまりともに弱。2ミリ大の砂粒を少量含む)
- 17 2.5 Y 5/2 暗黄褐色土(粘性強。2ミリ以下の砂粒を5%含む)
- 18 2.5 Y 8/3 浅黄色土(やや砂質。3~5センチ大の礫を30%含む)
- 19 2.5 Y 4/2 明黄褐色土(しまりあり。やや砂質。3センチ大の礫を20%含む)
- 20 2.5 Y 7/2 灰黄色土(しまりあり。やや目の粗い砂質土。SD09-①埋土)
- 21 5 Y 5/1 灰色土(粘性強、目の細かい粒子。SD09-①埋土)
- 22 2.5 Y 3/1 黒褐色土(粘性強、しまりない。有機質木片を含む。SD09-①埋土)
- 23 10 YR 6/2 灰黄褐色土(粘性しまりともに弱。砂粒をほとんど含まない)
- 24 10 YR 6/4 にぶい黄褐色土(しまり弱。やや砂質。2ミリ大の白色砂粒を10%含む)
- 25 2.5 Y 5/3 黄褐色土(粘性しまりともに弱。2ミリ大の砂粒を5%含む)



Fig. 6 昆布山谷地区第5地点土層断面図II (S = 1 / 40)

第2項 調査範囲の設定

平成29年度の発掘調査は第5地点の中でも、平成26年度の調査で検出されたSX02の東側で、I区に相当する範囲を対象とした。平成28年度の調査では、南北約8.2m、東西約4.0mの調査範囲を設定していたが、南東端では調査範囲外へと続く遺構(SK03)が検出されていた。そのため、SK03の全体を明らかとすることを目的として調査範囲を南へ約2.2m拡張し、東西4.0m、南北10.4mとした。また、平成26年度の調査において実施した下層確認によって、本調査区の最下部では岩盤を加工した溝などの遺構を確認していた。そのため、調査範囲内で可能な限り岩盤面までの検出を図ることとした。

また、第5地点付近の道に、南北6m、東西2mのトレンチ(第5地点第1トレンチ)を設定し、道路や石垣の検出を試みた。

第3節 第5地点I区

第1項 層序(Fig.5・6)

本地点では、第3遺構面において製錬作業や選鉱作業の場としての機能がなくなった後には、鉱山活動に伴って排出されたユリカスやズリの廃棄場となり、廃棄されたズリの上を造成して現在の地形が形成されていることが、昨年度の調査によって明らかとなっていた。造成土や廃棄されたズリ・ユリカスの堆積状況については昨年度に刊行した概要25を参照されたい。

本年度拡張した範囲においても、昨年度と同様の状況が確認された。ただし、拡張部分の南東部では第1遺構面の整地層以下で、巨大な落込みが確認された。

第3遺構面以下では、これまでの発掘調査においても薄い堆積層内に、複数の硬化面が確認されていた。しかし、調査面積が狭小であったことからそれぞれを遺構面として整理することは困難であった。本年度の調査では、調査区内の広い範囲で遺構が検出され、それぞれの遺構が帰属する層位が面的に確認されたことにより、第3遺構面の細分が可能となった。それに伴い、これまでに第3遺構面と呼称していたSX17～19の含まれる遺構面は、第4遺構面と変更し、岩盤は第5遺構面となることが確認できた。なお、第3遺構面と第4遺構面の間には複数の硬化面が確認で

き、実際にはさらに多くの遺構面があるとみられる。以下では各遺構面の様相を記述する。

【第3遺構面】

東壁では157層・162層上面にあたる。標高は約241.70～242.00mに相当するが、堆積層は薄く、厚い箇所でも20cm未満である。遺構としてはSK03・04、SD05・07、SX28が検出された。ただし、層序では確認できないものの、切合い関係によってSK03・04やSD07が、SD05・SX28に先行することが確認できており、同一遺構面上においても短期間の内に活動内容の変更や、それに伴う設備の新設・廃絶があったことが想定される。SK03・04底面や、SX28の検出面から出土した遺物により、17世紀後半頃には利用されていたと判断できる。

【第4遺構面】

東壁には表れていないが、東西方向での断割りによって確認された。Fig.6、I-I'の13・16層上面に相当し、標高は約241.6mである。遺構としてはSD08、SX29・30がある。また、平成27年度の調査で検出された炉跡SK17～19は、今回整理した第3遺構面よりも一段下で検出されており、検出レベルが標高約241.6mと、ほぼ同じであることから、第4遺構面に含まれると整理できる。

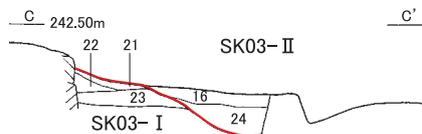
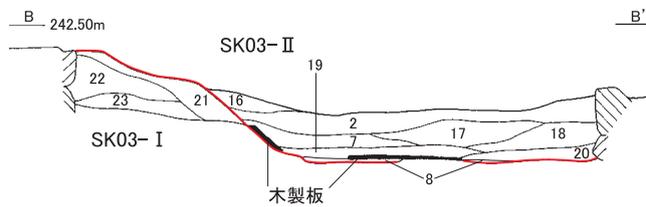
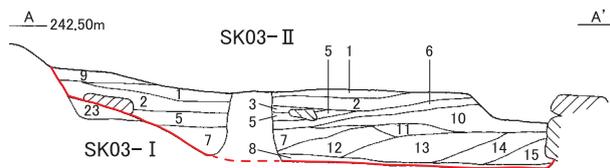
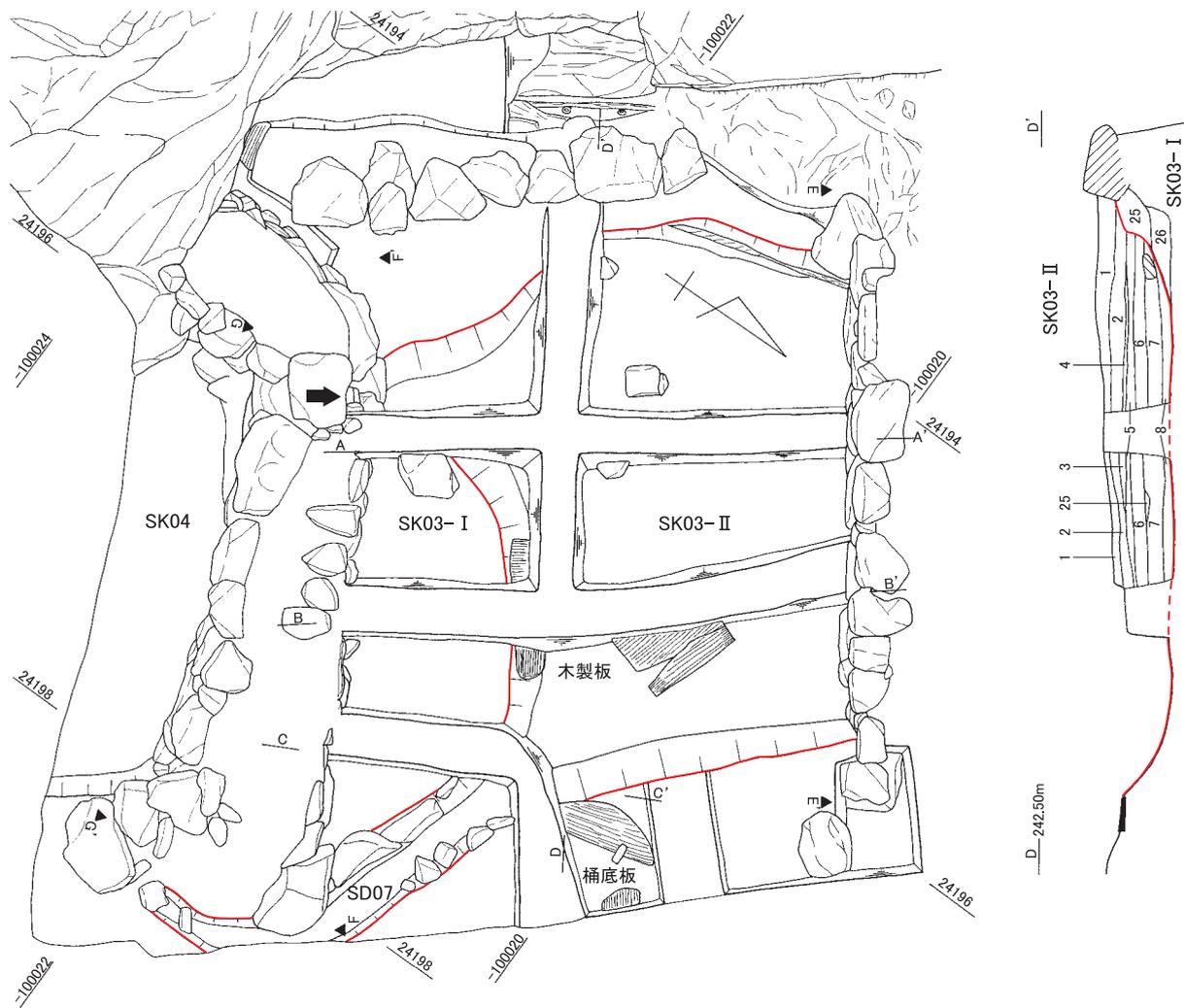
調査区南東部に設定したサブトレンチでは、第4遺構面とみられる整地層が検出されている。その堆積層では焼土や炭などが確認されており、SX17～19が当該面で検出されていることから、火を使う作業が広範囲で行われていたことが窺われる。第3遺構面とは使用状況が異なっていたようである。

【第5遺構面】

地表面に露出していた岩盤を大規模に加工して利用していた面で、本地点において最も古い遺構面である。遺構としてはSD09～11や、平成26年度の調査で確認されていたSD02がある。SD02の埋土からは17世紀前半の遺物が出土しており、本年度の調査でも岩盤の直上から青花など古相を示す遺物が出土している。また、平成26年度の調査で、第I区と第II区の境から検出されていた石敷遺構SX12は、検出面の標高が241.3mと、SD11が穿り込まれた岩盤面の標高よりもやや低い。岩盤が北東に向かって緩や



Fig. 7 昆布山谷地区第5地点岩盤加工遺構S X O 2 平面図・立面図 (S = 1 / 60)



- 1 N 黒色土(炭化物層)
- 2 10 YR 3/2 黒褐色土(砂質、ユリカス)
- 3 10 YR 8/6 黄橙色土(緻密な粘質)
- 4 10 YR 7/3 にぶい黄橙色土(粘質)
- 5 10 YR 6/4 にぶい黄橙色土(やや砂質、粗い粒度)
- 6 10 YR 4/2 灰黄褐色土(やや砂質、木片含む)
- 7 7.5 YR 4/4 褐色土(やや硬化、マンガン鉄分を含む)
- 8 5 G 3/1 暗緑灰色土(粘質、ややシルト質)
- 9 2.5 Y 8/2 灰白色土(粘質、砂質土が混じる)
- 10 2.5 Y 6/1 黄灰色土(やや砂質、0.5センチ以下の小礫を含む)
- 11 10 G 4/1 暗緑灰色土(砂質、ユリカス)
- 12 2.5 Y 7/3 浅黄色土(砂質、1センチ以下の小礫を含む)
- 13 2.5 Y 5/1 黄灰色土(ユリカスと0.5センチ以下の小礫を含む)
- 14 7.5 YR 7/4 にぶい橙色土(0.5センチ以下の小礫を多く含む)
- 15 2.5 Y 5/2 暗灰黄色土(砂質、ユリカス層)
- 16 10 YR 3/1 黒褐色土(砂質、ユリカス層)
- 17 10 YR 6/2 灰黄褐色土(2~5センチ大のズリ層)
- 18 5 Y 6/3 オリーブ黄色土(2~5ミリ大の礫層)
- 19 2.5 Y 4/1 黄灰色土(砂質、ユリカス層)
- 20 5 Y 7/2 灰白色土(5ミリ大の小礫層)
- 21 10 YR 7/6 明黄褐色土(硬化、マンガン含む)
- 22 10 YR 3/1 黒褐色土(5ミリ大の礫を多く含む)
- 23 10 YR 7/6 明黄褐色土(硬化、マンガン含む)
- 24 5 Y 5/2 灰オリーブ色土(砂質、ユリカス層)
- 25 10 YR 7/6 明黄褐色土(硬化、マンガン含む)
- 26 5 Y 8/1 灰白色土(粘質)

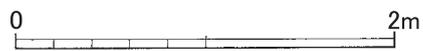


Fig. 8 昆布山谷地区第5地点SK03・04平面図・土層断面図 (S = 1 / 40)

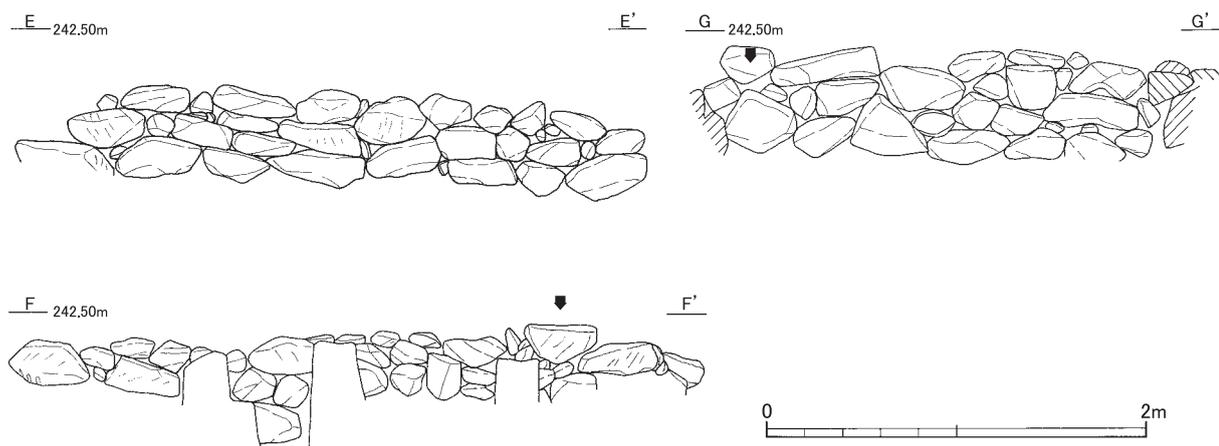


Fig. 9 昆布山谷地区第5地点SK03・04石積み立面図 (S = 1 / 40)

かに傾斜していることを踏まえると、SX12も第5遺構面に伴う遺構の可能性はある。

第2項 検出遺構 (Fig. 4 他)

本年度の調査では、第3遺構面では炉跡SX28、水溜遺構SK03～05など、江戸時代前半頃の生産活動に係る遺構が検出された。また、最下部の岩盤面においては岩盤を穿った溝が検出された。溝の用途・目的については明確にできなかったが、導排水溝として利用されていた可能性がある。

以下では今年度の調査によって検出された遺構について、個別に報告する。

【SK03】 (Fig. 8・9)

第3遺構面に伴う水溜遺構で、昨年度の調査によって、北側の一部が検出されていた。本年度は調査範囲を南側に広げたことによって、そのほぼ全体を検出することができた。本遺構は、壁面が石積みや叩き締めなどによって固められていることから、水を溜めるための施設とみられる。埋土にはユリカサが多く含まれていることから、選鉱作業において使用された遺構である可能性が高い。SK03の東部では桶底の一部とみられる木製の板が出土しており、SK03に溜めた水を桶に汲み出して利用していたと想定される。

構築当初の規模は東西約3.4m、南北約3mで、深さは約40cmであるが (SK03-I期)、南側の一部が意図的に埋められ (Fig. 8-21～23層)、南北1.8m程度と狭くなっている (SK03-II期)。Fig. 8では確認できないが、I期の底面とみられる8層は南

側石垣まで続いており、その上にII期の盛土が堆積している。なお、Fig.10の3層も、Fig. 8の8層と同じく、I期の底面と判断される。西側ではI期の底面の上に、灰白色の粘土 (Fig.10-2層)を、南側では黄褐色土 (Fig. 8-21～23層)を盛り上げて土堤とし、II期の水溜を構築している。II期の南側面の一部には木製の板が残っていることから、II期の段階では側面が板張りになっていた可能性が考えられる。底部でも板が出土しているが、側面に貼ってあったものが転落した可能性もある。盛土の上面 (Fig. 8-21・23・24層、Fig.10-1層)にはマンガンが沈着して硬化しており、規模を縮小してからも引き続き活用されていたことが窺われる。

北壁と南壁は30～40cmの割石を3段程度積み上げて石積みとしているが、東壁と西壁は素掘りである。南壁はSK04北壁と一体で、幅70cm程度の石畳状になっている。上面は白色の粘質土で整地されており、その上面にはマンガンの沈着がみられた。この白色粘質土はII期において盛土に使用された土 (Fig.10-2層)と同じ粘土である可能性も考慮され、灰白色粘質土の上面がII期に対応している可能性がある。石の積方は、横長に石を積み上げるいわゆる横積みになっている。後述するが、本年度の調査により第5地点第1トレンチで検出されたSW08と積み方が類似しており、構築時期が近い可能性も考慮される。

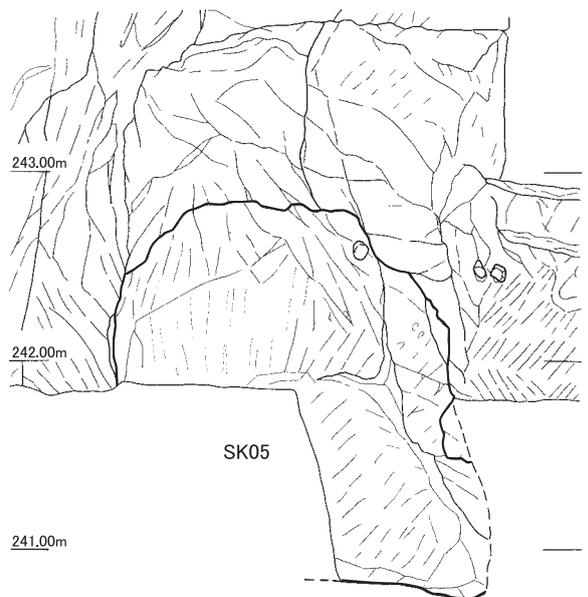
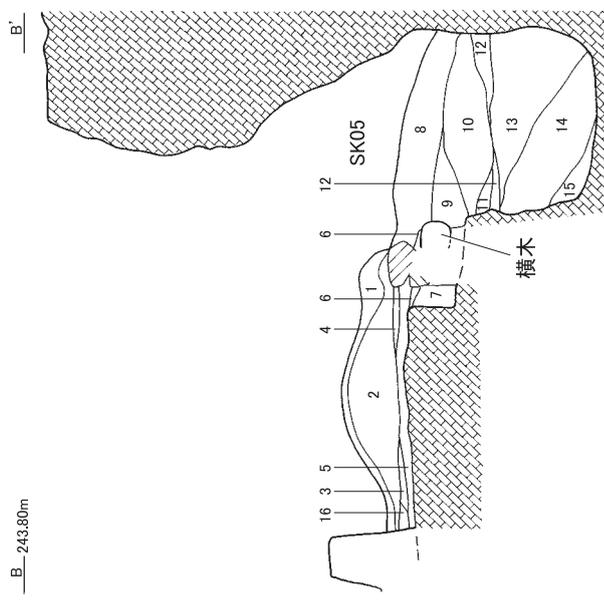
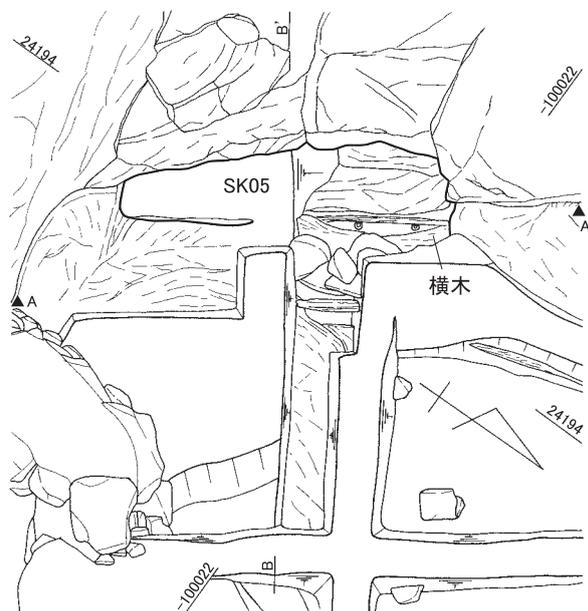
本遺構の南西端部にはSK04とつながる溝があり、石畳の上面を一部掘下げ、SK04からあふれた水が流れ込む構造になっている。この溝は、白色粘質土の盛

土で構築されており、SK03- II期に伴う遺構と考えられる。現状では掘下げた上面に石が据えてあり、SK 03に流れ込む水の量を調節していた可能性も考えられる。いずれにしても、少なくともII期に於いてはSK 03とSK 04は一体となって機能していたことが明らかとなった。また、南東端部には南東方向へと延びる溝SD 07が検出されており、SK 03への主導水とみられる。

埋土の最上層(Fig. 8- 1層)はカラミを含む炭化物質層で、堆積層内にはユリカスを含む層もいくつか確認できている(Fig. 8- 2・16層など)。そのため、本遺構が使用されなくなった後には、製錬や選鉱に伴う廃棄物の捨て場となっていた可能性がある。

【SK 04】(Fig. 8・9)

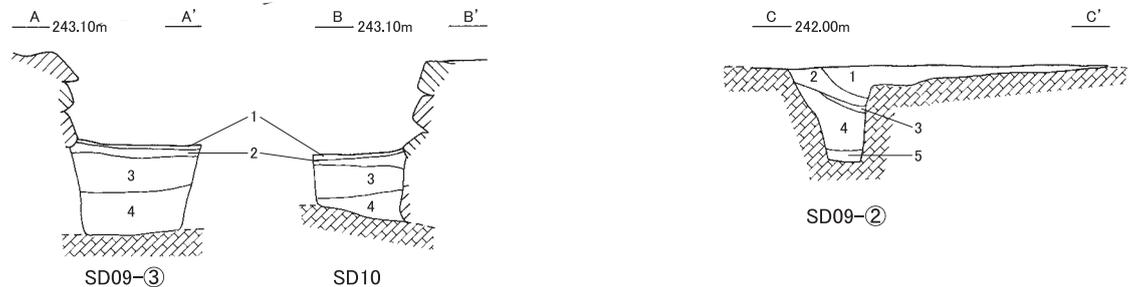
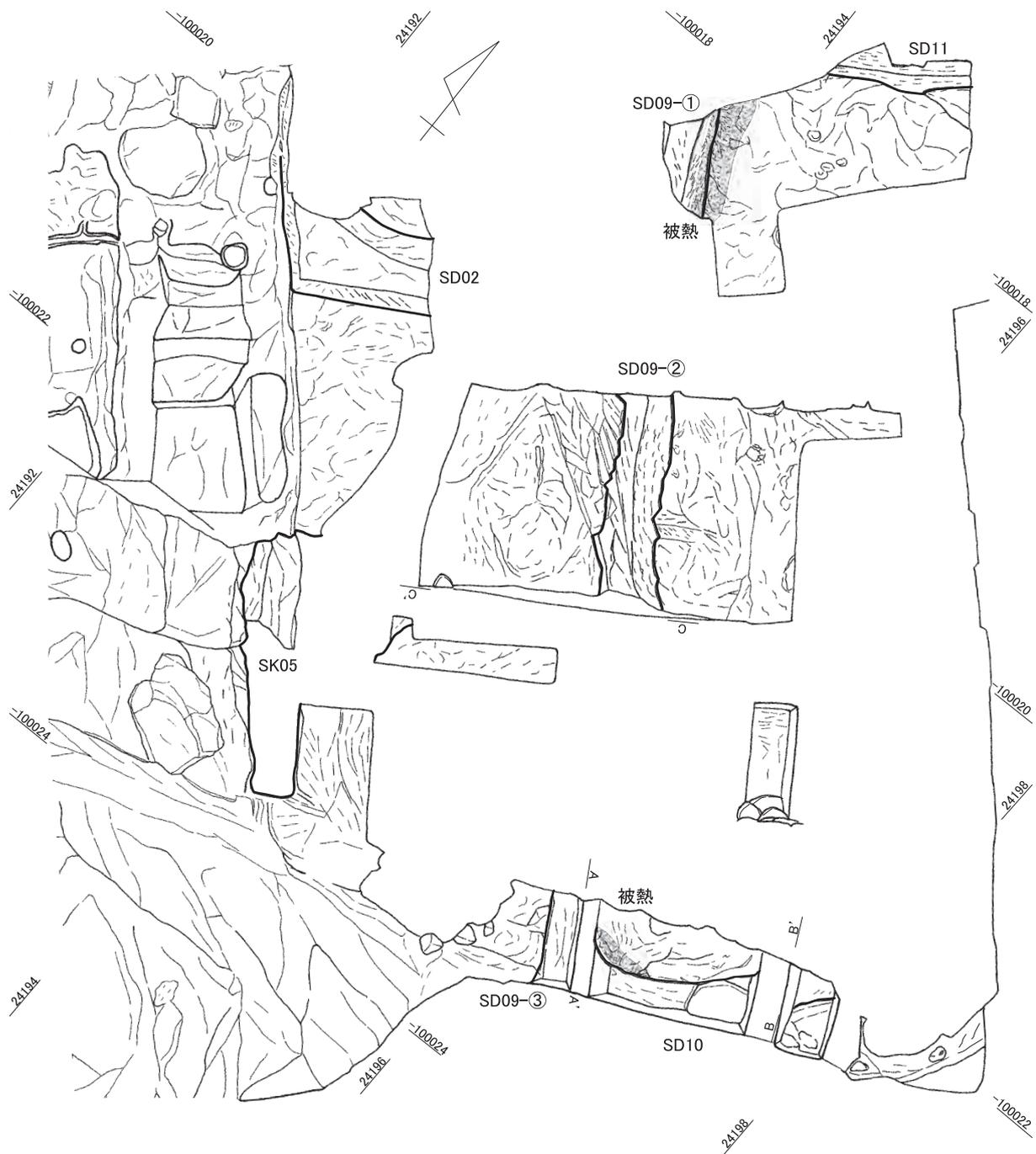
SK 03の南側で検出された水溜遺構で、SK 03と同じく第3遺構面に伴う遺構である。北面の石積みがSK 03南面の石積みと一体となっており、SK 03-I期とほぼ同じ時期に構築されたとみられる。検出された範囲は北端のみのため、全体の構造は判明していない。検出された東壁の一部と北壁は、30～50cmの割石を横長に3段積み上げており、SK 03と類似する。西壁は岩盤を利用している。南北は不明であるが、東西約3.4mで、SK 03と同程度の規模である。北西隅にはSK 03へとつながる細い溝(Fig. 8の→部分)があり、溝の上には石を置いて暗渠状にしていた。



- 1 7.5 YR 6/8 橙色土(粘質、しまりない。鉄分沈着による硬化)
- 2 5 GY 8/1 灰白色土(粘性強。橙色粘土がブロック状に入る)
- 3 2.5 GY 7/1 明オリーブ灰白色土(粘性強、しまりない)
- 4 7.5 YR 6/8 橙色土(鉄分沈着による硬化。遺構面)
- 5 7.5 Y 7/2 灰白色土(粘性強、しまりない。砂粒を少し含む)
- 6 7.5 YR 4/4 褐色土(鉄分沈着による硬化。遺構面)
- 7 N 5/ 灰色土(やや粘質で、しまりあり。砂粒を含まない)
- 8 7.5 YR 3/1 黒褐色土(目の粗い均一な砂質土。ユリカスか?)
- 9 5 Y 7/2 灰白色土(目の粗い均一な砂質土。ユリカスか?)
- 10 5 Y 6/1 灰色土(0.5～3センチ大の小礫を90%含む。ズリ層)
- 11 7.5 YR 5/8 明褐色土(粘性なく、やや砂質。鉄分沈着による硬化)
- 12 N 4/ 灰色土(粘性強、しまりない。砂粒を含まない)
- 13 5 GY 8/1 灰白色土(粘性強、しまりない。砂粒を含まない)
- 14 10 YR 2/2 黒褐色土(1～3センチ大の礫が90%以上含む。ズリ層)
- 15 2.5 Y 6/2 灰黄色土(やや緻密な砂粒。しまりない)
- 16 N 3/ 暗灰色土(やや粘質、しまりない。礫・砂粒を含まない)



Fig.10 昆布山谷地区第5地点SK 05平面図・立面図・土層断面図 (S = 1 / 40)



- 1 7.5 YR 6/8 橙土(鉄分沈着による硬化層)
- 2 10 YR 6/1 褐灰色土(粘質強、しまりあり。2~5ミリ大の小礫を5%程度含む)
- 3 10 YR 6/2 灰黄褐色土(粘性強、しまりあり。1~2センチ大の礫を10%程度含む)
- 4 2.5 Y 6/2 灰黄色土(粘質強、しまりあり。砂粒をほとんど含まない)

- 1 2.5 Y 5/2 暗灰黄色土(粘質強。SD09埋土)
- 2 2.5 Y 6/4 にぶい黄色土(粘質強。SD09埋土)
- 3 N 4/ 灰色土(緻密な粘質土。SD09埋土)
- 4 7.5 Y 3/4 暗褐色土(しまりあり。目の粗い砂質土。上面マンガン沈着による硬化)
- 5 N 3/ 灰色土(粘質強。カラミを含む。整地層)



Fig.11 昆布山谷地区第5地点SD09~11平面図・土層断面図 (S = 1 / 40)

この溝により、SK 04 から溢れた水がSK 03 に流れ込む構造となっている。

SK 03・04 の底面からは肥前陶器の呉器手碗が出土しており、いずれも17世紀後半頃に利用されていたことが想定される。

SK 04 の埋土はほぼズリ層であり、炭化物やユリカスが含まれていたSK 03 とは埋土の様子が大きく異なっている。第5地点においては、生産活動が行われなくなった後にユリカス捨て場となり、その後ズリの廃棄場となったことが昨年度までの調査で判明しており、SK 04 については本地点がズリの廃棄場となった後に堆積したことが窺われる。このことから、SK 03・04 は同時に廃絶したのではなく、やや時期差があると考えられ、SK 03 が埋没したのちもSK 04 は機能していた可能性がある。

【SK 05】(Fig. 8・10)

岩盤加工遺構SX 02 の南側に穿り込まれた遺構である。幅約1.7m、奥行き約1.1mと、SK 03・04 に比べて小さいが、深さは約1.15mあり、非常に深い遺構である。標高242.6m付近から240.8m付近にかけて構築され、岩盤を奥に大きく穿り込んでいる。ただし、構築はSX 02 の壁面から掘り込まれており、壁面加工後の遺構で、岩盤加工の初期段階の遺構ではない。SX 03 の西部から本遺構に向けて設定したトレンチでは、SK 05 の東側に深さ24cm、東西幅48cmの段を設けていたことが確認でき、本来は2段であったことが判明した。埋土には灰白色の粘土層(Fig.10-13層)があり、SK 03- II期において盛土した灰白色粘質土(Fig.10-2層)と同一の粘土である可能性がある。両者に層位的なつながりが確認できなかったため確証はないが、仮に同一層であれば、SK 03- II期に盛土をした後に13層が流入したと考えられ、SK 03- II構築時には少なくとも13層の下面までは深さが存在しており、この時点でも水溜の機能を有していたものと考えられる。また、13層は上面が水平に堆積しており、意図的に埋められた可能性もある。灰色粘質土(Fig.10-12層)や11層の硬化面が底であった時期も想定され、この段階では当初の深さから半分程度の水溜となっていたと考えられる。上層のユリカス(Fig.10-8層)やズリ(Fig.10-10層)は機能停止後の堆積と考えられ、廃絶後はSK 03 と同様に、

ズリ・ユリカスの廃棄場となっていたことが窺える。8層より上層には厚いズリ層が堆積しており、5地点の広範囲がズリの廃棄場となった後の堆積と考えられる。

【SD 06】(Fig. 4～6)

SD 06 は、調査範囲の東部を南北方向に延びる溝で、大きさは、最大幅約60cm、内法約40cmである。西側側面には20～30cm程度の石を並べている。また、北半部はSK 06 によって破壊されていた。第3遺構面に近いが、SK 03 よりも先行する可能性がある。

【SD 07】(Fig. 4)

SK 03 に伴う溝跡で、SK 03- II期の構築と同時に造られた遺構とみられる。幅30cm、底面幅約20cmで、両側面には石を並べている。底面のレベルが南東ほど高くなることから、SK 03 へと水を入れるための給水設備の一部と考えられる。本遺構の存在により、SK 03- II期の時期には、南東方向に水溜めや導排水設備などが存在していたことが想定されるが、調査区内では検出できなかった。埋土にはユリカスが含まれていた(Fig. 8-16・24層)ことから、SK 03 と同時期に廃絶された可能性が高い。

【SD 08】(Fig. 4)

調査区中央部で検出された、南北に延びる素掘りの溝で、第4遺構面に伴う。規模は幅約30cm、深さ約15cmで、内部には木の棒が埋設されていた。木は水道管として機能を有しておらず、木を埋め込んだ意図は明らかとできなかったが、木の棒により暗渠として機能していた可能性もある。溝には石敷きや叩き締めなどの水がしみこまないような工夫は見られなかった。

【SD 09～11】(Fig.11)

調査範囲の最下面である第5遺構面において検出された溝で、岩盤を大規模に削平して水平に加工した部分に構築されている。岩盤を穿り込んだ溝で、いずれも幅30～50cm、深さ50cm程度である。SD 09 は南北方向、SD 10・11 は東西方向に延びている。また、SD 09 の西壁には西側へ続く溝が確認できる。平成26年度の調査で検出されていたSD 02 と接続する可能性がある。SD 09 とSD 02、SD 10 とSD 11 など、平行になっている溝同士でも若干軸がずれており、岩盤上を整然と区画してはいない。

遺構面である岩盤はほぼ水平だが、SD 09 底部は北

へ向けて、SD 10・11 底部は東へ向けて下がっており、排水溝として機能していた可能性もある。ただし、排水目的としては数が多過ぎることから、普通の排水以外の機能が想定されるものの、検出範囲が限られていたこともあり、今回の調査では明確にできなかった。SD 09 には2箇所に被熱痕が認められ、上部に炉跡など、相当の火力を伴う遺構があった可能性もある。SD 02 の埋土からは磁器が1点出土していたほか、本年度の調査では岩盤面から九州陶磁編年におけるI期に相当する肥前陶器(23)が出土している。検出した範囲では最も古い段階の活動痕跡として重要な遺構である。

【SD 05】(Fig.12)

SD 05 は調査区の北部で検出された幅約 60cm の素掘りの溝である。底面の一部に灰白色の粘土が残っており、本来は底面が全面粘土貼りになっていた可能性がある。底部に帯状の被熱痕が確認できるほか、埋土にはカラミや炭化物が多く含まれていた。SD 05 の南には炉跡 SX 28 が所在することから、本遺構は SX 28 から排出されたカラミや炭などを掻き出すための排水溝であった可能性がある。

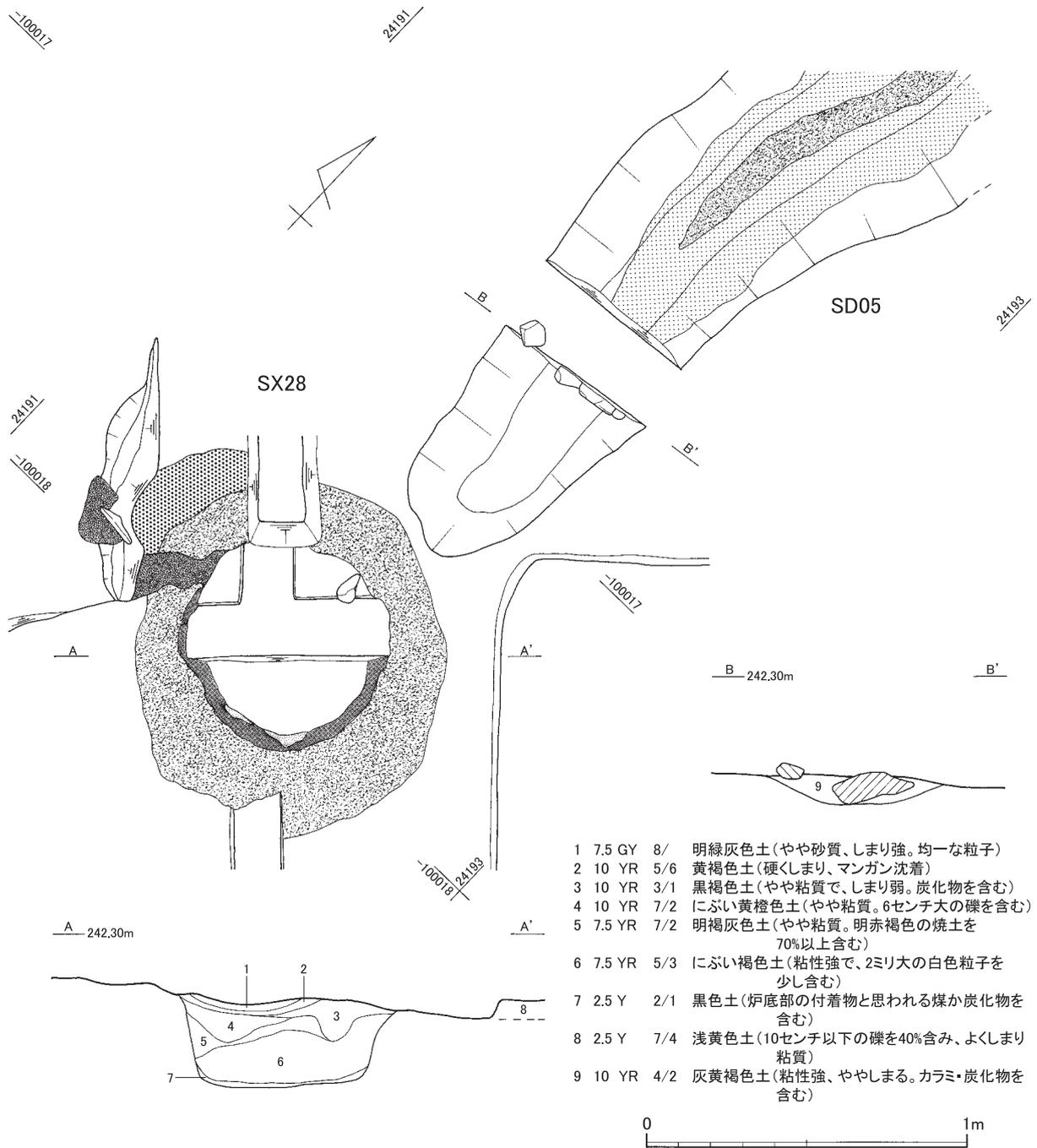


Fig.12 昆布山谷地区第5地点SX28・SD05平面図・土層断面図 (S = 1 / 20)

【S X 28】(Fig.12)

S X 28 は、調査区北半部で検出された炉跡である。直径 60～70cm 程度の円形で、深さは 25cm である。炉の周辺の 20～40cm の範囲は被熱し、赤褐色を呈している。被熱痕の周辺には粘土が一部残存していた。炉壁は底部に向かうにつれて、わずかに内側に張り出すが、ほとんどまっすぐ立ち上がっている。炉壁は硬くしまっているが、もろく崩れやすい。また、炉壁の表面には全面にススが付着しているが、ススの剥離した箇所では白～赤色の本来の壁面が観察できる部分もある。底部には厚さ 2cm 程度の炭化物層 (Fig.12-7 層) があつた。先述したが、S X 28 とその北側にある S D 05 とは一体の遺構とみられ、S X 28 から排出されたカラミや炭を S D 05 へと掻き出していたと想定される。排滓溝を伴う炉跡の検出は、石見銀山遺跡地内全体においても初であり、炉の構造や製錬工程の実態を解明する上で非常に重要な遺構といえる。

埋土には一部に炭化物や焼土を含んでいるが、ほぼ均質な粘質土であることから、意図的に埋められた可能性が高い。周辺からは炉壁の残骸が出土しており、使用されなくなった後には破壊され、粘質土で埋められたとみられる。埋土や周囲の土、炉壁などはサンプルとして採取しており、今後の科学的な分析調査によって目的金属炉の機能・種類など、より詳しい状況が明らかとなることが期待される。

本遺構の検出面からは呉器手碗の破片が出土しており、S K 03・04 と同じく 17 世紀の後半に利用されていた遺構と判断される。しかし、一般的に炉を構築する際には、事前に地面の焼き締めをするなど、水分を可能な限り除去する工夫がなされる。検出状況より、S X 28 は S K 03・04 の後で構築されたと推定されるが、S X 28 と S K 03・04 が共存していたとは考え難いことから、少なくとも S K 03 に水溜めとしての機能がなくなった後に構築されたと想定される。なお、S X 28 周辺では炉跡の可能性のある焼土面が複数確認されており、炉を作り替えての操業が行われていたことが窺われるが、調査期間内には十分な調査ができないと判断されたため、確認するに止め、現状で保存しておくこととした。

【S X 30】(Fig. 4)

S X 28 と重複しなからやや西側で確認された炉跡で、第 4 遺構面で検出された。S X 28 の前に操業されていたとみられる。炉内には灰が全体に充填されており、灰には少量の炭も混入していた。灰についてはサンプルを採取したため、化学分析により、炉の性格・機能等、炉の具体的な実態解明が期待される。本遺構は、S X 28 のほぼ真下に所在しており、S X 28 を完全に掘り上げないと調査ができない状態であった。そのため、本格的な調査は実施せず、所在を確認する程度に止めた。

第 3 項 出土遺物 (Fig.13～15、Tab. 2～4)

【遺構に伴う遺物】

1～4・29・30 は S K 03・04 の埋土から出土した。1・4 は肥前陶器で、呉器手碗の口縁部である。2 は肥前磁器で、口紅の丸碗である。3 は陶器で、鉢とみられる。口縁付近が外反し、体部に屈曲が見られる。29 は無文銭で、片面の中央部に凹みがある。30 は竹の両側を切断し、節を抜いて管状に加工されている。

5 は S D 06 から出土した土師質土器の皿で、内面に粘土状の付着物がある。底面には糸切痕がみられる。

6 は S D 07 から出土した肥前陶器の皿である。内面には灰釉がかかっているが、底部は無釉である。底部は体部に比べてやや深く削り込まれ、兜巾がある。

7～10 は S X 28 周辺から出土した。7 は白磁の皿で、蛇の目釉剥ぎがある。8 は肥前磁器の皿で、内面底部には染付による圏線がある。9 は肥前陶器の碗で、白化粧土を刷毛塗して刷毛目文様を描いている。10 は S X 28 周辺の灰層から出土した土製品である。強く被熱しており、内面には金属状の付着物があることから、製錬炉などに用いられるネコとみられる。

11～15・28 は第 5 地点北半部で、S X 28 周辺の被熱痕を一部覆っていた黄色粘質土の上面から出土した。11・12 はいずれも肥前磁器の皿である。11 は口縁の内面に染付による文様が、12 には口縁部の外面に染付の圏線がある。13～15 は肥前陶器である。13 は碗で、9 と同じく白化粧土による刷毛目文様がある。14 は呉器手碗である。15 は碗としてはやや小ぶりであるため、坏とみられる。28 は銅製品で、キセルの火皿である。

16は黄色粘土層内から出土した土製品で、10と同じくネコとみられる。17は肥前陶器の皿で、胎土目がある。また、見込みには鉄絵がある。

18～20はSD 08から出土した。18・21は青花の皿である。18は碁笥底、21は砂高台になっている。19・20は肥前陶器である。19は鉢とみられ、口縁部が内側に屈曲している。21はSD 08の周辺で出土した資料で、甕などの把手とみられる。

23はSD 09から出土した、肥前陶器の碗である。九州陶磁編年におけるI期に相当する古い資料である。

25は岩盤の直上で出土した、肥前磁器の皿である。SD 02の埋土から出土したものとほぼ同時期で、古手の資料である。

26はSK 05の埋土直上で、ズリ層の最下面より出土した、砂岩系の石を加工した印判状の石製品である。判面はほぼ正円で、周辺も磨いて成形されるなど、丁寧加工されている。判面には、陰刻によって四角形と木葉形とを組み合わせたモチーフと、文字にも見える曲線が彫り込まれている。陽刻ではなく、作りも丁寧とはいえ成形は不十分であることから、公的な書類などに用いるような印判ではないと推察される。

27・31はSD 09から出土した。27は石製品で、白色凝灰岩製の砥石とみられる。31は木製品で、薄い板状に加工されている。SD 09の底面に張り付くように出土した

【包含層からの出土遺物】

調査区を拡張した際に掘り下げた包含層から、陶磁器を中心に遺物が出土している。ほとんどは第5地点に石垣が構築された際の造成土内（Fig. 5、59～81層相当）からの出土である。肥前磁器が多く、肥前陶器や在地系の陶磁器類もいくつか含まれている。以下では出土遺物について個別に報告するが、特に記述のないものは全て肥前磁器である。22はSD 06よりも下位から出土した白磁の皿である。24は岩盤の直上で出土した土師質土器の皿である。32は外青磁の碗である。内面の口縁部付近に四方禪文、底面にはコンニャク印判による五弁花文が見られる。33は小丸碗である。

34は表土から出土した湯呑で、鮮やかに発色したコバルトより、近代以降の資料とみられる。

35は小丸碗で、外面の口縁部付近に文様がある。肥前系ではない可能性がある。36は輪花の皿である。外面の唐草文は茎の輪郭を線描きして濃みを入れており、品質の高い製品であることが窺われる。底部にはハリ支えの痕跡が残っている。

37は不明磁器の角皿で、内面には舟と山水が、外面には山が描かれている。

38は鉢もしくは段重の蓋である。39は小型の瓶である。

40は瀬戸・美濃の皿で、内面に輪トチンの痕跡が見られる。41・42は肥前陶器の皿である。42は内面に胎土目がある。43は肥前系陶器で、蓋付の鉢とみられる。44は備前系の鉢である。45は石見焼の鍋である。46は石見焼とみられる土瓶で、外面の底部にすずが付着している。47は土瓶だが、産地は判断できない。48は須佐、もしくは石見の捏鉢である。49は肥前陶器の播鉢である。高台置付きには砂が付着しており、重ね積みをした際の痕跡とみられる。内面にも環状に砂が付着しており、やはり重ね積みの痕跡とみられる。50は信楽の壺である。51は肥前陶器の甕である。口縁内側が肥厚し、外面には沈線と波状文がめぐっている。52は瓦質土器で、火消し壺の蓋である。53はサナである。

63～65は古銭で、63・64が寛永通宝、65は無文銭である。63・64はいずれも新寛永である。66は銅製キセルの吸口である。

54～62は表土からの出土、もしくは表採による資料である。54は肥前陶器の皿である。55は白磁で、稜花皿である。56は仏飯器で、口縁部が垂直に立ちあがる器形をしている。体部には草花文がある。57～59はいずれも胎土目のある肥前陶器の皿である。出土層位に対して著しく古い資料であるため、流れ込みの可能性が高い。60～62は煤瓦、60は雁振瓦、61・62はなまこ壁の壁材として使用されていたとみられる建瓦である。

67～69は掘り出した鉋石を摺り潰すための磨石とみられる。いずれにも敲打痕は認められないことから、叩き潰すのではなく、すり潰すように使用していたと判断される。

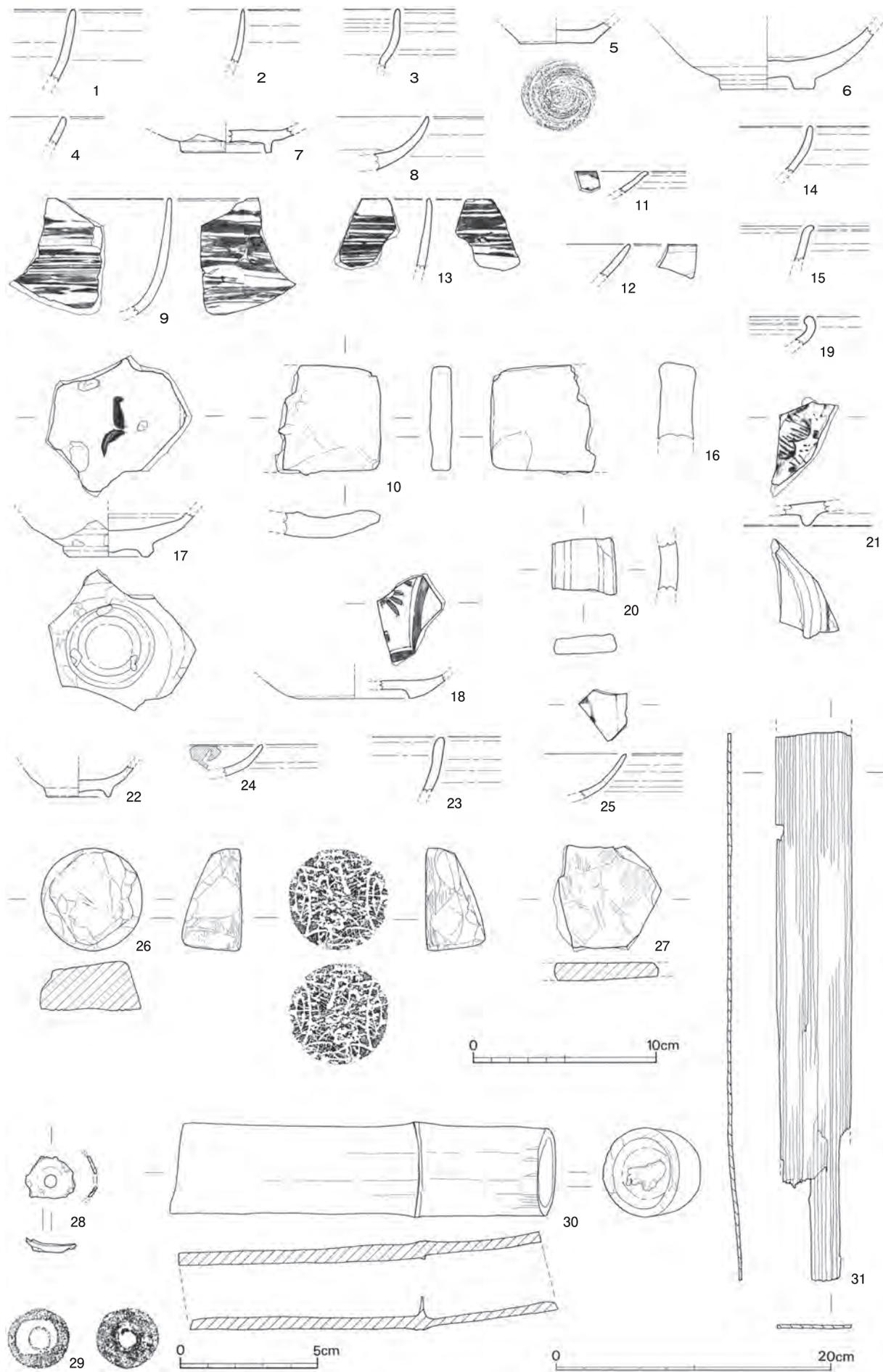


Fig.13 昆布山谷地区第5地点出土遺物実測図Ⅰ (S=1/2、1/3、1/4)

Tab. 2 昆布山谷地区第5地点出土遺物一覧表 I

| 挿図 番号 | 出土地点 | 種 別 | 器 種 | 大きさ (cm) | | | 色 調 | 成形・調 整・文様 | 備 考 |
|----------|----------------|-------|-------------|------------|------------|------------|------------|--------------|--------|
| | | | | 口径 | 器高 | 底径 | | | |
| 1 | S K 03 | 肥前陶器 | 碗 | | (4.0) | | 透明釉 | | |
| 2 | S K 03 下層粘質土 | 肥前磁器 | 碗 | | (3.0) | | 透明釉 | 口紅 | |
| 3 | S K 03 | 肥前陶器 | 鉢 | | (3.1) | | 長石釉 | | |
| 4 | S K 04 | 肥前陶器 | 碗 | | (1.6) | | 透明釉 | | |
| 5 | S D 06 ② | 土師質土器 | 皿 | | (1.1) | 4.0 | 浅黄橙色 | | 内面付着物 |
| 6 | S D 07 | 肥前陶器 | 皿 | | (3.4) | | 灰釉 | | |
| 7 | S X 28 周辺 | 白磁 | 皿 | | (1.4) | (4.5) | 白磁釉 | 蛇ノ目釉 剥ぎ | |
| 8 | S X 28 周辺 | 肥前磁器 | 皿 | | (2.9) | | 透明釉 | | |
| 9 | S X 28 周辺 | 肥前陶器 | 碗 | | (6.4) | | 白濁釉 透明釉 | 白土化粧 | |
| 10 | 灰層 (S X 28 周辺) | 土製品 | ネコ? | 現存長 6.0 | 現存幅 5.7 | 現存厚 1.3 | 灰白色 | | 47.3 g |
| 11 | 黄色粘質土直上 | 肥前磁器 | 皿 | | (1.2) | | 透明釉 | | |
| 12 | 黄色粘質土直上 | 肥前磁器 | 皿 | | (1.9) | | 透明釉 | | |
| 13 | 黄色粘質土直上 | 肥前陶器 | 碗 | | (3.9) | | 白濁釉 透明釉 | 白土化粧 | |
| 14 | 黄色粘質土直上 | 肥前陶器 | 碗 | | (2.6) | | 透明釉 | | |
| 15 | 黄色粘質土直上 | 肥前陶器 | 坏 | | (2.0) | | 灰釉 | | |
| 16 | 3面整地層 (黄色粘質土) | 土製品 | ネコ? | 現存長 4.2 | 現存幅 3.6 | 現存厚 2.0 | 灰白色 | | 34.8 g |
| 17 | 3面下包含層 | 肥前陶器 | 皿 | | (2.4) | 4.3 | 灰釉 | 鉄絵 胎土目 | |
| 18 | S D 08 ② | 青花 | 皿 | | (1.3) | (6.1) | 透明釉 | 碁笥底 | |
| 19 | S D 08 ② | 肥前陶器 | 鉢? | | (1.6) | | 灰釉 | | |
| 20 | S D 08 ② | 肥前陶器 | 把手・耳 | 現存長 3.2 | 現存幅 3.6 | 現存厚 1.2 | 藁灰釉 | | |
| 21 | S D 08 ①周辺 | 青花 | 皿 | | (1.3) | | 透明釉 | 砂高台 | |
| 22 | S D 06 ②下層包含層 | 白磁 | 皿 | | (1.7) | (3.4) | 白磁釉 | | |
| 23 | S D 09 ② | 肥前陶器 | 碗 | | (3.0) | | 灰釉 | | |
| 24 | S K 03 下層直上 | 土師質土器 | 皿 | | (1.7) | | にぶい橙色 | | |
| 25 | トレンチ最下層岩盤直上 | 肥前磁器か | 皿 | | (2.5) | | 透明釉 | | |
| | 出土地点 | 種 別 | 器 種 | 大きさ (cm) | | | 重量 (g) | 色 調 | 備 考 |
| | | | | 現存長 | 現存幅 | 現存厚 | | | |
| 26 | S K 05 上面 | 石製品 | 印章 | 5.6 | 5.5 | 3.2 | 96.3 | 明褐色 | |
| 27 | S D 09 ② | 石製品 | 砥石 | 5.9 | 6.0 | 1.0 | 42.0 | 灰白色 | |
| 28 | 黄色粘質土直上 | 銅製品 | キセル (火皿) | 1.6 | 1.8 | 0.5 | 1.0 | | |
| 29 | S K 04 | 錢貨 | 無文錢 | 2.2 | 2.2 | | 3.5 | | |
| 30 | S K 03 | 竹製品 | | 28.0 | 7.0 | 7.1 | | | |
| 31 | S D 09 ① | 木製品 | 板状 | 40.4 | 5.5 | 1.0 | | | |

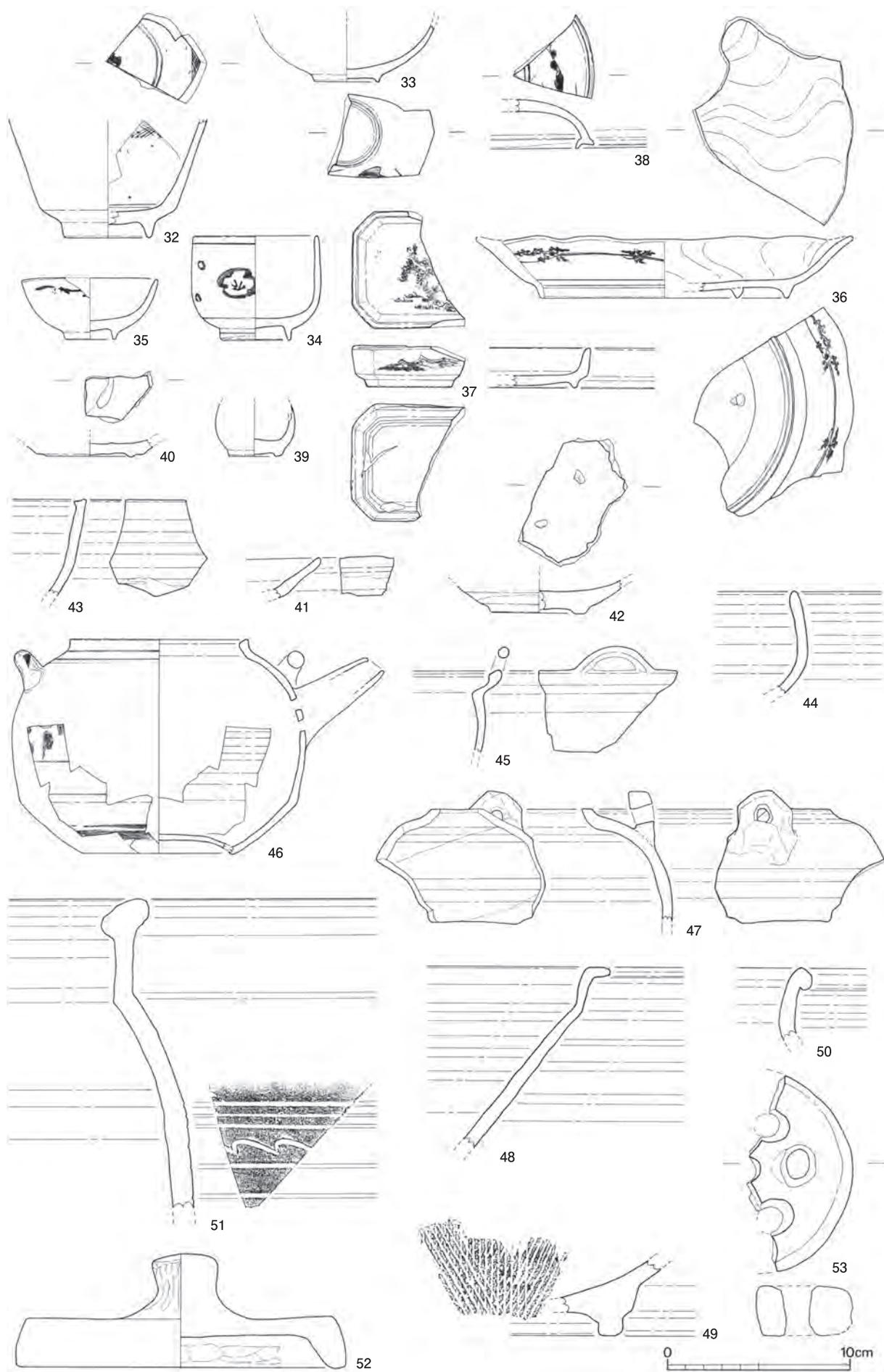


Fig.14 昆布山谷地区第5地点出土遺物実測図II (S = 1 / 3)

Tab. 3 昆布山谷地区第5地点出土遺物一覧表 II

| 挿図 番号 | 出土地点 | 種 別 | 器 種 | 大きさ (cm) | | | 色 調 | 成形・調 整・文様 | 備 考 |
|----------|--------------|-------|------|-------------|------------|-------------|---------------------------|--------------|---------|
| | | | | 口径 | 器高 | 底径 | | | |
| 32 | 上層 | 肥前磁器 | 碗 | | (6.5) | (4.5) | (内)透明釉 (外)青磁釉 | 外青磁 | |
| 33 | 上層 | 肥前磁器 | 碗 | | (3.2) | (3.4) | 透明釉 | | |
| 34 | 表土 上層 | 肥前系磁器 | 湯呑 | 6.6 | 5.8 | 3.6 | (内)透明釉 (外)コハルト釉 透明釉 | | |
| 35 | 上層 | 不明磁器 | 小碗 | 7.3 | 3.4 | 2.6 | 透明釉 | | |
| 36 | 上層 | 肥前磁器 | 皿 | (24.0) | 3.4 | (13.3) | 透明釉 | ハリ支え 輪花 | |
| 37 | 上層 | 不明磁器 | 角皿 | | 2.2 | | 透明釉 | | |
| 38 | 上層 | 肥前磁器 | 蓋 | | (2.7) | | 透明釉 | | |
| 39 | 上段東端包含層 | 肥前磁器 | ミチア瓶 | | (2.9) | 2.8 | 透明釉 | | |
| 40 | 上層 | 瀬戸・美濃 | 皿 | | (1.0) | (4.7) | 灰釉 | 輪トチン | |
| 41 | 石垣面トレンチ | 肥前陶器 | 皿 | | (2.1) | | 灰釉 | | |
| 42 | 上層 | 肥前陶器 | 皿 | | (1.9) | (5.1) | 灰釉 | 胎土目 | |
| 43 | 上層 | 肥前系陶器 | 蓋物か鉢 | | (5.3) | | 灰釉 | | |
| 44 | 上層 | 備前系 | 鉢 | | (5.6) | | にぶい赤褐色 | | |
| 45 | 上層 | 石見 | 鍋 | | (5.8) | | 来待釉 | | |
| 46 | 上層 | 石見? | 土瓶 | (9.1) | (11.8) | (8.0) | 銅緑釉 灰釉 透明釉 | スス付着 | |
| 47 | 上層 | 不明陶器 | 土瓶 | | (7.2) | | 鉄釉 | | |
| 48 | 上層 | 須佐か石見 | 鉢 | | (10.0) | | 長石釉 | | |
| 49 | 石垣面トレンチ | 肥前陶器 | すり鉢 | | (4.2) | | 褐釉 | | |
| 50 | 上層 | 信楽 | 壺 | | (4.0) | | 淡黄色 | | |
| 51 | 上層 | 肥前陶器 | 甕 | | (17.0) | | 褐釉 | | |
| 52 | 南壁面包含層 (77層) | 瓦質土器 | 蓋 | 18.0 | 6.6 | つまみ径 3.6 | 暗灰色 | | |
| 53 | 上層 | 土製品 | サナ | 現存長 10.8 | 現存幅 5.8 | 現存厚 2.8 | 橙色 | | 132.4 g |

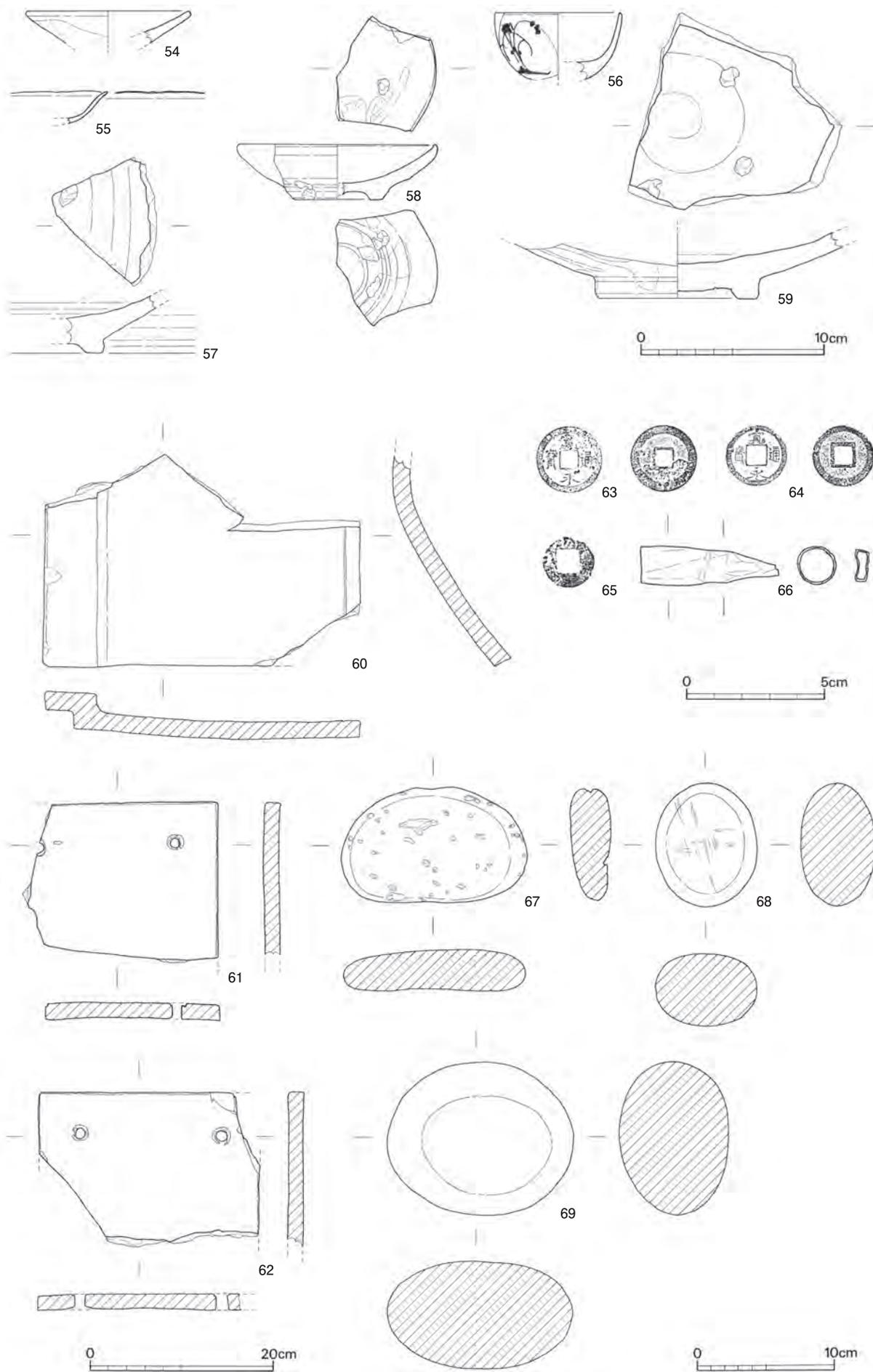


Fig.15 昆布山谷地区第5地点出土遺物実測図III (S = 1/2、1/3、1/4)

Tab. 4 昆布山谷地区第5地点出土遺物一覧表III

| 挿図 番号 | 出土地点 | 種 別 | 器 種 | 大きさ (cm) | | | 色 調 | 成形・調 整・文様 | 備 考 |
|----------|------|------|-------------|----------|-------|-------|--------|--------------|------|
| | | | | 口径 | 器高 | 底径 | | | |
| 54 | 表土 | 肥前陶器 | 皿 | (8.8) | (1.8) | | 褐釉 | | |
| 55 | 表土 | 白磁 | 皿 | | (1.8) | | 白磁釉 | 稜花 | |
| 56 | 表土 | 肥前磁器 | 仏飯器 | (6.7) | (3.7) | | 透明釉 | | |
| 57 | 表土 | 肥前陶器 | 皿 | | (3.2) | | 灰釉 | 胎土目 | |
| 58 | 表土 | 肥前陶器 | 皿 | (10.8) | 3.1 | (4.8) | 灰釉 | 胎土目 | |
| 59 | 表土 | 肥前陶器 | 皿 | | (3.7) | (8.6) | 灰釉 | 胎土目 | |
| | 出土地点 | 種 別 | 器 種 | 大きさ (cm) | | | 重量 (g) | 色 調 | 備 考 |
| | | | | 現存長 | 現存幅 | 現存厚 | | | |
| 60 | 表土 | 瓦 | 雁振瓦 | 25.4 | 34.7 | 7.2 | 2420 | | |
| 61 | 表土 | 瓦 | 建瓦 | 17.6 | 21.2 | 2.0 | 940 | 灰色 | なまこ壁 |
| 62 | 表土 | 瓦 | 建瓦 | 17.0 | 24.0 | 2.0 | 910 | 灰色 | なまこ壁 |
| 63 | 上層 | 銭貨 | 寛永通寶 | 2.4 | 2.4 | | 3.1 | | |
| 64 | 上層 | 銭貨 | 寛永通寶 | 2.2 | 2.2 | | 2.2 | | |
| 65 | 上層 | 銭貨 | 無文銭 | 1.9 | 1.9 | | 0.7 | | |
| 66 | 上層 | 銅製品 | キセル (吸口) | 5.0 | 1.5 | 1.4 | 5.6 | | |
| 67 | 表採 | 石製品 | 摺石 | 8.5 | 13.5 | 3.1 | 490 | | |
| 68 | 表採 | 石製品 | 摺石 | 9.0 | 7.4 | 5.3 | 473 | | 擦痕 |
| 69 | 表採 | 石製品 | 摺石 | 11.2 | 13.5 | 7.9 | 1660 | | |

第4節 第5地点第1トレンチ

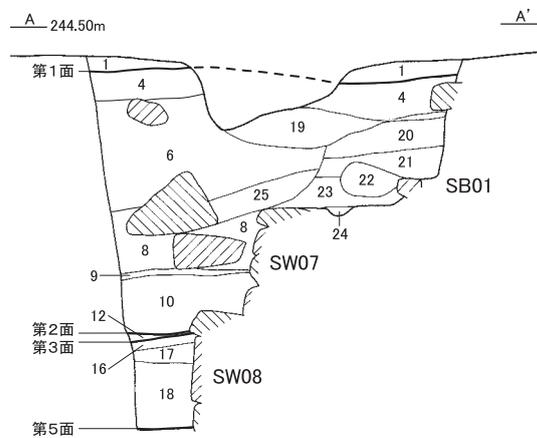
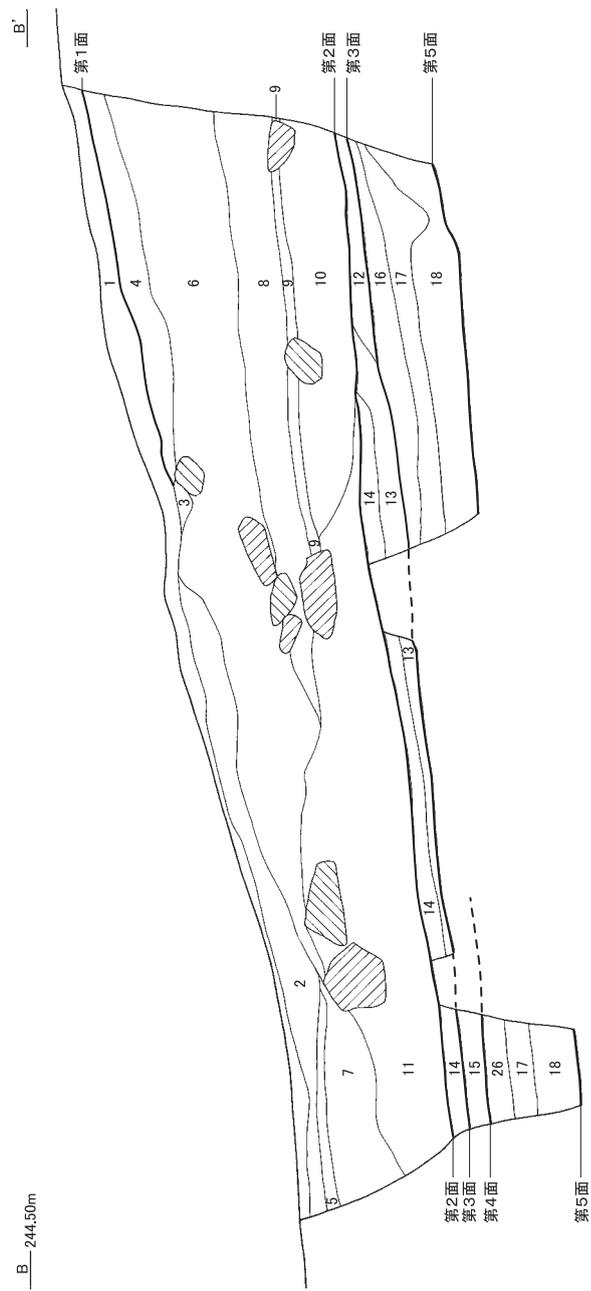
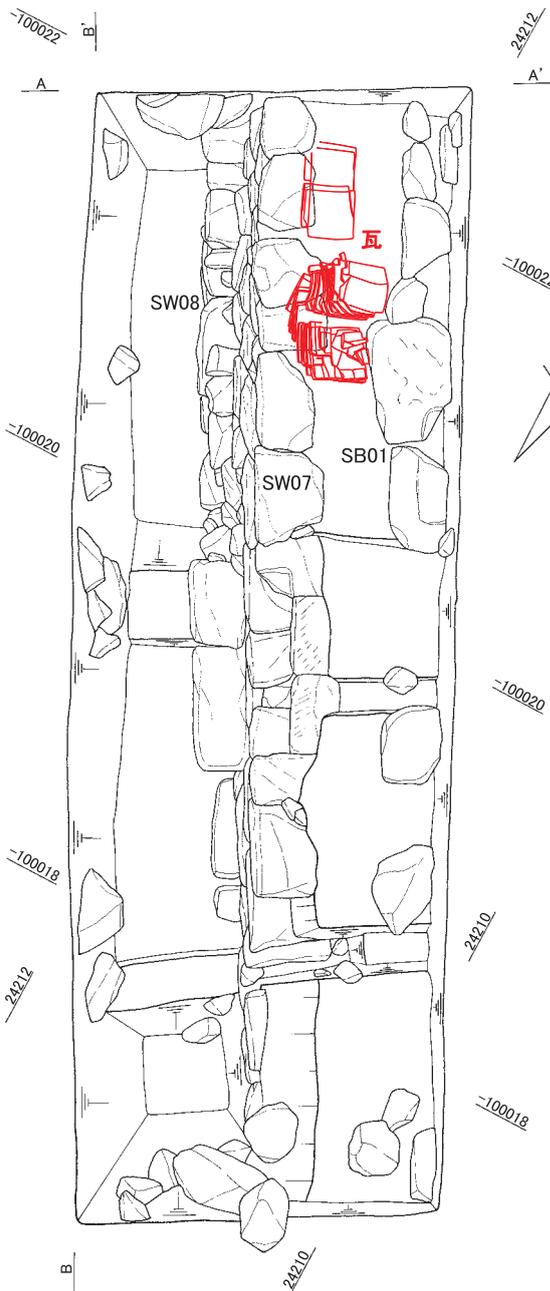
第1項 層序 (Fig.16)

トレンチ調査により確認できた堆積状況について報告する。調査によって遺構面は4面確認された。各整地面の様相はFig.16の通りである。埋土はほとんどが水害などで流入した土砂とみられる。

第1面は4層上面である。4層は上面が硬化しており、道路面として機能していた時期があると想定される。ただし、4層は南側でしか確認されず、北側は後世の水害によって流されている。

第2面以下は江戸期の堆積と考えられ、非常に硬く硬化した面が複数検出され、いずれも道路面と推定される。第2面は12・14層の上面である。12層は一定期間以上使用されていたと考えられ、マンガンが沈着して非常に硬く硬化している。14層も硬化している

が、上面のマンガンの沈着はほとんど見られない。このことから、12層の北側部分は水害で破壊され、その堆積土の13層上に14層の灰白色土で補修・整地したものと考えられる。また、この面上に、SW 07の階段基底石が据えられており、この面を整地した時に階段が構築されていることが判明した。第3面は15・16層の上面である。15層にはマンガンの沈着が見られ硬化も顕著であり、12層同様一定期間使用されているものと思われるが、16層にはマンガンの沈着がほとんど見られないことから、第2面同様、15層が洪水により破壊された後に16層の暗灰色土によって補修されたものと考えられる。さらに、トレンチ北側ではこの面上にSW 07の基底石が据えられており、この面がSW 07の構築面と考えられる。第4面は26層の上面である。26層も上面にマンガンの沈着が見



- 1 10 YR 4/3 にぶい黄褐色土(粘性しまりとにもない。0.1~0.2ミリ粒子のシルト質。表土)
- 2 10 YR 3/2 黒褐色土(粘性あり。しまり弱い。0.1ミリ以下粒子の均一な粘質土。流土)
- 3 10 YR 3/4 暗褐色土(粘性しまりとにもない。0.2~0.3ミリ粒子のシルト質。堆積土)
- 4 10 YR 2/3 黒褐色土(粘性弱く。しまりあり。1センチ程度の礫を含むシルト質。硬化面)
- 5 2.5 Y 5/3 黄褐色土(粘性しまりとにもない。0.5ミリ程度の砂粒を含む砂質土。流土)
- 6 2.5 Y 4/3 オリーブ褐色土(粘性しまりとにもない。0.1ミリ以下粒子のシルト質。流土)
- 7 2.5 Y 3/2 黒褐色土(粘性しまりとにもない。2センチ以下の礫を含む砂質土。流土)
- 8 2.5 YR 4/3 オリーブ褐色土(粘性しまりとにもない。小礫を多く含む砂質土。流土)
- 9 10 YR 3/3 暗褐色土(粘性あり。しまりない。0.2ミリ以下粒子のシルト質。堆積土)
- 10 10 YR 4/4 褐色土(粘性しまりとにもない。小礫を多く含む砂質土。流土)
- 11 10 YR 4/4 褐色土(粘性しまりとにもない。均一な粘質土。流土)
- 12 5 YR 4/8 赤褐色土(粘性なく。しまりあり。0.3ミリ以下粒子でマンガン沈着。硬化面)
- 13 10 YR 4/3 にぶい黄褐色土(粘性しまりとにもない。0.1ミリ以下粒子で粘質土。流土)
- 14 10 YR 8/1 灰白色土(粘性なく。しまりあり。0.5ミリ以下の砂粒を含む硬化層。硬化面)
- 15 10 YR 6/8 明黄褐色土(粘性なく。しまりあり。0.5ミリ以下砂粒でマンガン沈着。硬化面)
- 16 10 YR 8/1 暗灰白色土(粘性なく。しまりあり。0.5ミリ以下の白色砂粒を含む。硬化面)
- 17 7.5 YR 2/3 極暗褐色土(粘性弱。しまりあり。0.8ミリ以下の黒色粒子を含む。整地土)
- 18 2.5 Y 3/2 黒褐色土(粘性あり。しまり弱。0.5ミリ程度の白色粒子を含む。流土)
- 19 10 YR 6/4 にぶい黄褐色土(粘質弱。しまりあり。5~10センチ大の礫を含む。)
- 20 10 YR 4/1 褐色土(粘性なく。しまり弱い。にぶい黄褐色粘土をブロック状に含む。)
- 21 2.5 Y 5/2 暗灰黄色土(粘性なく。しまり弱い。やや砂質土)
- 22 10 YR 8/1 灰白色土(粘性しまりとにも強い。1ミリ大の粒子を30%含む粘質土)
- 23 10 YR 6/4 にぶい黄褐色土(粘性弱く。しまりあり。1~2センチ大の小礫を10%含む。)
- 24 2.5 Y 3/2 黒褐色土(粘性しまりとにもない。やや目の粗い砂質土。)
- 25 10 YR 5/1 褐灰色土(粘性しまりとにもない。3~5センチ大の礫を20%含む砂質土。)
- 26 10 YR 5/8 黄褐色土(粘性なく。しまりあり。0.5ミリ以下の砂粒でマンガン沈着。硬化面)



Fig.16 昆布山谷地区第5地点第1トレンチ平面図・土層断面図 (S = 1 / 40)

られ、一定期間の使用が考えられるが、調査区南側では確認できなかった。これは、第3面を破壊した水害時に下層の26層も破壊されたものと推測される。

第5面は18層の下面である。この面も上面にマンガンの沈着が見られ、硬く硬化していた。以下の層の堆積状況については、調査範囲が深く、狭くなったことにより掘下げが危険となったため確認できなかった。また、第5面から第4面までは17・18層が約40cm程度堆積しており、時期的にやや隔たりがある可能性がある。14層、15層、26層には間層が見られず、それぞれ10cm程度の厚さで整地されていることから、継続した使用が考えられ、補修を繰り返しながら使用されていた様子が窺える。

第2面より上層は、それ以下とは堆積状況が全く異なり、水害による流土が厚く堆積しており、第2面以

下のように積極的に補修を繰り返しながら使用された形跡に乏しい。

SW 07 上面の堆積状況は、東壁で見られる流土の堆積とは異っており、比較的残存状態が良い。特に南側は、SW 07 がほぼ無傷で残存しており、近代以降の盛土状況も確認できる。南壁の20層、21層、22層は近代の盛土と考えられる。東側部分は、水害により削られており、その後19層、6層、25層が堆積している。また、SW 07 上には瓦を基壇状に積み上げて基礎を構築しており、平成26年度調査のSB 04 外壁に積まれた瓦と共通する。このことから、SB 04 建設時に、周辺整備として瓦を積み、盛土を行って道路の造成も行ったものと推定される。

第2面より上層の堆積状況を見ると、一時期に堆積したものではなく、何段階かにわたって堆積している

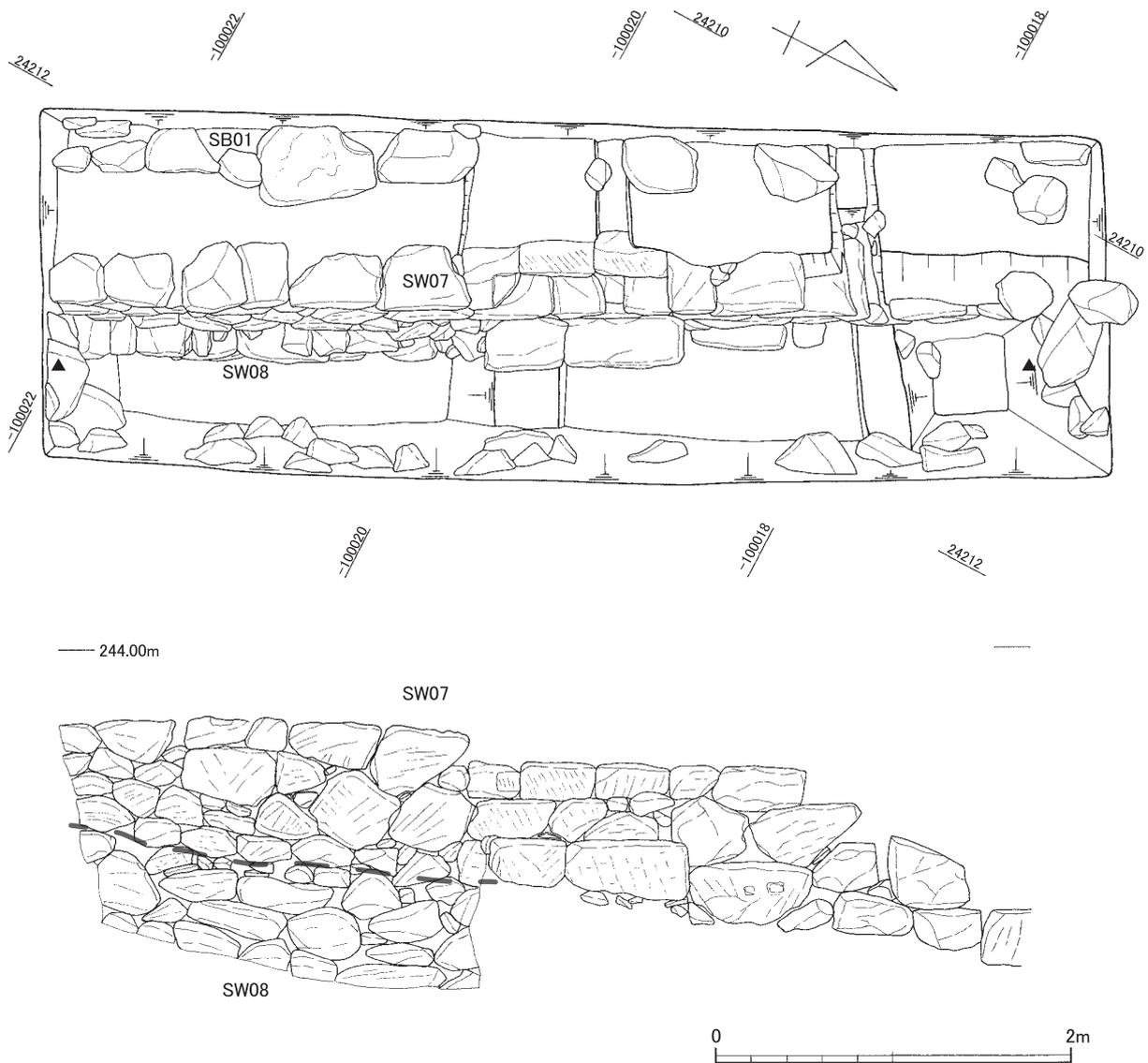


Fig.17 昆布山谷地区第5地点第1トレンチ平面図・立面図 (S = 1 / 40)

状況が窺える。まず、11層が堆積し、その後の洪水により南側が抉られ、9・10層が堆積している。その後の洪水により8層が堆積している。この時点で、SW 07の上面に盛土が行われ、道路が構築されたと考えられる。その後、6層・25層が堆積する洪水によって、上面の道路、盛土が壊されている。その後、再び4層による道路面が構築されるが、さらに4層を壊して5・7層が堆積し、最後に2層が堆積している。

第2項 検出遺構

第1トレンチでは、道跡と、敷地を区画するための石垣(SW 07・08)が検出された。SW 07は、昨年度の調査により第8地点で検出されていたSW 06と同じく、近代以降に発生した水害によって完全に埋まっていた。第8地点では旧道路面が地表下約1.7mと非常に深い位置で検出されたが、本トレンチでは地表下約1mと比較的浅い位置で確認できた。そのため、さらに下層を確認するために部分的に掘り下げを行ったところ、SW 07の下にはさらに古い石垣SW 08が存在することが確認された。

平坦面上からは建物の礎石とみられる遺構(SB 01)が検出された。

第1項でも触れたように、本トレンチでは近代以降に、水害によって埋没した上面を整地して新たな道路としていたことが確認できている。石を並べてステップを設けたり、土砂の流失を防ぐために瓦を置いてその上を固めるなど、限定的ではあるものの道の整備を行っていた痕跡が確認できている。

【SB 01】(Fig.16・17)

SB 01は、SW 07の上面で検出された。SW 07に平行に礎石を並べている。南側の礎石は小さいが、構築の間に黄色粘土を詰めて固定している。SB 01の北端部は、SW 07に設けられた階段の位置とそろっており、階段を上った南側が建物となっていたようである。また、SW 07の端部からSB 01までは幅約70cmの犬走り状になっている。北側の2基の礎石上面には土台を置くための加工痕があり、幅9～12cm程度の土台が置かれていたと推測される。また、北東端の礎石では土台の加工痕がL字型になっており、礎石は北には続かないことからこの礎石が建物北東端の礎石であったと推測できる。

【SW 07】(Fig.17)

第1トレンチの上半で検出された石垣で、出土遺物及び埋没の状況より江戸時代後半～近代にかけて機能していたとみられる。高さは約90cmと、この調査位置においてはSW 06に比べてかなり低い石垣である。トレンチの中央部には道路から平坦面に登るための3段の階段が付けられている。SW 06の階段は、石垣と平行に上るタイプであったのに対し、SW 07では石垣に直行して上るタイプである。階段の規模は、幅約1.1m、高さ約70cmで、ステップの幅は約25cmである。第2面でこの階段をつくった際に、石垣の一部を削って石段としている。また、最下段のステップは石垣の外に置かれている。石の積み方は切込み接ぎ風の乱積みで、第8地点で検出されたSW 06-①と類似している。積み上げられた石には、一辺が40～60cmのやや大きなものと一辺が35cm未満の小ぶりなものが混在している。石の表面には工具の痕跡があり、表面を平滑に整える意図が認められる。階段には四角く整えた石を使用している。また、石垣の立ちあがり角度は約65°である。

【SW 08】(Fig.17)

第1トレンチの下層確認部分から検出された石垣で、SW 07よりも25cm程度東に張り出している。積石には20～60cmと不揃いな割石が使用されており、表面も加工されていない。横長に石を積み上げる横積みになっており、古手の方法である。また、SW 08に伴う道路面も地表下約1.4mの深さで確認されている。現況では高さ50cm程度だが、天端が揃っておらず、上の部分を崩してSW 07を構築している。ただし、石垣の立ちあがりほぼ垂直であることから、構造的に高い石垣ではなかったと想定される。

第3項 出土遺物(Fig.18、Tab. 5)

70は第1トレンチ周辺にて表採した資料で、来待釉のかかった軒平瓦である。瓦当には、中央に簡略化した桐を配し、左右に唐草を付けている。71・72は瓦の埋土から出土した遺物である。71は白色の土師質土器で、火鉢の可能性もある。72は銅銭で、寛永通宝である。73・75はいずれも肥前磁器の皿で、73には内面に草花文、外面にも植物のような文様がある。75は口縁部の内外に圏線があるほか、外面に文様がある。Fig.16の12層直上から出土した資料で、SW

07の年代を示す遺物として注目される。74は青花で、他の資料に比べて著しく古いため、流れ込みによると判断される。

第5節 小結

第1項 第5地点

昨年度調査区の下層を確認することと、前年度調査で検出されていた水溜遺構S K 03の全体規模を確認するため、調査範囲を南側に広げて掘り下げを行った。調査によって、江戸時代前半期における製錬や選鉱などの生産活動に関連する遺構が検出された。また、最下面においては岩盤を水平に削平した加工痕と、岩盤を穿り込んだ溝などが検出された。

第2項 第5地点第1トレンチ

昨年度に引き続き、水害で石垣の天端が露出した箇所にはトレンチを設定して調査を行った。発掘調査によって、昨年度の調査と同じく道と石垣が検出され、谷筋の広い範囲が石垣によって区画されていたことが追認された。また、平坦面上からは建物の礎石とみられる石列が検出された。

本年度の調査範囲においては好条件に恵まれ、道路面以下の下層確認が実施できた。その結果、一段階古い石垣が検出され、江戸期に大規模に道路の改修整備が行われていたことを窺わせる資料が得られた。

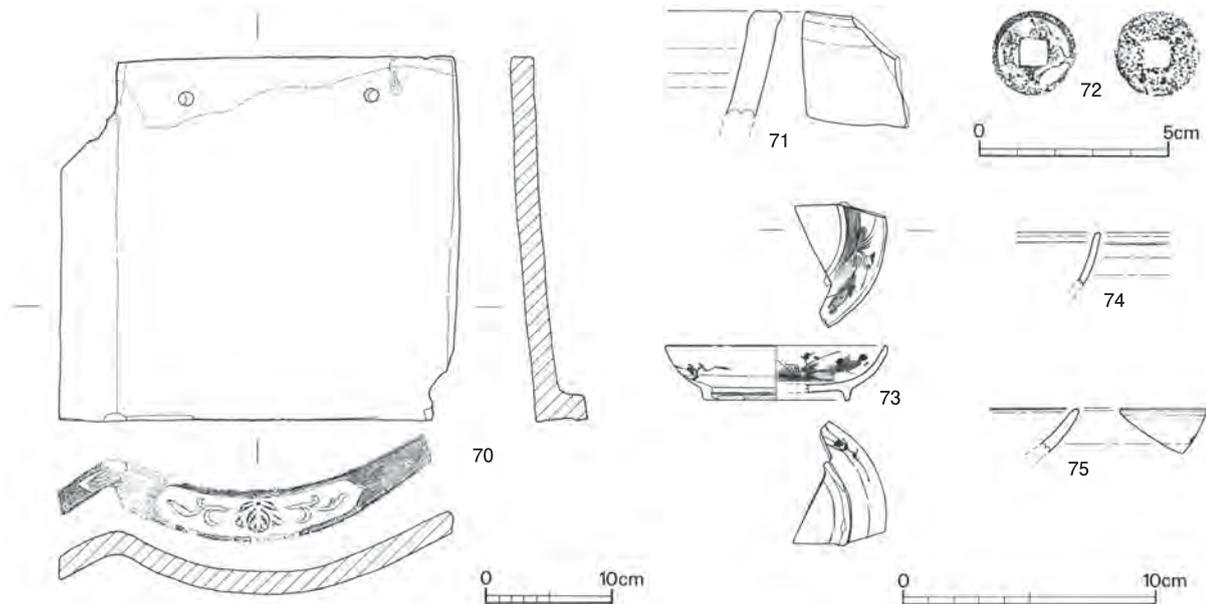


Fig.18 昆布山谷地区第5地点第1トレンチ出土遺物実測図 (S = 1/2、1/3、1/6)

Tab. 5 昆布山谷地区第5地点第1トレンチ出土遺物一覧表

| 挿図番号 | 出土地点 | 種別 | 器種 | 大きさ (cm) | | | 色調 | 成形・調整・文様 | 備考 |
|------|---------------------|-------|------|-------------|-------------|------------|-----|----------|--------|
| | | | | 口径 | 器高 | 底径 | | | |
| 70 | 1 T 表採 | 瓦 | 軒瓦 | 現存長 29.0 | 現存幅 31.5 | 現存厚 6.7 | 来待釉 | | 3720 g |
| 71 | 1 T 瓦埋土 | 土師質土器 | 火鉢か | | (4.6) | | 灰白色 | | |
| 72 | 1 T 瓦埋土 | 銭貨 | 寛永通寶 | 現存長 2.2 | 現存幅 2.2 | | | | 2.4 g |
| 73 | 1 T | 肥前磁器 | 皿 | (8.6) | 2.2 | (5.6) | 透明釉 | | |
| 74 | 1 T | 青花 | 皿 | | (2.1) | | 透明釉 | | |
| 75 | 1 T 南半道2面3面 間整地層 | 肥前磁器 | 皿 | | (1.8) | | 透明釉 | | |

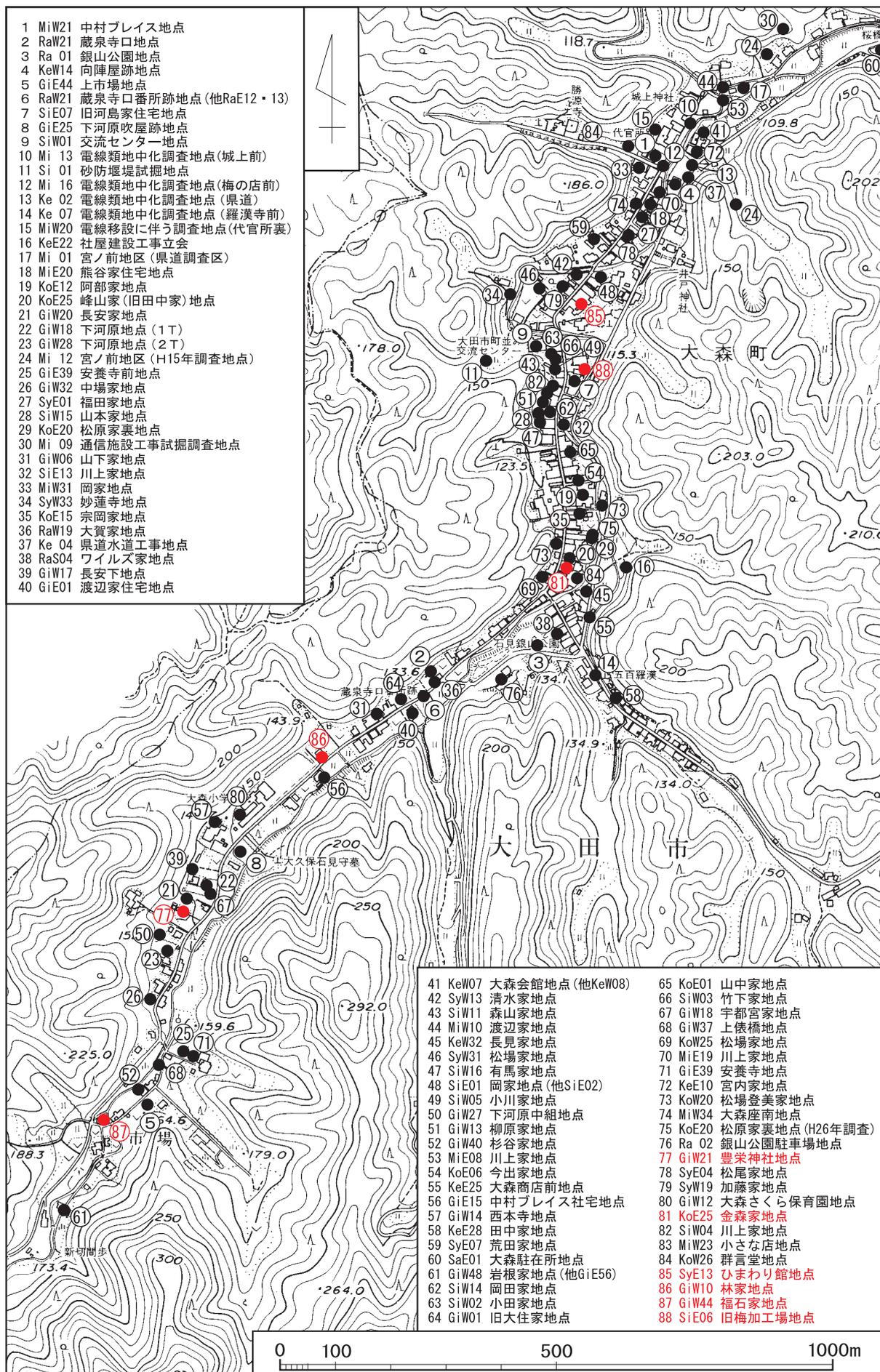


Fig.19 大森銀山伝建地区内発掘調査・試掘・立会地点位置図 (S = 1 / 10,000)

第3章 金森家地点の調査

第1節 調査の概要

第1項 金森家地点の位置と概要

金森家地点は駒の足地区に所在し、市道大森市街線に東面する。駒の足地区は、伝建地区大森区域でも南側に位置しており、北側は正寿寺参道南で新町と境を接し、南側は羅漢町橋までである。寛政12(1800)年に発生した大森大火は、この駒の足地区の中央近くの栄泉寺付近から出火しており、ここから北側の大森の町並みがほとんど被災したとされている。南側については被災しなかった地域でもあるため、大森の町並みの中でもより古い建物が残っている可能性がある地域である。石見銀山遺跡地内においては、町並みの発掘調査を昭和58(1983)年から継続的に実施している。調査には計画的に実施されている学術調査と、住宅建設や道路工事等に伴う試掘・事前調査があり、金森家地点と第4章で報告する豊栄神社地点、第5章の試掘・立会調査はいずれも後者に該当する。

金森家のある場所には、江戸時代前期より川北家(泉屋)が居を構えており、宝暦3(1753)年から文化7(1810)年にかけては石見銀山御料内六軒六組の郷宿の一つとなり、波積組の郷宿を務めていたことが文献史料から知られている。また、代々大森町年寄を務めるなど、大森で最も有力な商家の一つであった。川北家は、江戸時代の初め頃には大森町で酒造業を営んでいたとされるが、その詳細は明らかではない。

明治37(1904)年に、土地と建物は銀山地区内の高橋家の所有となり、大正15(1926)年に銀山地区の旧宅に転居するまで酒造業を営んでいたとされる。その後、昭和6(1931)年に金森家が医院を開業し、昭和16(1941)年に土地と建物が金森家の所有となっている。

建物の一部には後世の改修や部分的な修理などがなされているものの、概ね旧態を維持しており、江戸時代の建築遺構として貴重であることから、昭和49(1974)年に「石見銀山御料郷宿泉屋遺宅金森家」として、島根県の指定史跡となっている。

第2項 これまでの発掘調査の経過 (Fig.20・21)

金森家地点の発掘調査は平成28年度から開始し、今年度は2年目である。平成28年度の調査では主屋土間の礎石と、主屋内の一部、主屋東側に位置する付属屋跡の調査を実施した。主屋の北東側では、風呂や廊下などの金森家の設備に関連する遺構が検出されたほか、現在の建物には関係のない礎石などもあり、前身建物に関連する可能性のある遺構が検出された。付属屋跡ではトレンチ調査を実施し、一部で整地面が確認できた。また、付属屋跡と主屋の位置関係から、主屋よりも付属屋が先行して建設されていた可能性が高いと判断された。

第3項 平成29(2017)年度の発掘調査の概要 (Fig.22)

本年度は、工事によって床下が露出した段階で調査を実施した。調査範囲は主屋西半の床下にトレンチを設定して調査を実施した。

発掘調査により、床下からは少なくとも2面の整地面が確認でき、それぞれの面で礎石や礎石の据え付け痕など、建物に関連する遺構が検出された。現在の建物構築面である第1面では、礎石の据え付け状況を土層断面で確認したほか、地鎮祭で埋められた甕が3点出土した。

第2面では、前身建物SB01に関連する遺構が検出された。SB01は、礎石や石列、石積みのほか、北側に犬走りの痕跡が認められるなど、良好な遺存状態であった。

第2節 調査の成果

第1項 遺構面の状況 (Fig.22・23)

基本的な堆積状況について述べる。各トレンチにおける堆積状況より、本地点においては少なくとも2回の整地が行われていることが判明した。

第1面は第2層上面で、現在の建物の構築面である。2・7トレンチでは礎石の据方が確認されている。床下からは多くの礎石が検出されたが、第1面に伴う礎石にのみ、埋土に煤瓦が充填されていた。

第2面は第3・4・17層上面である。第17層は第

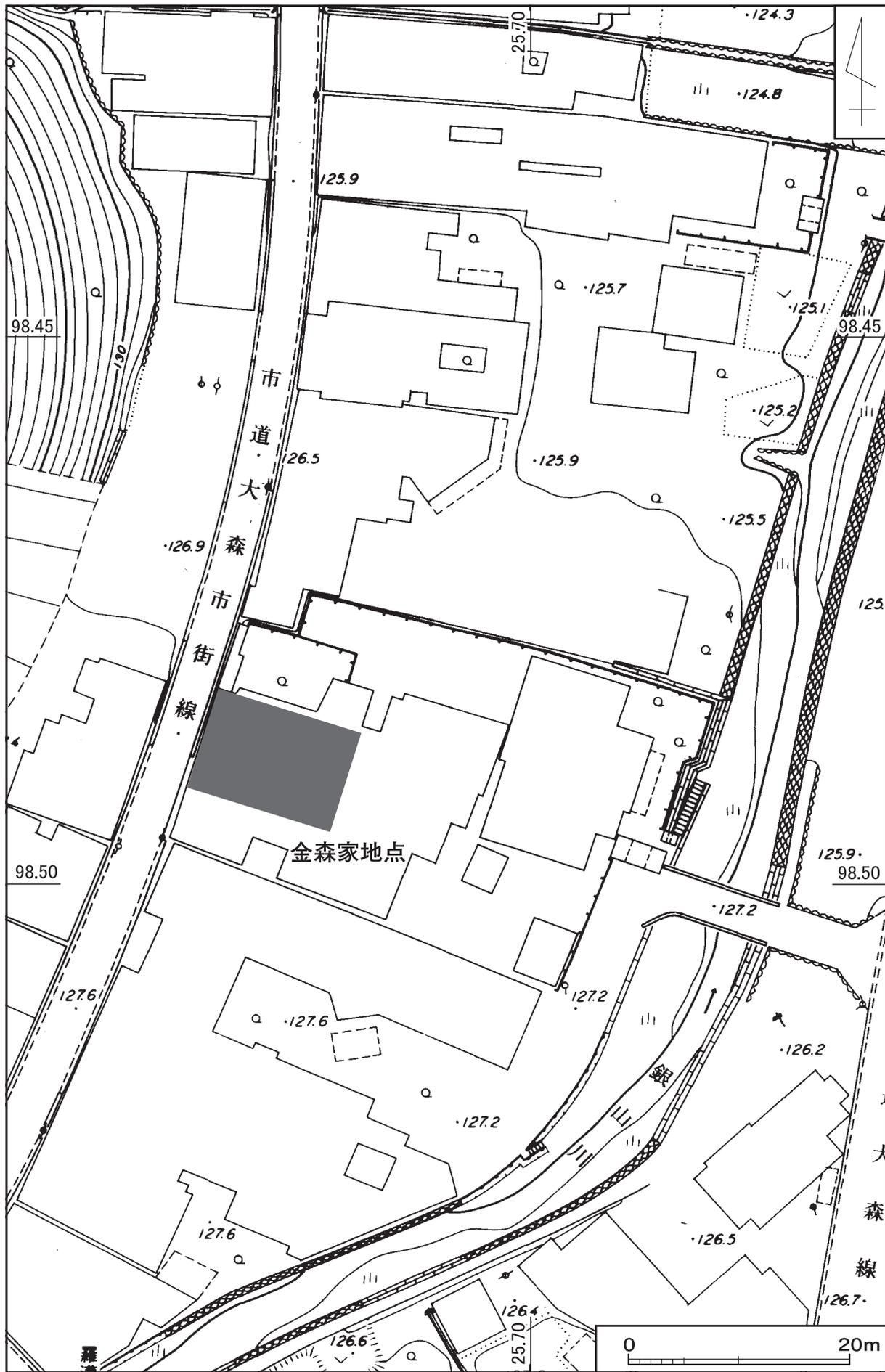


Fig.20 金森家地点周辺地形図・調査区配置図 (S = 1 / 500)

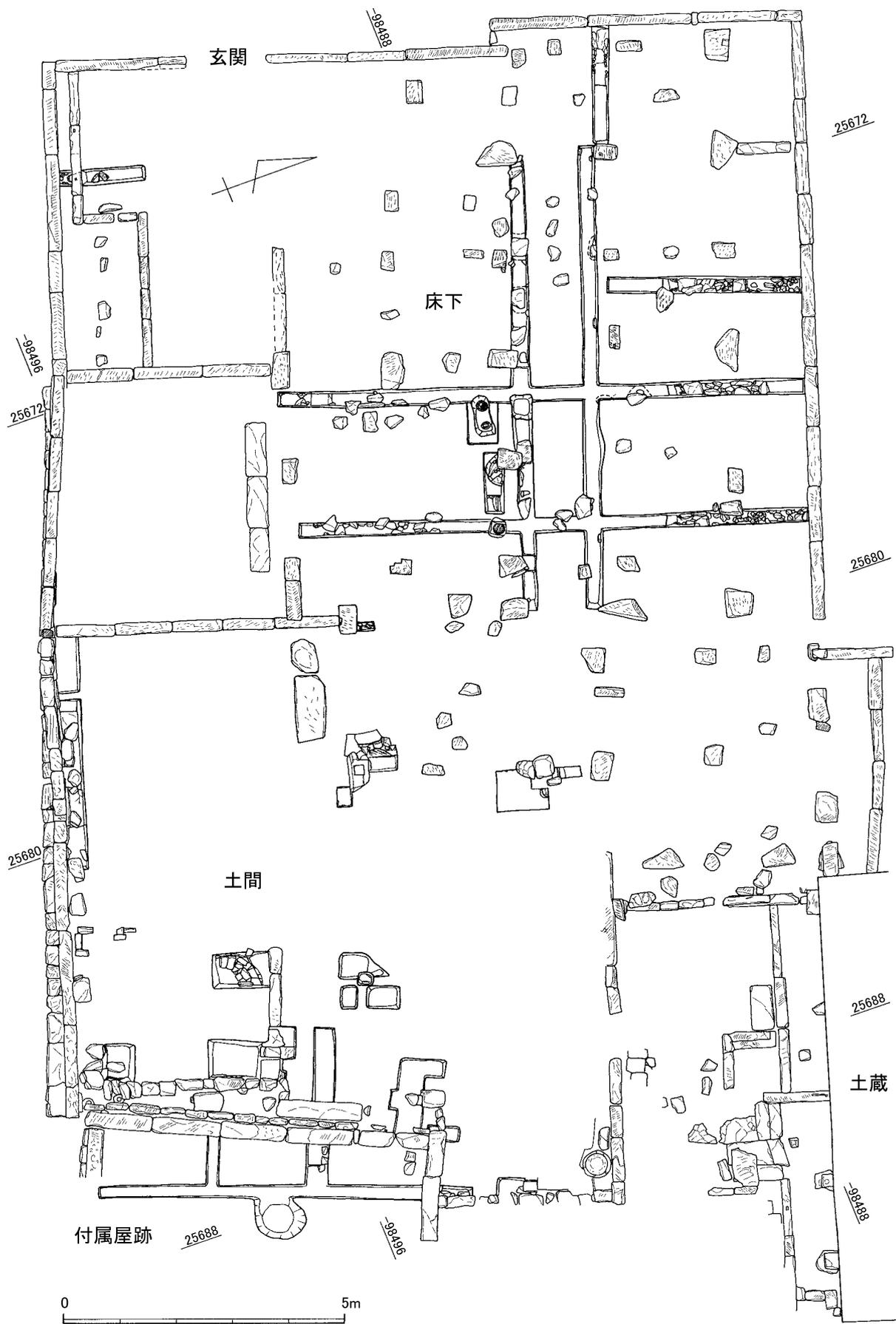


Fig.21 金森家地点トレンチ配置図 (S = 1 / 100)

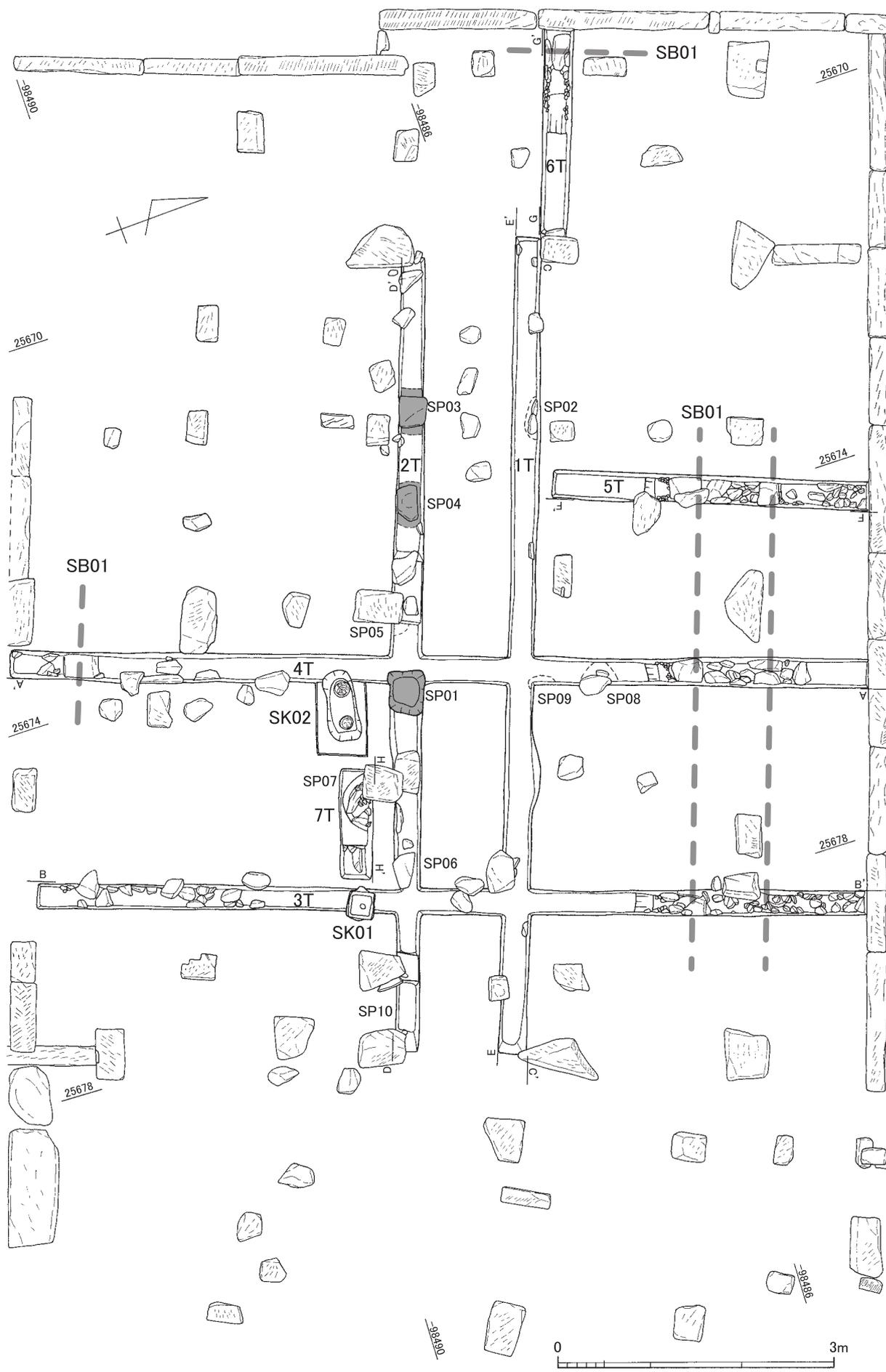
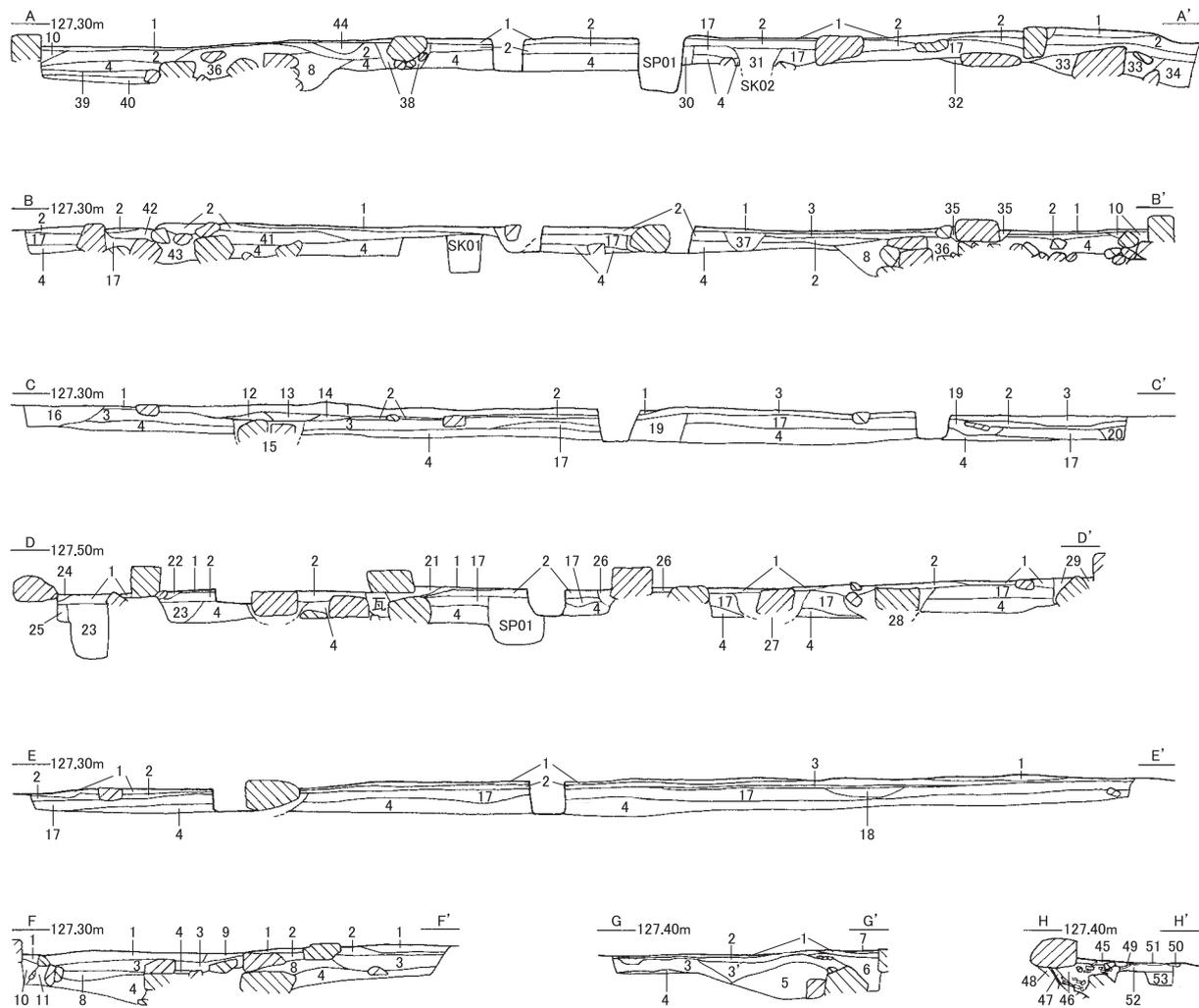


Fig.22 金森家地点トレンチ平面図 (S = 1 / 60)



- | | | | | | |
|----|------------|------------------------------------|----|------------|---------------------------------|
| 1 | 7.5 YR 4/4 | 褐色土(粘性なく、しまり強。シルト質。緻密な粒子。床下粘土) | 30 | 7.5 YR 4/4 | 褐色土(粘性なく、しまり強。シルト質。SP01埋土) |
| 2 | 10 YR 3/3 | 暗褐色土(粘性なく、しまり強。砂質～シルト質) | 31 | 7.5 YR 4/4 | 褐色土(粘性なく、しまり弱。シルト質。SK02埋土) |
| 3 | 10 YR 4/6 | 褐色土(粘性なく、しまり強。シルト～砂質。緻密で均一な粒子) | 32 | 7.5 YR 4/4 | 褐色土(粘性なく、しまり弱。シルト質) |
| 4 | 10 YR 4/4 | 褐色土(粘性なく、しまり強。砂質～シルト質) | 33 | 10 YR 5/6 | 黄褐色土(粘性なく、しまり弱。シルト質) |
| 5 | 10 YR 2/2 | 黒褐色土(粘性しまりともにない。砂質～シルト質。10センチの礫含む) | 34 | 10 YR 4/6 | 褐色土(粘性なく、しまり強。シルト質) |
| 6 | 10 YR 3/3 | 暗褐色土(粘性しまりともにない。シルト質。1センチ以下の小礫含む) | 35 | 10 YR 5/3 | にぶい黄褐色土(粘性なく、しまり弱。シルト質。現況の柱掘り方) |
| 7 | 7.5 YR 5/3 | にぶい褐色土(粘性なく、しまり強。砂質～シルト質。緻密な粒子) | 36 | 10 YR 6/4 | にぶい黄褐色土(粘性なく、しまり弱。シルト質) |
| 8 | 10 YR 2/1 | 黒色土(10センチ以下の礫層。堆積層) | 37 | 10 YR 4/6 | 褐色土(粘性なく、しまりやや強。シルト質) |
| 9 | 10 YR 3/3 | 暗褐色土(粘性なく、しまり強。砂質～シルト質。現況東石の掘え方) | 38 | 10 YR 4/4 | 褐色土(粘性なく、しまり強。シルト質) |
| 10 | 10 YR 3/4 | 暗褐色土(粘性なく、しまり弱。砂質～シルト質。現況延石の掘え方) | 39 | 10 YR 4/6 | 褐色土(粘性なく、しまり強。シルト質) |
| 11 | 7.5 YR 4/4 | 褐色土(粘性しまりともに弱。シルト質～粘質) | 40 | 10 YR 4/6 | 褐色土(粘性なく、しまり強。シルト質) |
| 12 | 10 YR 4/4 | 褐色土(粘性なく、しまりやや強。シルト質) | 41 | 10 YR 4/3 | にぶい黄褐色土(粘性なく、しまり強) |
| 13 | 10 YR 5/4 | にぶい黄褐色土(粘性しまりともに強。シルト質～粘質) | 42 | 10 YR 3/3 | 暗褐色土(粘性なく、しまり強。シルト質) |
| 14 | 10 YR 3/2 | 黒褐色土(粘性なく、しまりやや強。砂質～シルト質) | 43 | 10 YR 3/2 | 黒褐色土(粘性なく、しまり強。シルト質) |
| 15 | 10 YR 3/3 | 暗褐色土(粘性しまりともにない。シルト質～粘質) | 44 | 7.5 YR 5/4 | にぶい褐色土(粘性弱、しまり強。シルト質) |
| 16 | 10 YR 4/6 | 褐色土(粘性しまりともにない。砂質～シルト質。現況東石の掘え方) | 45 | 10 YR 5/3 | にぶい黄褐色土(やや粘質) |
| 17 | 10 YR 5/6 | 黄褐色土(粘性なく、しまり強。シルト質。均一な粒子) | 46 | 10 YR 3/2 | 黒褐色土(しまりない) |
| 18 | 10 YR 3/3 | 暗褐色土(粘性しまりともにない。砂質～シルト質) | 47 | 7.5 YR 3/4 | 暗褐色土(しまり強。緻密) |
| 19 | 2.5 Y 4/4 | オリーブ褐色土(粘性弱しまり強。砂質～シルト質。前身の柱掘え方) | 48 | 10 YR 6/4 | にぶい黄褐色土(よくしまった粘質土) |
| 20 | 7.5 YR 3/2 | 黒褐色土(粘性なく、しまり強。砂質～シルト質。3～5センチの礫含む) | 49 | 10 YR 7/4 | にぶい黄褐色土(やや粘質。現況建物の整地層) |
| 21 | 7.5 YR 4/4 | 褐色土(粘性なく、しまり強。シルト質。現況の柱掘り方) | 50 | 10 YR 7/4 | にぶい黄褐色土(やや粘質。現況建物の整地層) |
| 22 | 10 YR 3/3 | 暗褐色土(粘性なく、しまり強。シルト質。現況の柱掘り方) | 51 | 10 YR 3/1 | 黒褐色土(硬くしめる。前身建物の遺構面) |
| 23 | 10 YR 4/6 | 褐色土(粘性弱、しまり強。砂質～シルト質。前身の柱掘り方) | 52 | 2.5 Y 6/4 | にぶい黄色土(前身建物の整地層) |
| 24 | 10 YR 4/4 | 褐色土(粘性弱、しまり強。砂質～シルト質。均一な粒子) | 53 | 10 YR 5/6 | 黄褐色土(前身建物の整地層) |
| 25 | 10 YR 4/3 | にぶい黄褐色土(粘性なく、しまり強。シルト質) | | | |
| 26 | 10 YR 4/3 | 褐色土(粘性なく、しまり強。シルト質。現況の柱掘り方) | | | |
| 27 | 10 YR 3/2 | 黒褐色土(粘性なく、しまり弱。砂質～シルト質。前身の柱掘り方) | | | |
| 28 | 10 YR 4/3 | にぶい黄褐色土(粘性なく、しまり強。前身の柱掘り方) | | | |
| 29 | 10 YR 4/4 | 褐色土(粘性しまりともに弱。シルト質) | | | |

0 3m

Fig.23 金森家地点トレンチ土層断面図 (S = 1 / 60)

2面において検出されたSB 01の石積みの裏込めである第5・8層上面と同一面で、SB 01の整地層と考えられる。本遺構面からは、1・2・4トレンチで、前身建物SB 01に関連する礎石や、その抜き取り痕が、3～5トレンチではSB 01の礎石と石列、石積みが検出されている。6トレンチで検出されたSB 01の礎石は、現在の建物よりも約50cm東側にずれており、現在の建物を建てる際に、敷地を西に向けて拡張したことが窺われる。また、本遺構面から検出された礎石はいずれも現在の建物と比べてやや小さい。

現在の建物は、棟札の記載内容などから嘉永3(1850)年に建てられたと推定されており、第1面はこの時期に比定される。第2面については、遺物が出土していたため明確な年代は不明であるが、少なくとも現在の建物以前の年代である。

第2項 各トレンチの様相

【第1トレンチ】

第1トレンチは床下のほぼ中央の東西方向に、長さ約8.7m、幅約60cmで設定したトレンチである。遺構としては、トレンチの中央部と西部でSB 01の礎石と、その据付け痕(SP 02・09)などが確認できた。いずれも第2面から掘り込まれている。また、トレンチ東端から約2.9mの地点で、第1層から第4層以下まで延びる堆積層の地割れが確認できた。この痕跡は地震等の天災により生じたものと推定される。本地域は明治5(1872)年に発生した浜田地震により被災しており、確認した地割れはその痕跡の可能性がある。

【第2トレンチ】

第2トレンチは、第1トレンチから南に約1mの位置で、建物のほぼ中央に設定した。トレンチの大きさは第1トレンチとほぼ同様である。遺構としては第1・2面のそれぞれに伴う礎石とその据え方が検出された(SP 01・03～07・10)。これらの内で、SP 05・07は第1面、SP 01・03・04・06・10は第2面にそれぞれ伴う。

【第3トレンチ】

第3トレンチは、床下の東部に南北方向に設定したトレンチで、長さ約9.1m、幅約60cmである。本トレンチでは北端部から2.6mの位置で、第2面に伴う前身建物跡SB 01の礎石及び石列・石積みが検出

された。SB 01は、第2面を掘り込んで礎石等を据え、石積みの裏込めは黒色の礫層(Fig.23-8層)によって充填されていた。また、石列と石積みの間隔は約80～90cmで、犬走りとなっていたものと推定される。本トレンチの北から3.4mの位置では、地鎮の跡とみられる土坑SK 01が検出された。

【第4トレンチ】

第4トレンチは、第3トレンチから2.25m西側に設定したトレンチで、長さ約9.4m、幅約60cmである。北端部から約2.6mと、南端部から約20cmの位置で、第3トレンチでも検出されていたSB 01の礎石及び犬走りが検出された。いずれにおいても第2面である第4層を掘り込んで礎石を据えている。石積みの裏込めには、第3トレンチ同様黒色礫層(Fig.23-第8層)が充填されていた。柱穴としてはSP 01・08・09があり、いずれも第2面に伴う。SP 08には礎石と栗石が残っていたが、SP 01・09には礎石はなく、抜取痕のみであった。また、東壁でSK 02の一部が確認されたため、一部を東側に85cm程度拡張してSK 02全体を検出した。

【第5トレンチ】

第5トレンチは、第4トレンチから約1.7m西側に設定したトレンチで、長さ約3.5mである。第5トレンチでも北端部から2.6m辺りからSB 01の基礎と犬走りの痕が検出されている。第5トレンチでは第17層が確認できておらず、その下の第4層を掘り込んで基礎や犬走りを据えつけていた。第17層は第1トレンチ北壁でも確認できておらず、敷地内の北西部には堆積していない。石積みの裏込めには、3・4トレンチ同様黒色礫層(Fig.23-8層)が充填されていた。

【第6トレンチ】

第6トレンチは、第1トレンチのすぐ西側に東西方向に設定したトレンチで、長さ約2.1m、幅60cmである。トレンチ西端部から約10cmの位置で、SB 01の一部と推定される石列が検出された。石列の裏込めには3～5トレンチと同様の黒色礫層(Fig.23-5層)が充填されていた。第5層と第8層は、確認できた場所が離れており、直接的なつながりも確認できていないため層番号を変えているが、いずれもSB 01に伴う裏込めで、本質的には同じ堆積層とみられる。本トレンチでのSB 01の検出

位置は現在の建物端よりもやや東側であり、現在の建物が建てられる際に敷地を西側に拡張していることが判明した。

【第7トレンチ】

第7トレンチは、第2トレンチから約25cm南側に東西方向に設定したトレンチで、長さ約2.2m、幅約60cmである。第3トレンチではSK 01が、第4トレンチ拡張部ではSK 02がそれぞれ検出されており、それらの間にも地鎮に関連する遺構が存在する可能性が考慮されたため、確認のために本トレンチを設定して調査を行なった。本トレンチでは地鎮に関連する遺構は検出されなかったが、第1面に伴う柱穴SP 07が平面的に検出された。

第2項 検出遺構 (Fig.22)

遺構としては、前身建物の痕跡とみられるSB 01やSP 01～10、建物を建てる際に工事の安全を祈願する地鎮の際の痕跡とみられるSK 01・02などが検出された。

【SB 01】

SB 01は第2面に伴う前身建物跡で、3～6トレンチでその一部が検出された。規模は南北6.7m、東西9.4m以上である。東西方向については、調査範囲

の関係もあって全体を確認することはできなかった。検出された礎石の方向は現在の建物と揃っている。第3～第5トレンチ北部では、石列と石積みが平行に検出された。両者の幅は約80～90cmで、南側は建物の礎石、北側は敷地の段差とみられ、この間は犬走であったと考えられる。礎石と犬走りは、第2面を一部掘り込んで据えられ、裏込めには黒色の礫 (Fig.23-第5・8層) で固められていた。これらの石積みは、石を2・3段に積み上げて構築され、上面は平らに整えられていた。第4・第5・第6トレンチで検出された石積みは、外側に面を持っていることから、敷地の段差と判断できる。西側については道路に面することから道路との境であったと推定される。検出したのは現在の建物端よりも50cmほど東側にあることから、現在の建物が建てられる際に、敷地を西側に拡張しているとみられる。

【SK 01】

SK 01は第3トレンチの中央部で検出された。検出箇所は主屋のほぼ中央部に位置する。平面形は一辺約30cmの正方形である。現地表面から底面までが約45cmで、壁面はほぼ垂直に掘下げられている。底面中央付近には一辺21cmの木箱が据えられた状態で残存して

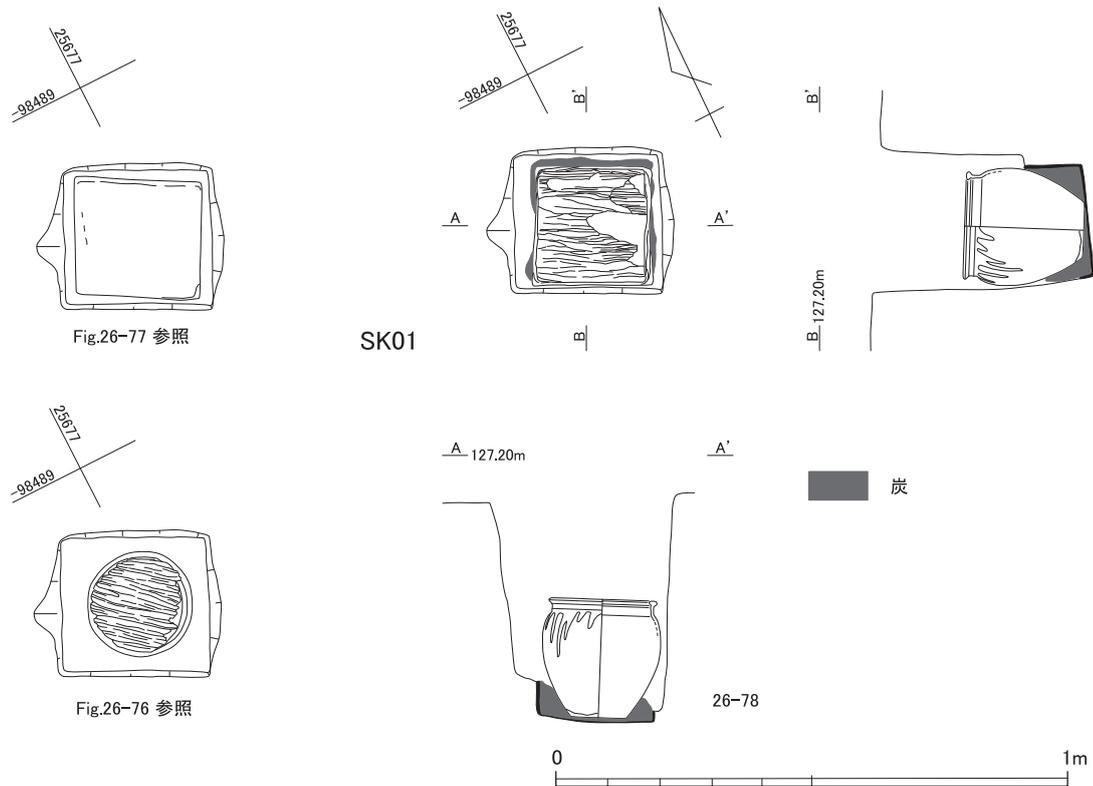


Fig.24 金森家地点SK 01平面図 (S = 1 / 15)

いた。木箱は底部のみが残存しており、箱の周囲はやわらかい黄褐色土で埋められていた。この木箱には一字一石経を入れて、木蓋をされた陶器甕が納められており、周囲には炭が充填されていた。炭の直上には穴の大きさとほぼ同じ大きさの陶板で塞がれていた。こうした出土状況から、甕を入れて周囲を炭で充填した木箱を埋めた後、上部にも炭を充填し、陶板で塞ぎ、最後に黄褐色土で埋めたものと推定される。また、甕の周辺には木箱を止めていた釘とみられる細長い金属片が散乱していた。また、甕の外からは、「有為」と墨書された小石が1点出土した。出土位置および内容物より、現主屋の建築に際しての地鎮遺構と考えられる。

【SK 02】

SK 02 は、主屋の中央部で、SK 01 の約 1.7 m 東側で検出された。土坑内には甕が 2 点出土した。ただし、2 点の甕は同時に埋められたわけではなく、堆積状態から西側が先で、東側が後であることが判明した。SK 01 で見られたような木箱や炭、木蓋はなく、素掘りの土坑に甕を入れた後にそれぞれ棧瓦と建瓦で蓋をしていた。SK 02 東半の埋土からは木の葉が多数出土しており、甕を埋納する際に同時に埋められたとみられる。

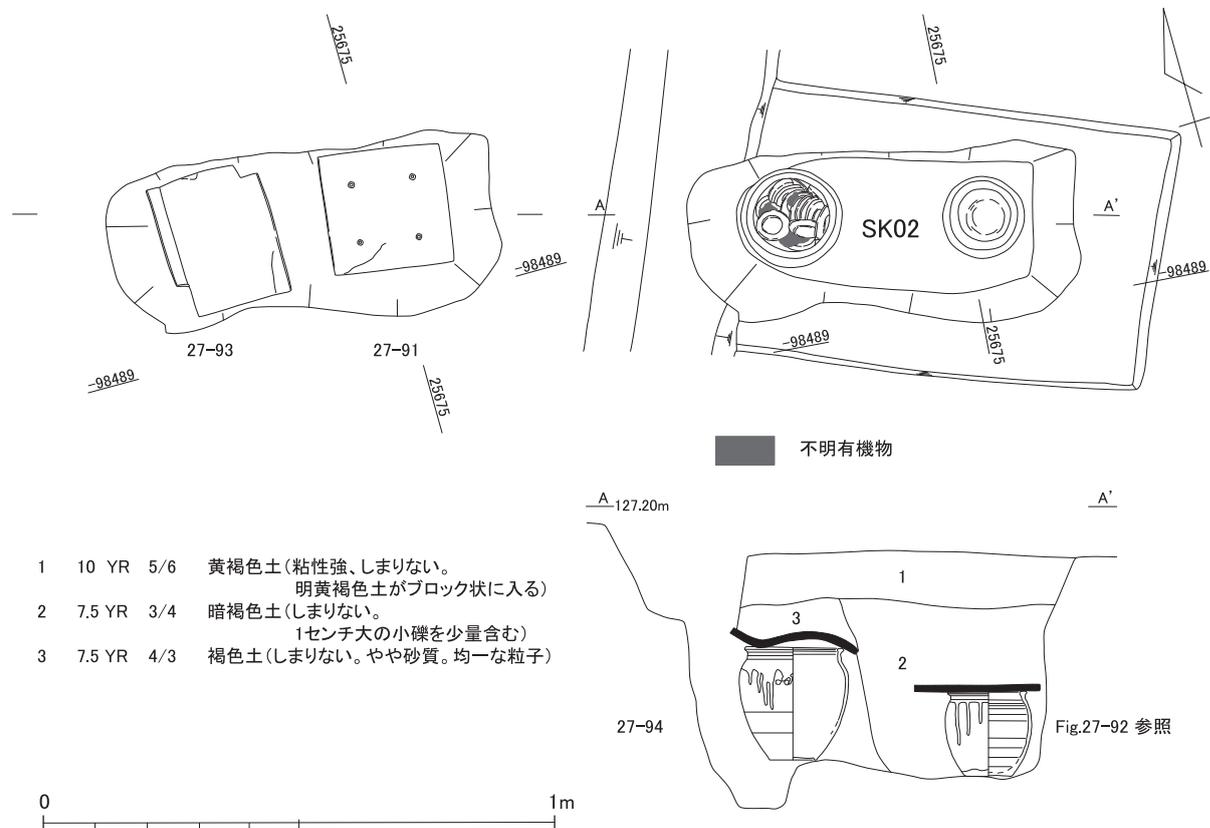
土坑の規模は東西約 75cm、南北 30～35cm、深さ約 45cm である。西側は底面がさらに 10cm ほど掘り込まれ、深さ約 55cm となっている。SK 02 は、西側をまず掘り込んでかわらけの入った甕 (Fig.27-94) を埋め、その後で東側を掘り込んで甕 (Fig.27-92) を埋めている。

西側は南北が 30～32cm、東側を掘り込まれているため本来の大きさは分からなくなっているが、最大で 40cm 程度と推定される。深さは、地表面から最大で 55cm ほど掘り込まれている箇所もあるが、甕は 40cm 付近に納められていた。甕の中にはかわらけが納められており、上には棧瓦を置いて蓋にしていた。

東側は平面形が南北 35cm、東西 43cm の隅丸方形で、深さは約 45cm である。建瓦で蓋のされた甕が埋納されていたが、他の 2 点とは異なり、内容物はなかった。ただし、甕の内面には付着物が見られることから、分解もしくは蒸発などによつ失われた可能性もある。

【SP 01～10】

SP 05・07 は第 1 面に伴う柱穴である。これらの中で SP 07 については平面的に検出でき、径約 80cm、深さ 38cm の規模が確認できた。SP 05 は断面で確認したため、本来の大きさと異なる可能性があるが、



径約65cmであった。SP 05・07のいずれの埋土にも割れた燻瓦が多く含まれており、栗石の代わりとしていた。この燻瓦は、前身建物を解体した際に出た廃材を利用してとみられ、SB 01は燻瓦を載せた建物であった可能性がある。

SP 01～04・06・08～10は第2面に伴う柱穴で、SB 01に関連する遺構である。SP 01・02・09・10では礎石は抜き取られていたが、SP 03・04・06・08は礎石ごと整地層によって埋められていた。ただし、SP 02については、礎石は外されていたものの、その根固めとみられる石が2点残っていた。これらの配置状況より、1間は6尺5寸と考えられ、SP 03・04間は約1mで半間間隔であったことが窺われる。いずれも断面による確認ではあるが、それぞれの径はSP 01が40cm、SP 02が約60cm、SP 03が約80cm、SP 04が約60cm、SP 08が約50cm、SP 10が約1.1mである。SP 09については片側を壊してしまったため径を確認できなかったが、40cm以上である。

第3項 出土遺物 (Fig.26・27, Tab. 6)

SK 01・02から出土した3点の甕と、それに伴う一字一石経やかわらけ、それぞれの甕の蓋としていた瓦や陶板など、地鎮に関わる遺物がまとまって出土している。

【SK 01 出土遺物】

77は陶板で、片面に黒釉がかかっている。SK 01に埋納されていた一連の遺物に蓋をするように配置されていた。78は表面に来待釉のかかった石見焼の甕である。大きさは口径17.7cm、底径9.7cm、器高20.9cmで、1升入りの甕である。底面には墨書で「式□□ □ □口口 代百文」とある。SK 02から出土した甕にも同様に金額を含んだ墨書があり、価格を表している可能性がある。

76は78の木蓋である。一枚板を口の形に合わせて加工している。

79～90は、78の甕に埋納されていた一字一石経の一部である。全てを取り出していないため正確な内容量は把握できていない。いずれも小さな川原石で、大きなものでも径4cm未満である。1点当たり1文字ずつ墨で文字が書かれており、図化したものでは「請」「受」「矩」などが確認できており、経典の一部とみられる。

【SK 02 出土遺物】

91は平瓦で、92にかぶせられていた。甕の口と接していた部分が円形に変質している。77・93には同様の痕跡は認められないことから、92の内容物は他の2点とは質的に異なっていた可能性がある。92はSK 02の東側に埋納されていた甕で、出土した3点の中ではもっとも小型の資料である。底面には「六十五文 □」と墨書されている。埋納された甕3点の内では本資料のみ内容物が無かった。しかし、内部を確認すると、壁面に黒色の付着物が見られることから、果物や穀物などの有機物、もしくは水・酒などの液体が入っていたものが、腐食や蒸発などによって失われた可能性がある。91にみられる変色も、有機物による変性によって生じたかもしれない。

93は棧瓦で、94にかぶせられていた。94は、SK 02西側に埋納されていた甕で、78に比べて一回り小さい。底面には「□ 四拾文 □□□」と墨書されている。中にはかわらけが27枚と、輪宝とみられる銅板が一枚入っていた。また、かわらけの周囲には黒色に変質した有機物や籾殻が残っていた。

95～100は94に入れられていたかわらけの一部である。いずれも口径6.3cm、底径4.5cm、器高1.2cmで規格が揃っており、底部には糸切の痕跡が残っている。また、甕の内部には同様に変質した黒色の有機物が残っていた。

第3節 小結

本年度の調査は金森家の床下を対象として実施した。調査の結果、金森家敷地の下層には少なくとも2時期の整地面があることが確認できた。また、第2面以降の段階で、敷地が西側に拡張されたことも判明した。

現在の建物に関連する遺構としては、礎石の他には、建物の建築に当たった地鎮に関連する遺構・遺物が検出された。検出状況や内容物については前述のとおりである。石見銀山地内においては、これまでに渡辺家住宅で地鎮に関連する遺構が検出されており、日蓮宗に関連することが指摘されていた。確定的ではないが、金森家で検出された地鎮遺構は、経石とともに穀物や水・酒を埋納する日蓮宗の修法に則った様相を呈しており、両者の関連について今後検討の必要がある。

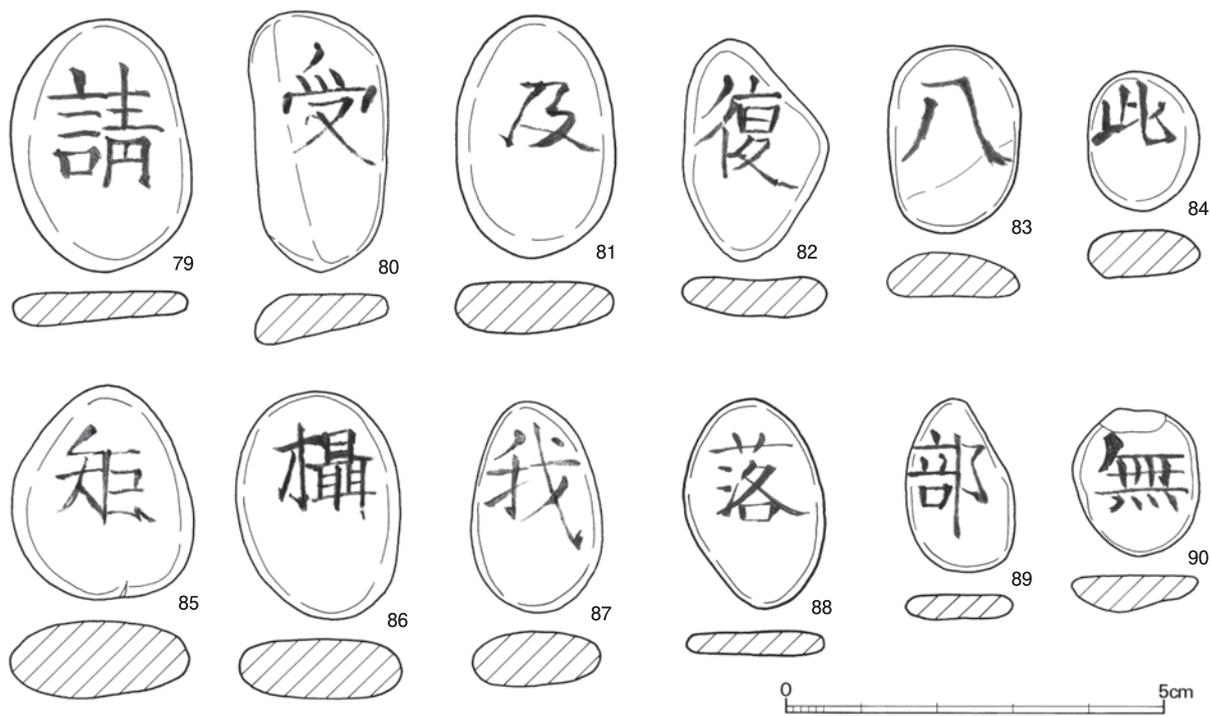
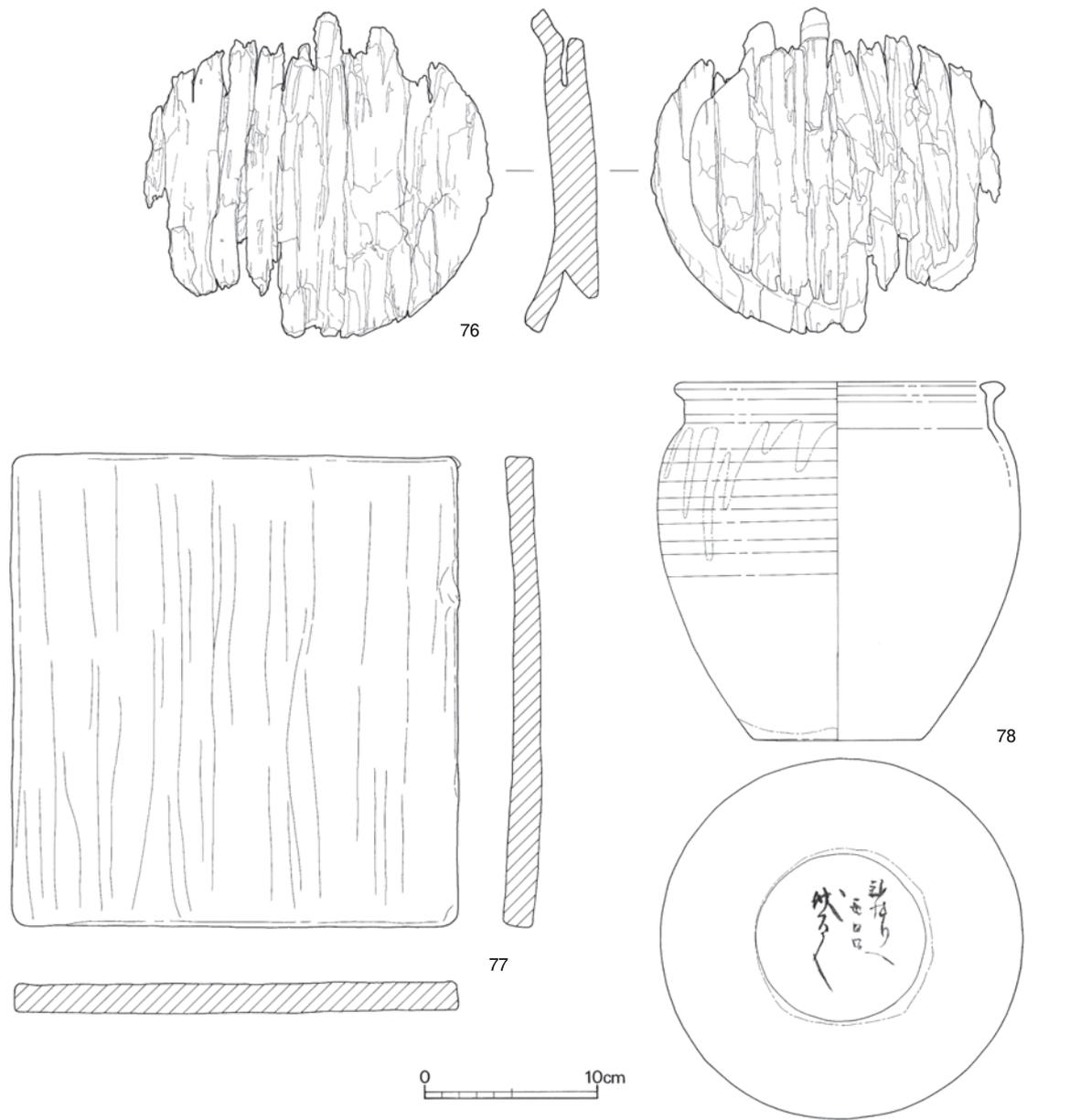


Fig.26 金森家地点出土遺物実測図Ⅰ (S=1/1、1/4)

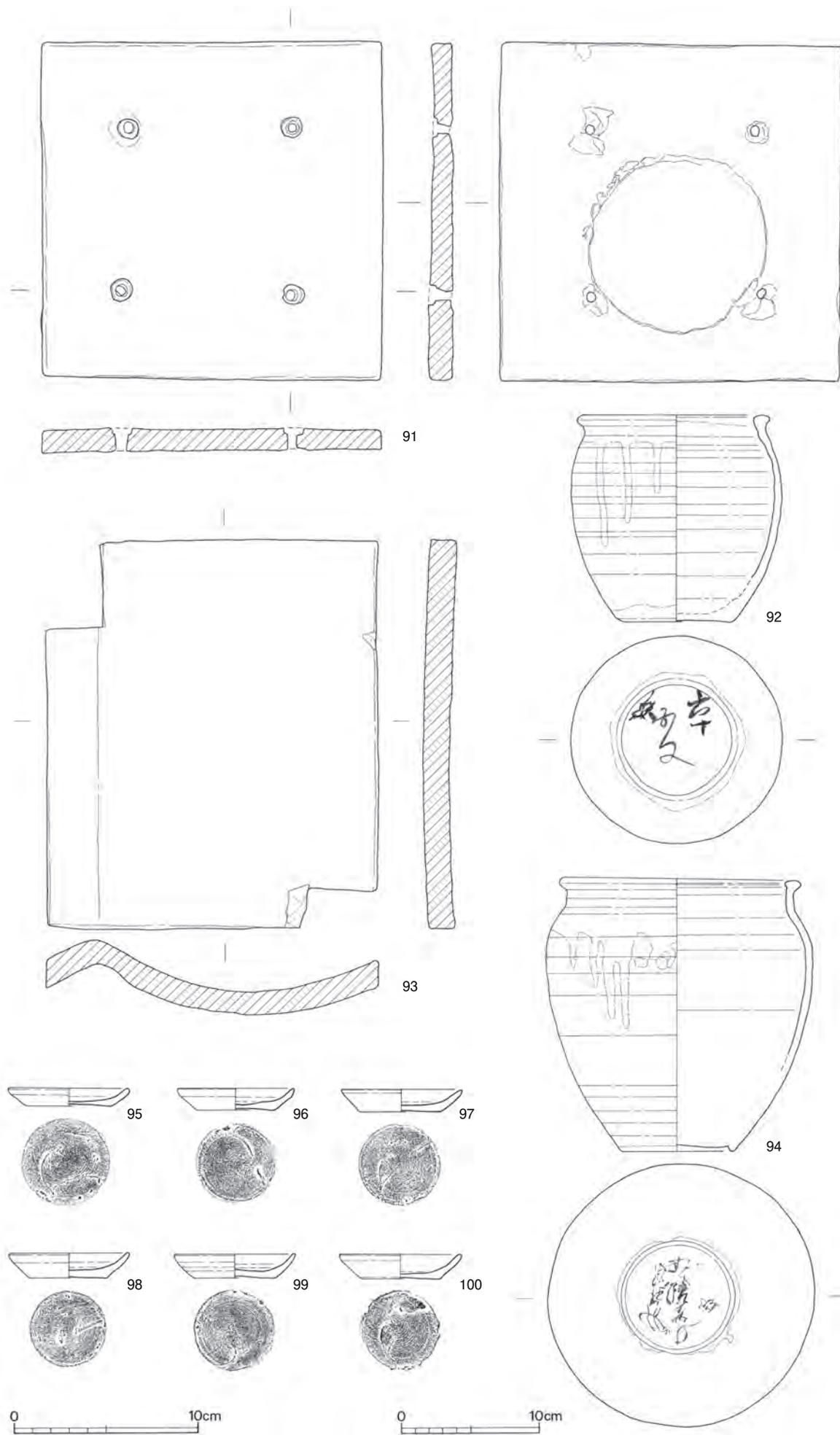


Fig.27 金森家地点出土遺物実測図Ⅱ (S=1/3、1/4)

Tab. 6 金森家地点出土遺物一覧表

| 挿図 番号 | 出土地点 | 種 別 | 器 種 | 大きさ (cm) | | | 重量 (g) | 色 調 | 備 考 |
|----------|---------|-------|-----|-------------|-------------|------------|--------|------------------|-------|
| | | | | 現存長 | 現存幅 | 現存厚 | | | |
| 76 | SK01 | 木製品 | 蓋 | 19.0 | 20.0 | 2.7 | | | |
| 77 | SK01 | 施釉陶器 | 盤 | 27.5 | 25.8 | 2.2 | 2560 | 褐釉 | |
| 78 | SK01 | 石見 | 甕 | 口径 17.7 | 器高 20.9 | 底径 9.7 | | 来待釉 | 経石入り |
| 79 | SK01 甕内 | 石製品 | 経石 | 3.4 | 2.4 | 0.5 | 3.2 | 灰白色 | |
| 80 | SK01 甕内 | 石製品 | 経石 | 3.5 | 1.9 | 0.7 | 3.7 | 灰白色 | 受 |
| 81 | SK01 甕内 | 石製品 | 経石 | 3.2 | 2.1 | 0.7 | 5.5 | 灰白色 | 及 |
| 82 | SK01 甕内 | 石製品 | 経石 | 3.0 | 1.9 | 0.6 | 3.0 | 灰白色 | 復 |
| 83 | SK01 甕内 | 石製品 | 経石 | 2.5 | 1.8 | 0.6 | 2.5 | 灰白色 | 八 |
| 84 | SK01 甕内 | 石製品 | 経石 | 1.9 | 1.5 | 0.6 | 1.7 | 灰白色 | 此 |
| 85 | SK01 甕内 | 石製品 | 経石 | 2.9 | 2.4 | 1.0 | 9.2 | 灰白色 | 矩 |
| 86 | SK01 甕内 | 石製品 | 経石 | 3.1 | 2.2 | 0.8 | 5.5 | 灰白色 | |
| 87 | SK01 甕内 | 石製品 | 経石 | 1.9 | 1.3 | 0.7 | 3.6 | 白色 | 我 |
| 88 | SK01 甕内 | 石製品 | 経石 | 2.8 | 1.9 | 0.3 | 1.8 | 灰白色 | 落 |
| 89 | SK01 甕内 | 石製品 | 経石 | 2.3 | 1.4 | 0.3 | 1.3 | 灰白色 | 部 |
| 90 | SK01 甕内 | 石製品 | 経石 | 2.0 | 1.7 | 0.5 | 1.4 | 灰白色 | 無 |
| 91 | SK02 | 瓦 | | 24.7 | 24.8 | 2.0 | 1710 | 浅黄色・黒色 黒褐色・灰色 | |
| 挿図 番号 | 出土地点 | 種 別 | 器 種 | 大きさ (cm) | | | 重量 (g) | 色 調 | 備 考 |
| | | | | 口径 | 器高 | 底径 | | | |
| 92 | SK02 | 石見? | 甕 | 13.3 | 15.1 | 7.8 | | 褐釉? | |
| 93 | SK02 | 瓦 | 平瓦 | 現存長 28.4 | 現存幅 24.0 | 現存厚 5.4 | 2260 | にぶい黄橙色 | |
| 94 | SK02 | 石見 | 甕 | 17.0 | 20.0 | 8.2 | | 来待釉 | カワケ入り |
| 95 | SK02 甕内 | 土師質土器 | 皿 | 6.6 | 1.0 | 4.6 | | 浅黄橙色 | |
| 96 | SK02 甕内 | 土師質土器 | 皿 | 6.4 | 1.2 | 4.3 | | 浅黄橙色 | |
| 97 | SK02 甕内 | 土師質土器 | 皿 | 6.6 | 1.3 | 4.4 | | 浅黄橙色 | |
| 98 | SK02 甕内 | 土師質土器 | 皿 | 6.5 | 1.4 | 4.1 | | 浅黄橙色 | |
| 99 | SK02 甕内 | 土師質土器 | 皿 | 6.6 | 1.4 | 4.4 | | 浅黄橙色 | |
| 100 | SK02 甕内 | 土師質土器 | 皿 | 6.5 | 1.4 | 4.3 | | 浅黄橙色 | |

第4章 豊栄神社地点の調査

第1節 調査の概要

第1項 豊栄神社地点の位置と概要 (Fig.32)

豊栄神社は、石見銀山遺跡でも史跡指定地と伝建地区が重なる下河原地区に所在している。

江戸期には、洞春山長安寺という曹洞宗の寺院で、毛利元就の木像を安置していたことから長州藩とも密接な関係を持っていた。明治2(1869)年、毛利元就に「豊栄」の神号が授与されたことによって、豊栄神社へと変遷した。境内は市道銀山線の西側に位置し、鳥居、参道、随身門、拝殿、本殿が直線的に並んでいる。境内には灯籠や狛犬などの石造物が多数奉納されている。現存する建物は、慶応2(1866)年から明治3(1870)年まで、当地を支配した長州藩が中心となって造営されたことが分かっており、建築年代が明確になっている貴重な建造物である。

昭和18(1943)年に発生した水害(以下、「昭和18年水害」とする)によって多大な被害を受け、主要な建物は辛うじて倒壊を免れたものの、周囲を巡っていた塀や玉垣はほとんどが倒壊し、石造物も多くが流失していた。その後、本格的な修理や復旧などは行われていなかった。このような経緯に加えて、経年劣化によって建造物の損傷は激しく、特に建物については倒壊の危機に晒されていた。

第2項 調査の経緯

【平成27年度の調査成果】

豊栄神社においては、社殿の修理及び境内の整備に関連する整備が進行中で、史跡の整備事業の一環として、平成28(2016)年度から平成31(2019)年度にかけて整備を実施する計画が進んでいる。これまでに境内地内の排水・流末処理施設の整備や、拝殿修理に向けての調査が実施されてきている。発掘調査は、平成27(2015)年度に、整備の基礎資料を得ることを目的として、境内造成時の整地面や排水施設の有無の確認調査を実施した。調査によって、玉垣・土塀の基礎が検出されて境内の規模及び構造が明らかとなったほか、昭和18年水害の被害状況とその復旧作業の内容が明らかとなった。

本殿と拝殿の間からは、水害によって完全に埋没し、存在が忘れられてしまっていた石組の溝(SD01)が検出された。SD01は、本殿側や境内地からの集排水機能を備えており、神域を区画すると共に周囲の水を集めて神社の北側へと排出していたことが判明した。SD01が埋没したことで境内に溜った水の集排出が十分に行われなくなり、雨天時には境内が水浸しとなる要因の一つとなっていたようである。また、昭和18年水害による堆積層は境内の全面に及んでおり、境内の南側ほど厚く堆積していることが判明した。さらに、流入した土砂の大半は除去されず、参道のみ除去された痕跡が確認され、参道周辺の地盤が参道よりも高くなった経緯が判明した。本殿及び拝殿周辺は土砂を完全に除去しないままに水平に整地した様相も窺え、災害復旧は限定的であったことが判明した。

【本年度の調査概要】

本年度は、慶応3(1867)年の拝殿建築にあたり地業としてどのような造成・盛土が行われたのかを明らかとすることを主な目的として調査を実施した。豊栄神社の造営については、初期段階で造成工事が行われ、拝殿の建築されている敷地もまず造成によって平坦面が構築されていることが平成27年度の調査で明らかとなっていた。そのため、本年度の調査ではこの造成面までを確認することとした。発掘調査は、まず拝殿の中央に十字のトレンチ(1・2トレンチ)を設定して行った。その後、修理施工に当たって礎石と延石の関係を把握する必要が生じたことと、北端の礎石が現状で8cm程度低くなっていることの原因究明のため、周囲の礎石にサブトレンチ(3~5トレンチ)を設定して調査を行った。

発掘調査によって、拝殿構築時の地業の様相が確認できたほか、拝殿床下に配された礎石のほとんどについて、据え付け状況が確認できた。拝殿床下には昭和18年水害の際に堆積した土とみられる堆積層もあり、当時の復旧が限定的であったことが追認された。また、礎石には床下格子の木枠型が掘り込まれていることや、前面のみではあるが基礎の延石が奥まで配置し



Fig.28 豊栄神社地点調査区配置図 (S = 1 / 500)

ているように見せるための石列が配されていることなど、拝殿の造作に係る痕跡も確認できた。さらに、第4トレンチでは造成土と造成面のいずれもが他のトレンチと比べて脆弱であり、地盤沈下の直接的な原因となっていることも判明した。

第2節 調査の成果

第1項 層序 (Fig.29・30)

最上面に昭和18年水害時に堆積したと考えられる浅黄色砂質土 (Fig. 29・30-1) が全面に堆積していた。拝殿の中央には束石があったが、この堆積層によって埋没していた。現地表面から50～60cm下位で、水平に整地された造成面が検出された。その上には第12層と第10層がほぼ水平に盛られ、上面は第3層によって整地されていた。ただし、第3層は第3～5トレンチでは確認できなかった。第3～5トレンチは拝殿隅部に設定したトレンチで、現状でも拝殿中央部より低くなっており、整地後に流失した可能性がある。以上のことから、豊栄神社の拝殿は、造成面から50cm程度造成された上に建てられていることが判明した。拝殿の周囲には延石が2段分階段状に積まれており、盛土の土止めを兼ねていると考えられる。また、根石の周囲では、それぞれを据え付ける際の掘方が確認されている。据え付け痕はいずれも造成土(第10・12層)を掘り込んだのちに埋めており、盛土が行われた後に、根石・礎石を据えている。礎石は、地上に出ている部分の大きさは1辺25cm程度で、柱の当たる部分は一辺約15cmである。礎石には柱の当たる面の横に、床下の格子をはめ込むため幅10cm程度の溝が彫り込まれている。地上に出る部分については丁寧に加工されているが、地下に埋まって見えなくなる下部分については限定的な加工となっている。礎石の下部はそれぞれで大きさが異なっていることから、礎石を据えたのちに、地上に露出した部分を加工して調整した可能性もある。

第2項 各トレンチの様相

【第1トレンチ】

拝殿中央の南北方向に、幅55cm、長さ4.1mで設定した。本トレンチの南北で検出された礎石の直下には、確認できた範囲で一辺が50cm程度の大型の根石

が置かれていた。根石の埋土 (Fig.29-6・7・3・9) には、栗石などが含まれておらず、根石の周囲にも固定するような根固めも確認できなかったことから、造成面に置いたのみで固定や補強などは行われていなかったと推定される。

【第2トレンチ】

拝殿中央の東西方向に、幅55cm、長さ4.1mで設定した。トレンチの東西で礎石が確認できたが、礎石の下には根石などは無かった。第2トレンチ西側では、トレンチの南北にある礎石の間で、埋設された板を検出した。これは、盛土した際の型枠の可能性はある。

第2トレンチの東西には、石製の階段が3段ある。最上段の端には、拝殿へと登るための木製の階段を設置するための細い溝が彫り込んである。

【第3トレンチ】

第3トレンチは、基礎強化のための根巻を実施するため、事前に地下の様相を明らかとすることを目的として、拝殿の北東隅に設定した。発掘調査によって、礎石の直下で根石を検出した。また、根石の据え付けに当たっては、根石が大きすぎたためか整地面を一部掘り込んで設置していることが確認された。

【第4トレンチ】

第4トレンチは、拝殿の北西隅の礎石が8cm程度低くなっている原因を明らかとする目的で設定したトレンチである。調査により、本トレンチの下層埋土 (Fig.30-12') が、他のトレンチに比べて水分を多く含んでおり、軟質であることが確認された。また、造成面についても他のトレンチと比較して10cm程度低くなっていることが判明した。造成土が軟質で、かつ造成面も脆弱なことが地盤沈下の直接的な原因と考えられるが、造成当初から軟弱であったのか、後世に変質したのかは明確にできなかった。要因としては、拝殿背後の大溝SD01の影響で湿気がたまりやすい環境下にあったことや、もしくは昭和18年の水害によって地下水の流れに変化があったことなどが想定されるが、いずれも推測の域を出ない。

第4トレンチで検出された礎石の直下でも根石が確認できたが、礎石・根石の周辺には据え付け痕がなく、造成と同時に置かれたことが判明した。また、第4トレンチで検出された礎石と根石はいずれも上面

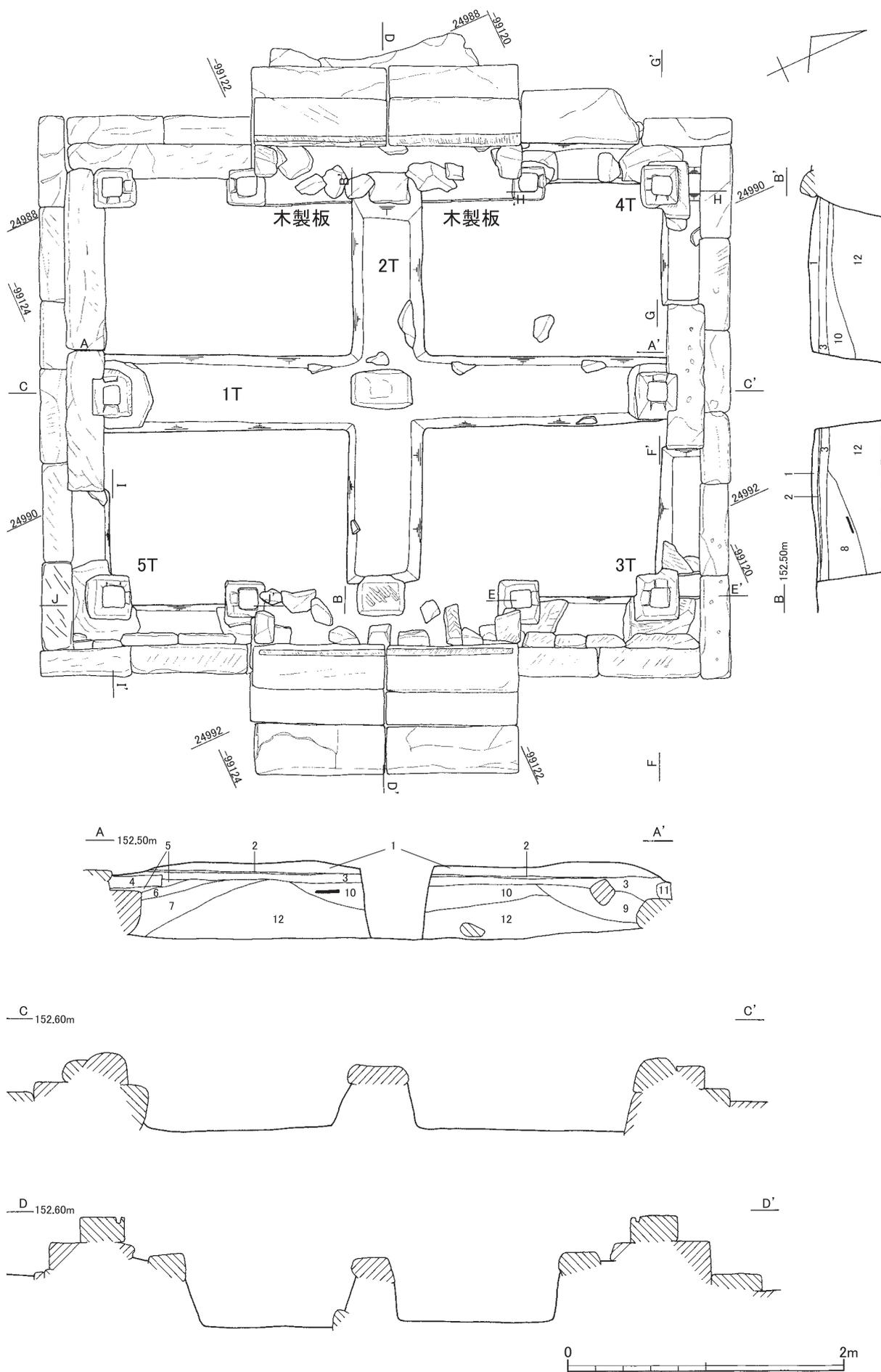


Fig.29 豊栄神社地点トレンチ平面図・土層断面図 I (S=1/40)

が平らではなく、やや北方向に傾いており、地盤沈下の影響を受けているものと見られる。

【第5トレンチ】

第5トレンチは、第3トレンチと同じく修理整備に関わる基礎資料を得るために、拝殿の南東隅に設定したトレンチである。第4トレンチと同じく、本トレンチの礎石・根石の周辺には据付け痕がなかった。

第3項 出土遺物 (Fig.31、Tab. 7)

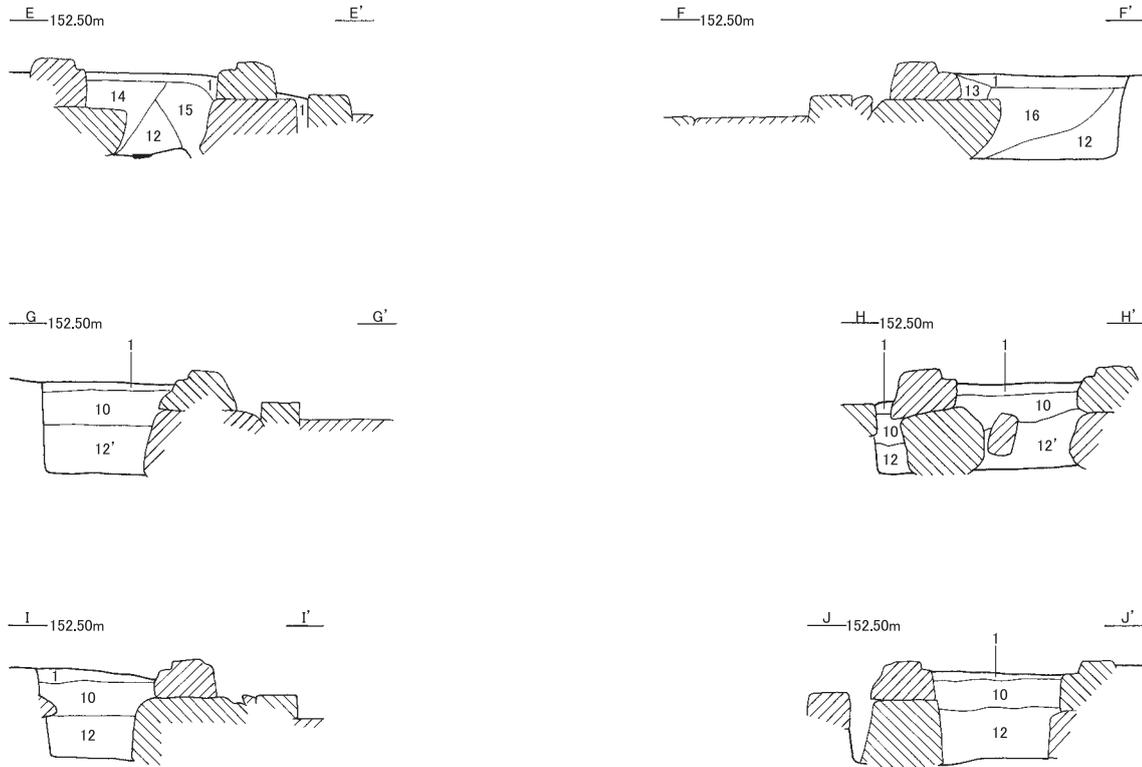
101は漳州窯系の青花の碗である。

102～105は肥前磁器である。102は碗で、二次被熱によって釉薬が変色しているが、内面に辛うじて四方禪が確認できる。103は丸碗で、外面に植物のような文様がある。104は筒形碗で、体部に段がある。外

面の口縁部に染付による2本の圈線がある。105は大皿で、体部が口縁の手前で屈曲して外側に開いている。外反した部分の内面は文様帯になっており、植物の文様がある。

106は底面に砂目のある肥前陶器の大皿で、胴部の上部が外側に屈曲した器形である。内面には3段に区画された文様帯があり、それぞれの文様帯には印花文が施されている。いわゆる三島手の皿である。107は石見焼の瓶である。

108は銅製品で、釘状の長部に径約1cmの輪が付けられている。扉を蝶番のように開閉させるため、柱に取り付ける肘壺とみられる。



- | | |
|--------------------------------------|---|
| 1 2.5 Y 7/4 浅黄色土(緻密な砂質土、昭和18年の洪水層か?) | 10 2.5 Y 6/4 にぶい黄色土(やや粘質、束石の埋土) |
| 2 2.5 Y 6/3 にぶい黄色土(やや砂質) | 11 7.5 YR 6/8 橙色土(固くしまった粘質土、礎石設置時の埋土か?) |
| 3 2.5 Y 3/2 黒褐色土(小礫含む、拝殿築造時の整地層か?) | 12 10 YR 5/3 にぶい黄褐色土(拝殿建築時の造成土) |
| 4 2.5 Y 6/1 黄灰色土(よくしまった粘質土、礎石の埋土か?) | 12' 10 YR 5/3 にぶい黄褐色土(しまりない。水分多く含む) |
| 5 2.5 Y 7/3 浅黄色土(礎石設置時の埋土か?) | 13 2.5 Y 7/4 浅黄色土(固くしまった粘質土、礎石の埋土) |
| 6 10 YR 3/2 黒褐色土(礎石設置時の埋土か?) | 14 2.5 Y 6/3 にぶい黄色土(根石の埋土) |
| 7 10 YR 6/8 明黄褐色土(よくしまった粘質土、礎石の埋土か?) | 15 2.5 Y 6/6 明黄褐色土(やや砂質、根石の埋土) |
| 8 10 YR 7/8 黄褐色土(粘質土、礎石根石設置時の埋土) | 16 2.5 Y 4/2 暗灰黄色土(小礫を含む、根石の埋土) |
| 9 10 YR 4/2 灰黄褐色土(やや砂質、大礫含む、根石の埋土) | |



Fig.30 豊栄神社地点トレンチ平面図・土層断面図II (S = 1 / 40)

第3節 小結

本年度は、拝殿床下の発掘調査を実施した。発掘調査では、拝殿構築に際しての、造成・盛土の方法や礎

石・根石の据え方など、地業の様相が明らかとなった。また、拝殿北西部で発生していた地盤沈下の要因確認など、整備に当たっての情報収集も随時実施した。

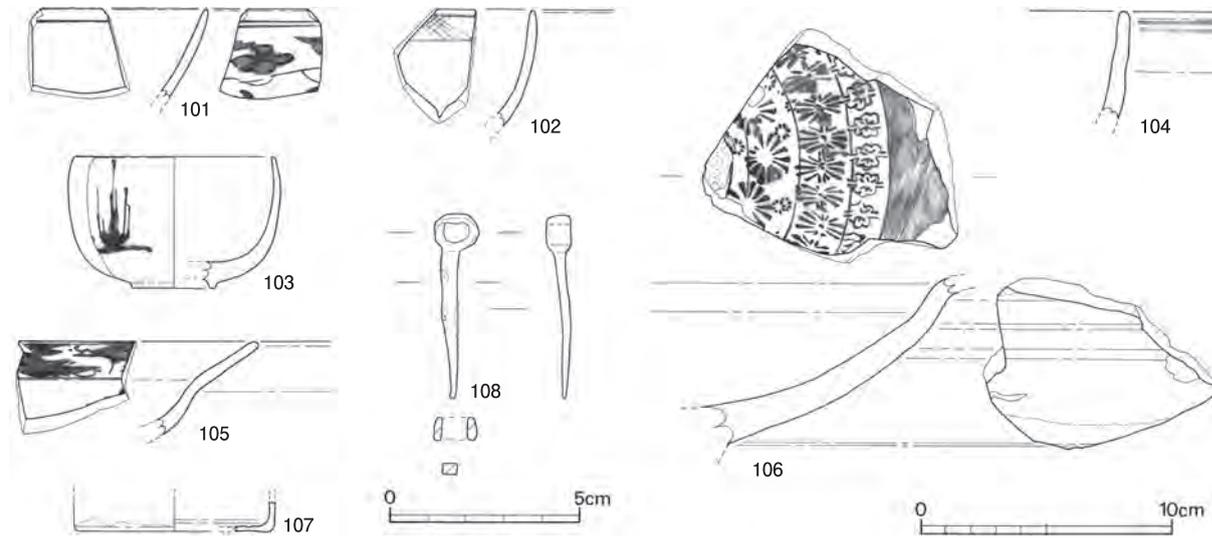


Fig.31 豊栄神社地点出土遺物実測図 (S = 1 / 2、1 / 3)

Tab. 7 豊栄神社地点出土遺物一覧表

| 挿図番号 | 出土地点 | 種別 | 器種 | 大きさ (cm) | | | 色調 | 成形・調整・文様 | 備考 |
|------|------|------|----|----------|-------|-------|-------------------------|----------|-----|
| | | | | 口径 | 器高 | 底径 | | | |
| 101 | 上層 | 青花 | 碗 | | (3.6) | | 透明釉 | | |
| 102 | 下層 | 肥前磁器 | 碗 | | (4.7) | | 透明釉 | 四方襷文 | |
| 103 | 下層 | 肥前磁器 | 碗 | (7.7) | 5.3 | (3.2) | 透明釉 | | |
| 104 | 下層 | 肥前磁器 | 碗 | | (4.3) | | 透明釉 | | |
| 105 | 下層 | 肥前磁器 | 大皿 | | (3.7) | | 透明釉 | | |
| 106 | 下層 | 肥前陶器 | 大皿 | | (6.8) | | (内)長石釉 白濁釉 (外)長石釉 | 砂目 | 三島手 |
| 107 | 下層 | 石見 | 瓶 | | (1.2) | (7.6) | 長石釉 | | |
| | 出土地点 | 種別 | 器種 | 大きさ (cm) | | | 重量 (g) | 色調 | 備考 |
| | | | | 現存長 | 現存幅 | 現存厚 | | | |
| 108 | 下層 | 銅製品 | 肘壺 | 4.9 | 1.2 | 0.7 | 4.2 | | |

第5章 本年度の試掘・立会調査

第1節 平成29年度の調査地点

史跡地内及び伝建地区において、地表面の掘り下げを伴う現状変更行為が発生した際には随時、立会・試掘調査を実施している。本年度は立会調査をひまわり館地点と旧梅加工場地点の2箇所で、試掘調査を福石家地点、林家地点の2カ所で実施した。調査地点はFig.19のとおりである。

第2節 福石家地点の調査

第1項 調査の概要 (Fig.32)

福石家地点は史跡地内の魚店地区で、山吹城の登り口付近に所在する。大正から昭和初期頃に増築が行われたとされるが、建物の来歴については明らかとなっていない点が多い。

今回の調査は、建物の修理修景事業に先立ち、地下遺構の有無や土地履歴の確認を目的として、敷地の北西部で裏庭に当たる約75㎡を対象として実施した。試掘調査範囲内には戦後に造られたとみられる池の跡があり、その池跡を中心にトレンチを配置した。また、主屋の東側が、河川改修に伴う工事によって壊されることが懸念されたため、事前に調査を行った。さらに、修理修景事業の進捗に伴って、敷地内の北東部に所在していた倉庫とみられる付属屋の基礎を確認し、記録を行った。

【第1・2トレンチ】

第1・2トレンチは敷地北半部の裏庭に設定したトレンチで、池跡に伴う硬化面まで掘り下げた。堆積層は主に腐葉土で、新しい時期に堆積したとみられる。トレンチ内からは遺物がほとんど出土しなかったが、第1トレンチでレンガが1点出土した。池跡の規模は南北1.75～2.4m、東西3.65m、深さ約50cmで、四方には2段もしくは3段に石が積まれていたほか、一部に杭が打たれ、板によって固定された箇所もあった。池底には、中央からやや東寄りのところに一辺が50cmの木製の柵が埋められていた。

【S B 01】

S B 01は主屋の基礎に当たり、今回の調査対象と

なったのは東側の一部である。幅30～50cm程度の割石を並べた基礎と、3基の炉跡(S X 01～03)、水場に関連するとみられる石敷遺構・石樋が検出された。調査範囲は東西2.9m(約1間半)、南北7.2m(約4間)である。検出面は硬く叩き締められており、土間として利用されていたとみられる。本遺構の東側は切石を2段積上げて高さ約40cmの石垣状になっていた。また、積石には要石を転用したものもみられた。南側には、石列で区画された2段の段差があり、それぞれ幅60～70cm程度であった。最も南側の石列は敷地境とみられ、そこから北側の建物内部に向かって階段状になっていた。

【S X 01～03】

S B 01の東側で検出された、3基のカマドが重複した遺構である。S X 01は3基の中で最も北側に位置しており、規模は、東西1m、南北80cm、深さ25cmである。東側には二つの石が平行に立てた状態で設置しており、地下構造の一部と考えられる。S X 02は南側に位置しており、S X 03の南側を一部掘り込んで構築されている。規模は、東西65cm、南北40cm、深さ20cmである。S X 03は中央に位置している。S X 01の南側を一部掘り込んで構築されており、南側はS X 02によって掘り込まれているため、南北の規模・深さは判断できない。東西は60cm程度とみられる。

S X 01では地下構造とみられる石が出土していることから、土間に造りつけたカマドの痕跡とみられ、S X 01からS X 03、S X 02へと南側にやや位置を変えながら使用していたようである。

【石敷遺構・石樋】

調査範囲内の北端部で検出された。南北1.9m、東西1.7mの範囲に、長さ65～110cm、幅43～53cmの平らな切石を敷いた石敷である。南端部と西端部の一部は幅約5cm、長さ10～65cmの細長い石を並べて区画としている。石の隙間には漆喰とみられる白色土が充填されており、水漏れ防止と考えられる。石敷遺構の北端部には石をくりぬいて作った幅20cmの石樋がある。

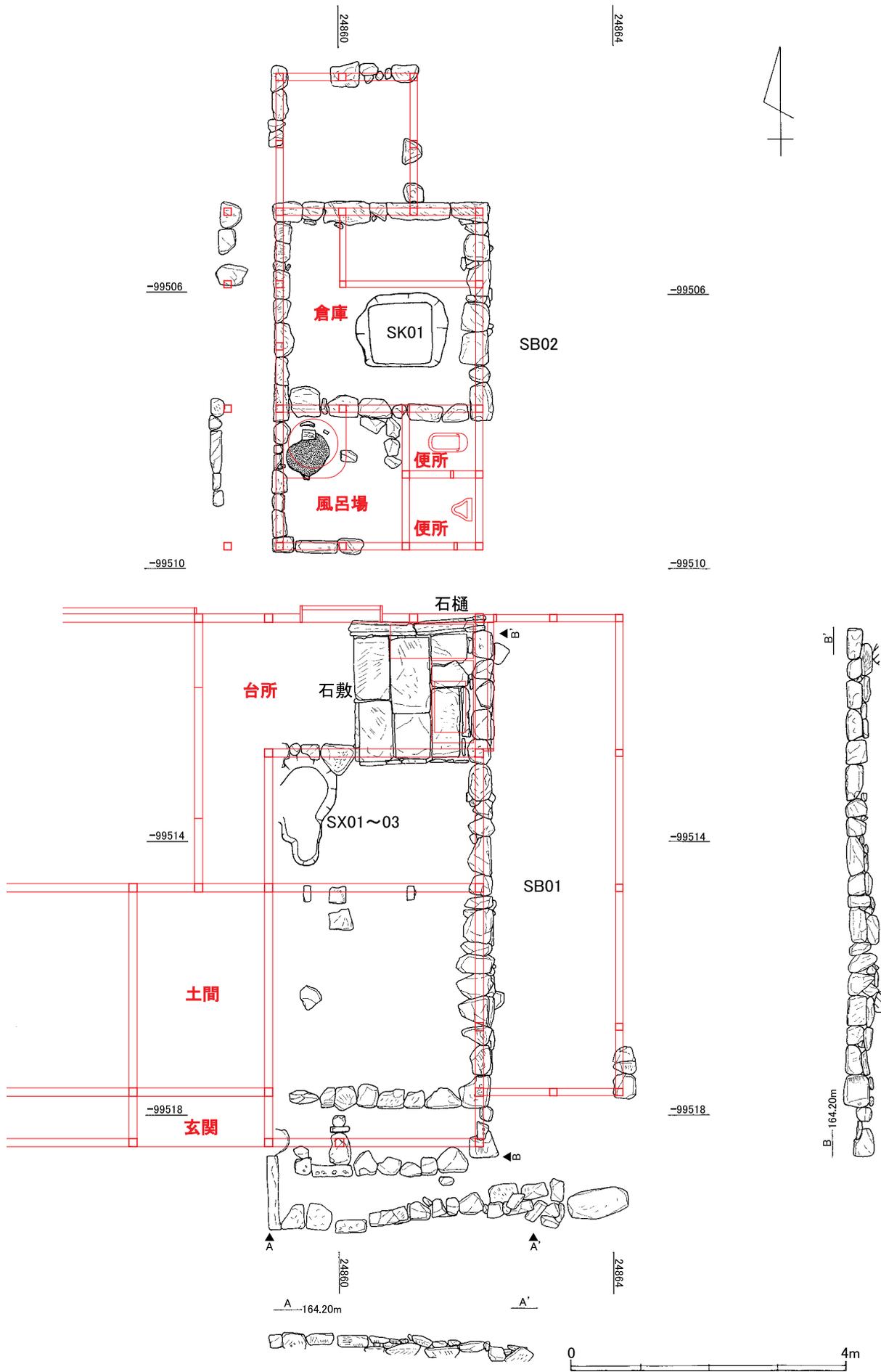
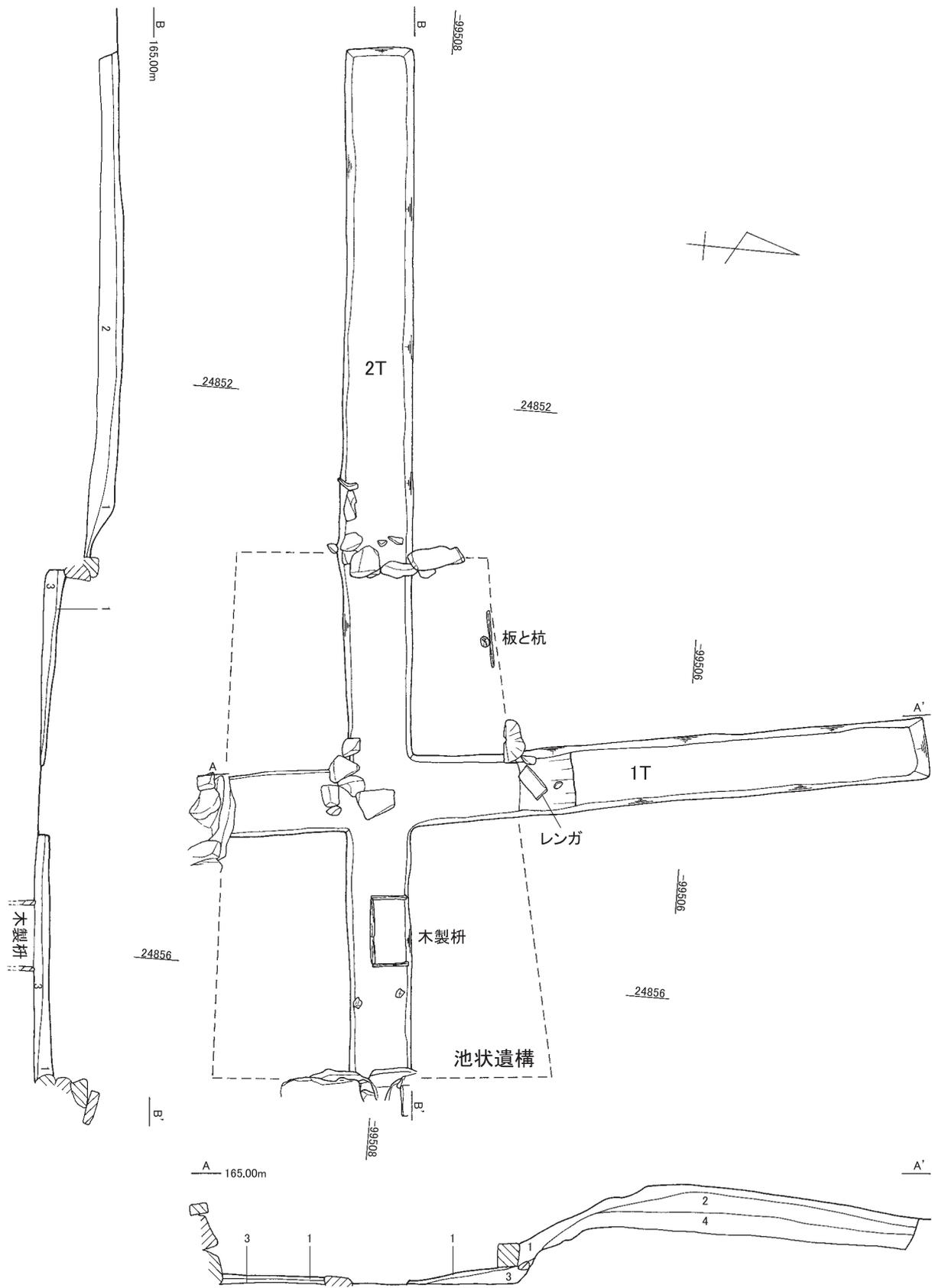


Fig.32 福石家地点検出遺構配置図 (S = 1 / 80)



- | | | |
|---|-----------|-------------------------------------|
| 1 | 表土 | (腐葉土) |
| 2 | 10 YR 3/3 | 暗褐色土 (粘性なく、しまりやや強い、1ミリ以下の砂粒の層) |
| 3 | 10 YR 3/3 | 暗褐色土 (粘性やや弱く、しまりやや強い。シルト質～砂質) |
| 4 | 10 YR 3/2 | 黒褐色土 (粘性やや強く、しまりやや弱い。1ミリ以下の礫を僅かに含む) |



Fig.33 福石家地点トレンチ平面図・土層断面図 (S = 1 / 40)

長さ1m程度のものが2つ組み合わせてあり、隙間には石敷遺構と同様漆喰と思われる白色土が充填されていた。この石樋によって、水が建物外に排出される構造になっている。近年の工事によって、石敷きの上面は全面がモルタル貼りとなり、石樋の東端部にはコンクリート製の枿が造られていた。

【SB 02】

SB 02は、敷地の北東部に建っていた小規模な付属屋の基礎である。建てられた年代は明らかとなっていないが、一部にコンクリートの枿が埋め込まれるなど、大きく改変を受けていた。規模は南北3.65m、東西3.1mである。基礎は長さ40cm～90cm、幅20～40cmの切石を並べて構築している。SB 01と同様に、礎石の一部には要石が転用されている箇所も

あった。建物内の中央付近に、平面形が隅丸方形で、規模が南北1.1m、東西1.35m、深さ約72cmの素掘りの土坑(SK 01)が確認された。内部には粃殻が残っていたことから、芋釜として利用されていた可能性がある。SB 02の南側には南北2.0m、東西1.8mの範囲が区画されており、見取り図では風呂場・便所となっていた。現況では風呂釜などは撤去されていたが、北東隅で焼土面と炭、その西側には焚口と考えられるレンガ遺構などが検出されたことで、見取り図の記載内容が裏付けられた。また、後世の造作ではあるが、建物東側には便槽とみられるコンクリートの枿が設置されていた。

修理修景事業の進捗の過程で、SB 02の西側に浄化槽を埋設する工事が行われ、それに伴って立会調査

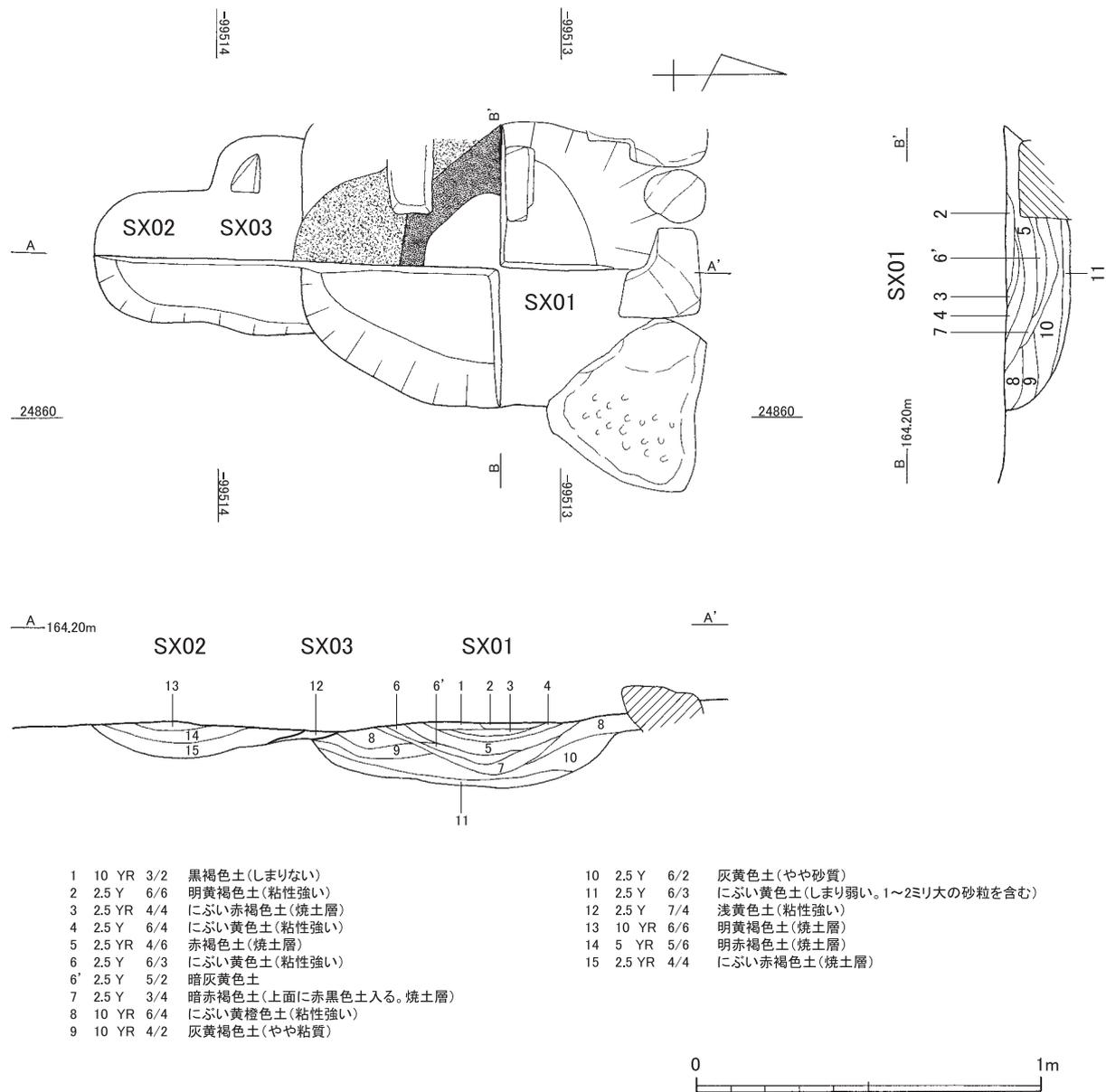


Fig.34 福石家地点SX01～SX03平面図・土層断面図 (S=1/20)

を実施した。掘削範囲は南北約3m、東西約2mで、深さは約2mである。立会では遺構・遺物などは出土しなかった。

第3節 林家地点の調査

林家地点は、史跡地内の下河原地区で、現大森小学校の北側に所在している。現在の建物は昭和後期に建てられた住宅である。本敷地における前身建物は、現在の建物の東側で、今では庭となっている場所にあったことが聞き取り調査により判明している。

この敷地内において、建物の新築が計画され、基礎構築のために土地の一部を掘り下げる必要が発生した。そのため、新築予定範囲において地下遺構の有無を確認することを目的として、試掘調査を実施した。また、試掘調査終了後、浄化槽埋設のための掘削に対応して立会調査を実施した。掘削箇所は林家の敷地内でも南端部で、試掘調査で設定した3トレンチの南東付近である。掘削範囲は南東-北西が約3m、南西-北東が約2m、深さは約2.3mである。遺構などは確認されなかったが、地表下約1m以下は青灰色粘質土となっており、その堆積層内からは絵唐津や青花など(129～131)、17世紀初頭頃の遺物が出土した。

第1項 調査の概要

新築が計画された庭に幅約50cmの十字のトレンチを設定して調査を実施した。

【第1トレンチ】

第1トレンチは南東-北西方向に設定し、長さは約8mである。堆積層内に前身建物の土間面とみられる硬化面(Fig.35-35・36他)が確認でき、第3層が前身建物廃絶後の整地層と考えられる。以下の層が前身建物の造成土とみられるが遺構は検出されなかった。埋土からは江戸時代～近代の遺物が混在して出土するなど、かく乱された様相が認められた。

遺構としては、トレンチの南東部から、上面が平らな石が3点検出された。前身建物よりもさらに古い建物の礎石とみられるが、対応する礎石は確認できなかったため、前身建物の造成に際して破壊された可能性がある。また、北東端部付近では10～15cm程度の川原石を3点並べた石列が検出された。いずれの遺構も地表下約50cmの深さで検出された。

【第2トレンチ】

第2トレンチは南西-北東方向に設定し、長さは約11.2mである。南西の一部に、大きな庭石があったため、調査できなかった箇所があった。堆積状況は1トレンチと同様で、上部に整地層が確認されたほかは造成土であった。

遺構としては、地表下約50cmで、モルタルを敷いた遺構が検出された。遺構の多くはトレンチ外に延びていたため、全体の検出はしていない。また、遺構の南部は破壊されていた。壁面での土層観察では、前身建物の整地層から掘り込まれており、芋釜などの床下倉庫構造物の可能性がある。

【第3トレンチ】

第3トレンチは第1トレンチから約2.6m南西に、南東-北西方向に設定した。本トレンチからは、遺構は検出されなかった。堆積状況は1・2トレンチと同様で、多くが造成土であった。

第2項 出土遺物 (Fig.36、Tab.8)

出土遺物としては陶磁器類や銭貨などがあるが、新旧の資料が混在していることから、敷地を造成した際に混入した可能性がある。

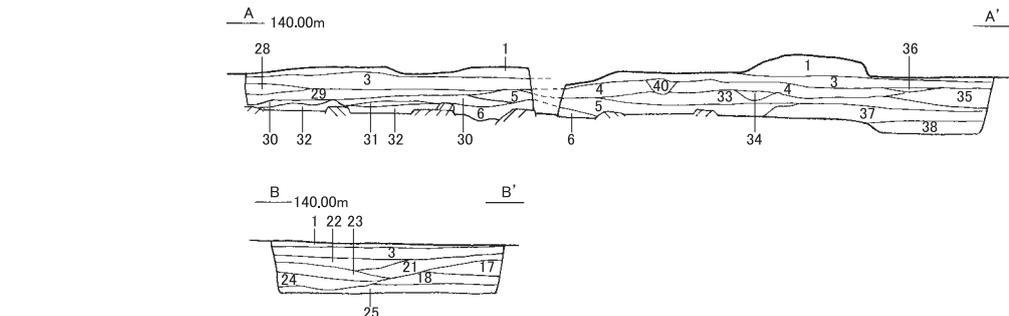
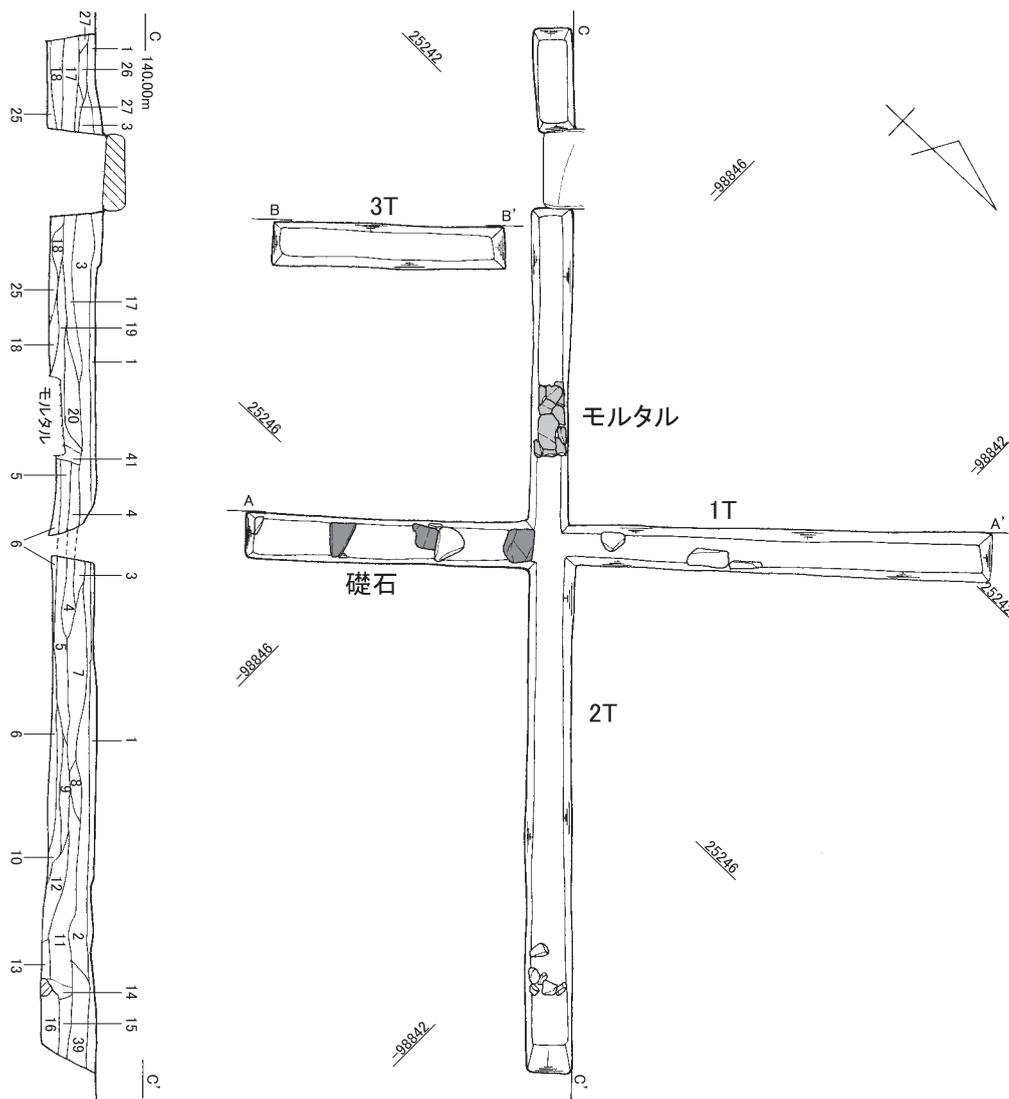
【陶磁器類】

109～118は1トレンチから出土した。109は土師質土器の皿で、底部には糸切の痕跡が見られる。

110～112は肥前磁器である。110は筒型の碗で、外面に花形の文様、内面見込みには手描きの五弁花文がある。111は蕎麦猪口で、外面に花とみられる文様がある。112は皿で、内面に花の文様がある。

113～115・117・118は肥前陶器で、113は呉器手碗である。114は皿で、蛇の目釉剥ぎがある。釉剥ぎした部分には砂などは塗られておらず、釉剥ぎしてあるのみである。115は皿で、内面に胎土目と鉄絵がある古い資料である。117はすり鉢で、口縁部が肥厚し、外反している。118は玉縁の壺である。116は土製品で、器種は不明だがミニチュアの釜とみられる。

119～122は2トレンチから出土した。119は肥前磁器の端反碗で、口縁部の外面に2本、内面に1本の圏線がある。120・121は肥前陶器である。120は皿で、胴部上端が外側に屈曲している。内面には白化粧土を刷毛塗して施文している。121は小壺で、底面に砂が



- | | | | | | | | | | |
|----|-----|----|-----|-----------------------------------|----|-----|----|-----|-----------------------------------|
| 1 | 10 | YR | 5/3 | にぶい黄褐色土(しまり強く、粘性なし。シルト質、粒子均一) | 24 | 10 | YR | 4/3 | にぶい黄褐色土(しまり非常に弱く、粘性なし) |
| 2 | 10 | YR | 5/3 | にぶい黄褐色土(しまり強く、粘性なし。シルト質、粒子均一) | 25 | 10 | YR | 2/3 | 黒褐色土(しまり強く、粘性なし。5センチ以下の礫含む) |
| 3 | 10 | YR | 4/3 | にぶい黄褐色土(しまり強く、粘性なし。シルト質) | 26 | 10 | YR | 2/1 | 黒色土(しまり強く、粘性なし。炭化物層) |
| 4 | 10 | YR | 4/4 | 褐色土(しまり強く、粘性なし。シルト質) | 27 | 10 | YR | 3/4 | 暗褐色土(しまり強く、粘性なし。シルト質) |
| 5 | 10 | YR | 3/4 | 暗褐色土(しまり強く、粘性なし。シルト質) | 28 | 10 | YR | 4/3 | にぶい黄褐色土(しまり強く、粘性なし) |
| 6 | 7.5 | YR | 2/3 | 極暗褐色土(しまり強く、粘性なし。シルト質) | 29 | 10 | YR | 2/2 | 黒褐色土(しまり弱く、粘性なし) |
| 7 | 10 | YR | 3/4 | 暗褐色土(しまり強く、粘性なし。シルト質で荒い粒子が僅かに見える) | 30 | 10 | YR | 4/4 | 褐色土(しまり弱く、粘性ややある。非常に均一なシルト質) |
| 8 | 10 | YR | 3/3 | 暗褐色土(しまり強く、粘性なし。シルト質) | 31 | 2.5 | YR | 4/3 | オリーブ褐色土(しまり弱く、粘性強。粘質土) |
| 9 | 10 | YR | 3/4 | 暗褐色土(しまりやや強く、粘性なし。シルト～砂質) | 32 | 7.5 | YR | 5/6 | 明褐色土(しまりやや強く、粘性強。シルト～粘質) |
| 10 | 10 | YR | 3/3 | 暗褐色土(しまりやや弱く、粘性なし。シルト～砂質) | 33 | 10 | YR | 3/4 | 暗褐色土(しまりやや強く、粘性弱い。) |
| 11 | 10 | YR | 4/6 | 褐色土(しまりややあり、粘性なし。砂質にシルト混ざる) | 34 | 10 | YR | 4/2 | 灰黄褐色土(しまりややあり、粘性あり。シルト質) |
| 12 | 7.5 | YR | 4/4 | 褐色土(しまりなく、粘性あり。砂質にシルト混ざる) | 35 | 2.5 | YR | 3/2 | 黒褐色土(しまり強く、粘性なし) |
| 13 | 10 | YR | 3/4 | 暗褐色土(しまり強く、粘性なし。シルト～砂質で荒い粒子あり) | 36 | 10 | YR | 4/3 | にぶい黄褐色土(しまり非常に強く、上面硬化) |
| 14 | 10 | YR | 4/4 | 褐色土(しまりやや強く、粘性なし。砂質～シルト質で木根あり) | 37 | 10 | YR | 3/3 | 暗褐色土(しまり強く、粘性なし。1～2センチの礫を多く含む) |
| 15 | 10 | YR | 3/3 | 暗褐色土(しまり強く、粘性なし。均一なシルト質) | 38 | 7.5 | YR | 2/2 | 黒褐色土(しまり非常に強く、粘性なし。1～3センチの礫を多く含む) |
| 16 | 10 | YR | 2/2 | 黒褐色土(しまり非常に強く、粘性なし。砂質で5センチ以下の礫入る) | 39 | 10 | YR | 4/4 | 褐色土(しまりややあり、粘性なし) |
| 17 | 10 | YR | 4/4 | 褐色土(しまり強く、粘性なし。シルト質) | 40 | 10 | YR | 4/3 | にぶい黄褐色土(しまり強く、粘性弱い) |
| 18 | 10 | YR | 5/4 | にぶい黄褐色土(しまり非常に強く、粘性なし。粘性～シルト質) | 41 | 10 | YR | 4/4 | 褐色土(しまり強く、粘性なし。シルト質) |
| 19 | 10 | YR | 2/2 | 黒褐色土(しまり非常に弱く、粘性なし。砂質) | | | | | |
| 20 | 10 | YR | 4/4 | 褐色土(しまり強く、粘性なし。シルト質) | | | | | |
| 21 | 10 | YR | 3/4 | 暗褐色土(しまりやや強く、粘性非常に弱い) | | | | | |
| 22 | 10 | YR | 5/3 | にぶい黄褐色土(しまり強く、粘性なし。シルト質) | | | | | |
| 23 | 10 | YR | 3/4 | 暗褐色土(しまり強く、粘性なし。シルト～砂質) | | | | | |



Fig.35 林家地点トレンチ配置図・土層断面図 (S = 1 / 80)

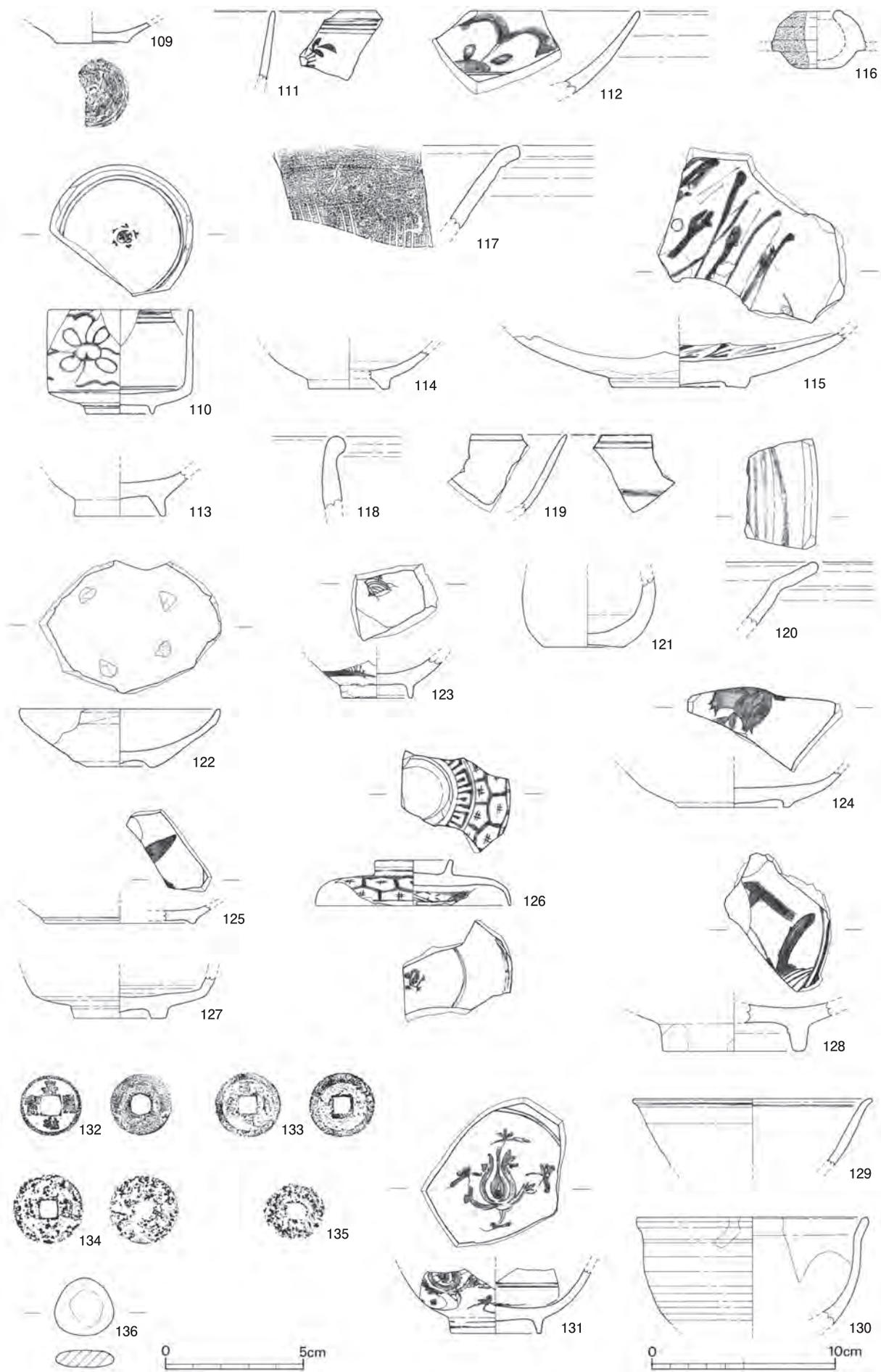


Fig.36 林家地点出土遺物実測図 (S = 1 / 2、1 / 3)

Tab. 8 林家地点出土遺物一覧表

| 挿図 番号 | 出土地点 | 種 別 | 器 種 | 大きさ (cm) | | | 色 調 | 成形・調 整・文様 | 備 考 |
|----------|-------------|-------------|-------|----------|-------|---------------|-------------------|--------------|-----|
| | | | | 口径 | 器高 | 底径 | | | |
| 109 | 1 T | 土師質土器 | 皿 | | (1.1) | (4.0) | 暗灰色 | | |
| 110 | 1 T 中層 | 肥前磁器 | 碗 | (7.7) | 5.7 | 3.6 | 透明釉 | | |
| 111 | 1 T 上層 | 肥前磁器 | 猪口 | | (3.8) | | 透明釉 | | |
| 112 | 1 T | 肥前磁器 | 皿 | | (4.6) | | 透明釉 | | |
| 113 | 1 T | 肥前陶器 | 碗 | | (2.5) | (5.0) | 長石釉 | | |
| 114 | 1 T 上層 | 肥前陶器 | 皿 | | (2.1) | (4.4) | 透明釉 | 蛇ノ目釉剥ぎ | |
| 115 | 1 T 中層 | 肥前陶器 | 皿 | | (3.1) | (7.3) | 灰釉 | 鉄絵 胎土目 | |
| 116 | 1 T | ミニチュア 土器 | 釜? | 2.0 | 3.2 | 2.0 | 浅黄橙色 | | |
| 117 | 1 T | 肥前陶器 | すり鉢 | | (4.6) | | 褐釉 | | |
| 118 | 1 T | 肥前陶器 | 壺 | | (4.0) | | 褐釉 | | |
| 119 | 2 T | 肥前磁器 | 碗 | | (4.3) | | 透明釉 | | |
| 120 | 2 T 上層 | 肥前陶器 | 皿 | | (3.5) | | 灰釉 白濁釉 透明釉 | 刷毛目 | |
| 121 | 2 T | 肥前陶器 | 小壺 | | (3.9) | 4.5 | 藁灰釉 | | |
| 122 | 2 T 最下部黒褐色土 | 肥前陶器 | 皿 | (11.0) | 3.2 | 3.7 | 灰釉 | | |
| 123 | 耕作土 | 肥前磁器 | 碗 | | (2.2) | (3.6) | 透明釉 | | |
| 124 | 耕作土 | 青花 | 皿 | | (2.0) | (6.0) | 透明釉 | | |
| 125 | 耕作土 | 青花 | 皿 | | (1.0) | (8.1) | 透明釉 | | |
| 126 | 耕作土 | 肥前磁器 | 蓋 | (10.6) | 2.5 | つまみ径 (4.0) | 透明釉 | 四方禪文 | |
| 127 | 耕作土 | 肥前陶器 | 皿 | | (2.3) | 5.0 | 灰釉 | | |
| 128 | 造成土 | 青花 | 皿 | | (2.7) | (7.6) | 透明釉 | | |
| 129 | 浄化槽立会 上層 | 青花 | 碗 | (12.9) | (3.7) | | 透明釉 | | |
| 130 | 浄化槽立会 上層 | 肥前陶器 | 碗 | (12.6) | (5.9) | | (内) 灰釉 (外) 長石釉 | | |
| 131 | 浄化槽立会 下層 | 青花 | 碗 | | (3.6) | 4.8 | 透明釉 | | |
| | 出土地点 | 種 別 | 器 種 | 大きさ (cm) | | | 重量 (g) | 色 調 | 備 考 |
| | | | | 現存長 | 現存幅 | 現存厚 | | | |
| 132 | 1 T | 錢貨 | 嘉祐通寶? | 2.2 | 2.2 | | 3.0 | | |
| 133 | 3 T 上層 | 錢貨 | 寛永通寶 | 2.3 | 2.3 | | 2.2 | | |
| 134 | 1 T 中層 | 錢貨 | 寛永通寶 | 2.5 | 2.5 | | 3.6 | | |
| 135 | 1 T 中層 | 錢貨 | 無文銭 | 2.0 | 2.1 | | 4.0 | | |
| 136 | 1 T | 石製品 | 碁石? | 2.1 | 2.1 | 0.6 | 4.3 | 黒色 | |

付着している。122 は肥前陶器で、内面に胎土目のある皿である。

123 ～ 128 は、庭の耕作土・造成土から採集した。123・126 は肥前磁器である。123 は碗で、見込みに手描きの文様がある。126 は碗の蓋で、外面には蓮弁と、中に「井」の文様がある亀甲文、内面には口縁部に四方禪と、見込みにコンニャク印判による五弁花文がある。127 は肥前陶器の皿で、器形は胴部で上方に屈曲している。また、畳付けを除いて全面に施釉されている。124・125・128 は青花である。125 は景德鎮の皿、124・128 は漳州窯系で、いずれも皿である。

129 ～ 131 は調査終了後、浄化槽の埋設に際しての立会調査で出土した資料である。130 は肥前陶器で、鉄釉が施された絵唐津である。129・131 は青花で、漳州窯系の碗である。

【金属製品・石製品】

132 ～ 135 は銭貨である。132 は表面がつぶれているため、文字の判読が難しいが、嘉祐通寶の可能性はある。133・134 は寛永通寶で、いずれも新寛永とみられる。135 は中央の径が小さいことから、無文銭の可能性はある。136 は碁石とみられる。黒色の川原石である。

第4節 ひまわり館地点の調査

第1項 調査の概要

ひまわり館地点は、伝建地区大森区域の中央部に当たる昭和区に所在する。現在の大森郵便局のほぼ向かいで、通りに西面する。

ひまわり館は、元々は倉庫として利用されていたが、平成 27(2015)年に修理修景が行われ、現在ではイベントや展示会などに利用されている。

ひまわり館の裏に、新たに浄化槽を埋設する工事申請が出され、その工事に伴って、立会調査を実施した。調査範囲は東西約 1.2 m、南北約 1 m、深さは約 1.7 m である。掘下げを実施すると、地表下 26cm の位置で、建物基礎とみられる成形された石列が検出された。全体を検出していないので全容は不明であるが、現状での規模は幅 26cm 以上、長さ 65cm 以上、厚さ 20cm を測り、比較的大きな建物が想定される。石列の 10cm 下に整地面があり、整地面と石列の間には粘土が詰められ固定されていた。整地面より下層では遺構は検出されなかったが、地表下 90cm で青灰色粘質土となり、層内から江戸時代初期頃の陶器が 1 点出土した。この青灰色粘質土は、これまでに伝建地区内で実施してきた調査によって、17 世紀初期段階の町並みの基盤層とされており、本地点においても、その状況が再確認された。

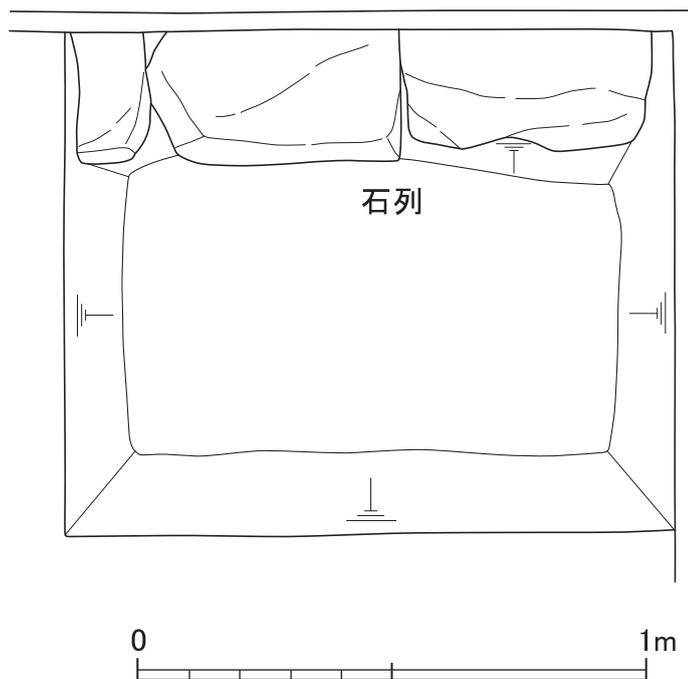


Fig.37 ひまわり館地点トレンチ平面図 (S = 1 / 15)

第2項 出土遺物 (Fig.38、Tab. 9)

137～139は肥前磁器で、地表下80cmまでの範囲で出土した。137は腰の張った丸碗で、外面に丸文がある。138は広東碗の蓋で、外面には花と蛸唐草、内面見込みに「壽」の文字がある。139は外青磁の蓋である。内面の口縁部に四方禪、見込みにコンニャク印判による五弁花文がある。いずれも18世紀後半以降

の資料である。

140は肥前陶器の鉢で、内面に胎土目の残る古い資料である。地表下90cm以下の堆積層から出土しており、先述のように町並みの造成・整備の時期を考える上で重要な資料である。

141は瓦質土器の火消し壺である。

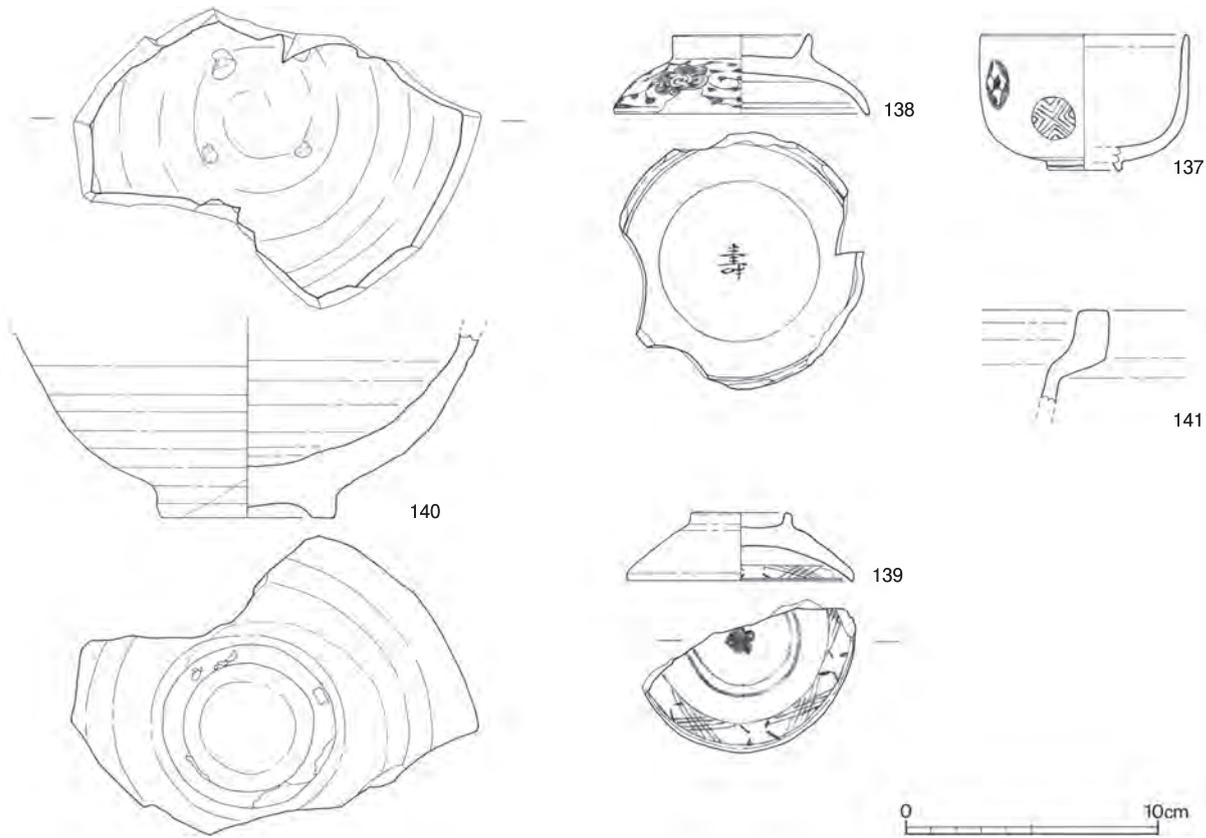


Fig.38 ひまわり館地点出土遺物実測図 (S = 1 / 3)

Tab. 9 ひまわり館地点出土遺物一覧表

| 挿図番号 | 出土地点 | 種別 | 器種 | 大きさ (cm) | | | 色調 | 成形・調整・文様 | 備考 |
|------|-------|------|-----|----------|-------|---------------|------------------|----------|-----|
| | | | | 口径 | 器高 | 底径 | | | |
| 137 | 暗褐色土 | 肥前磁器 | 碗 | (8.0) | 5.5 | (3.0) | 透明釉 | | |
| 138 | 暗褐色土 | 肥前磁器 | 蓋 | (10.0) | 3.2 | つまみ径 5.3 | 透明釉 | | |
| 139 | 暗褐色土 | 肥前磁器 | 蓋 | (8.8) | 2.7 | つまみ径 (4.0) | (内)透明釉 (外)青磁釉 | 四方禪文 | 外青磁 |
| 140 | 灰褐色粘土 | 肥前陶器 | 鉢 | | (7.4) | 6.8 | 灰釉 | 胎土目 | |
| 141 | 暗褐色土 | 瓦質土器 | 火消壺 | | (3.7) | | 黒色 | | |

第6章 総括

第1節 昆布山谷地区

昆布山谷地区の発掘調査は本年度で8年目となった。本年度は昆布山谷地区下層における遺構の広がり、最下部の岩盤面で活動痕跡を確認し、第5地点の利用の初期段階の様相を明らかとすることを目的として調査を実施した。

第1項 第5地点I区

第5地点の調査は本年度で4年目となった。本年度の調査では、江戸時代前半における土地利用の変遷を整理することができた。

第1段階(第5遺構面)は地表面に露出する岩盤を水平に削平して、溝などを直接加工していた段階である。溝の埋土や岩盤の直上からは江戸時代初期頃の磁器が出土している。直上の第3・4遺構面の広い範囲で遺構が検出されたことにより、遺構保護の観点から調査可能な範囲が限られてしまった。そのため、全体の様相を把握することは難しく、溝を加工した意図や用途については明確にできなかった。

第2段階(第4遺構面)は、岩盤の上が整地され、上面に炉跡(SX 17～19・30)や溝跡(SD 08)、石列(SX 29)などが構築された段階である。SX 17～19については、第1段階で加工された溝(SD 02)に石を並べて暗渠状とし、その上に構築している。これはSD 02による防湿効果を狙った可能性が想定でき、前段階の遺構との連続的な土地利用の状況を示唆している。

第3段階は水溜遺構SK 03・04、炉跡SX 28・SD 05などの生産活動に関連する遺構が造られる段階で、検出されたそれぞれの遺構からは17世紀後半の陶磁器が出土している。

水溜遺構SK 03・04は石積みや叩き締めなどによって構築された遺構で、選鉱作業に伴う水溜と想定される。SK 03の南東部にはSD 07があり、SK 03への導水溝とみられることから、調査範囲外にも水溜や導排水設備が存在したことが考えられ、広い範囲が選鉱の場となっていた可能性があり、選鉱作業に特化した大規模な施設の存在が想定される。

SX 28は製錬に関わる炉跡で、地面を掘り窪めた炉内には炉壁に付着した煤や、底面の炭化物が残っているなど、良好な遺存状態であった。炉跡周辺には被熱痕が広がっていた。SX 28の北部ではSD 05が検出されている。SD 05は底面に被熱痕があることや埋土にカラミを多く含んでいることから、SX 28から排出された製錬滓を流すための排滓溝とみられる。排滓溝を伴う炉跡の検出は石見銀山遺跡全体においても初例であり、製錬炉の構造や機能、製錬の工程などを明らかとする上で重要な発見といえる。埋土や周辺の土などは可能な限りサンプリングしており、これらの科学的な分析調査によって、目的金属の同定や、炉の種類の説明などの成果が期待される。

なお、第2段階と第3段階の間の堆積層には複数の硬化面が認められ、短期間のうちに床の張替や整地などの造作が繰り返し行われていたようである。今後、詳細な検討により更に細分できる可能性もある。

第2項 第1トレンチ

昨年度の調査では、第8地点に設定したトレンチから、谷の中央を通る道路と平坦面を区画する石垣(SW 06)が検出され、昆布山谷における町屋の様相を説明する上で重要な資料が得られていた。本年度の調査では、検出された道路や石垣の広がりを確認するために、第5地点の東端部に第1トレンチを設定し調査を行った。

第1トレンチでは、第8地点と同様に石垣(SW 07)と道路が検出され、昆布山谷の広い範囲に道路と石垣で区画された平坦面が連続していることが確認できた。堆積層からは近代以降の遺物が出土しており、近代以降に水害等によって埋没したことなど、第8地点で検出された状況と共通しており、昨年度の調査成果が追認された。第8地点においては道路面から江戸時代後半の遺物が出土しており、石垣の構築・利用時期を示していると判断していた。SW 07の埋土からは、構築時期や利用時期を示すような遺物は出土していないが、SW 07の積方や使用されている石はSW 06-①と共通していることから、SW 06とSW 07

はほとんど同時期に構築されたと考えられる。

SW 07は検出高が約90cmと、SW 06に比べてかなり低かったため、さらに下層の様相まで追求することができた。下層調査により、SW 07の下位からはSW 08が検出された。SW 08は道路面までの残存高が50cm程度の石垣で、SW 06に比べるとかなり低い。石の積み方も横積みと古い様相を示す積み方である。横積みの石垣としては、第5地点のSK 03・04があり、近い時期に構築された可能性もある。

SW 08の検出によって、昆布山谷地区においては少なくとも江戸時代の二時期に道路と石垣が整備されていたことが明らかとなった。

第3項 まとめ

本年度の調査をもって昆布山谷地区の発掘調査はいったん完了し、来年度からは仙ノ山地区に着手することとなっている。昆布山谷地区は8年間にわたって調査を実施し、谷の広い範囲に遺構が広がっていることが確認できた。また、江戸時代の初期から近代までの遺構が連続的に検出された。検出された遺構には、金属生産に係る炉跡や水溜に加えて、住居の跡や岩盤加工遺構、平坦面と谷筋の道とを区画するための石垣など、生産活動や居住、谷の空間利用や景観の変遷に係るものなど多岐にわたっている。文献史料にみられるような、16世紀代まで遡るような遺構は検出されなかったが、石見銀山遺跡における金属生産技術の解明や、江戸時代から近代にかけての町屋の形成や変遷を明らかとする上で重要な資料が多く得られた。

第2節 金森家地点

昨年度に引き続き、金森家の修理整備事業に伴う発掘調査を実施した。本年度は、主屋床下部分の発掘調査を実施した。発掘調査により、床下の堆積層には2時期の整地面があり、それぞれの面で建物に関連する遺構が検出された。

第1面は、現在の建物の構築面で、遺構としては礎石の据え付け痕と、地鎮に関連する遺構(SK 01・02)が検出された。第1面に伴う礎石の据え付け痕には、前身建物を解体した際の廃材とみられる割った燻瓦が多量に充填されており、栗石の代わりとして使用していることが確認できた。

SK 01・02は主屋のほぼ中央部から検出された遺構で、2つの土坑から3点の甕(78、92、94)が出土した。これらの内で78は木製の蓋をかぶせてあり、木箱に入れられて甕と木箱との隙間には炭が充填されているなど、他の2点と比較してより複雑な工程を経て埋納されていた。内容物は一字一石経で、報告した中では「請」「受」「矩」などが書かれており、経典の一部とみられる。棟札によると現在の建物は嘉永3(1850)年に建てられており、当時は川北家の所有であった。川北家の菩提寺は温泉津に所在する日蓮宗の恵光寺であることから、法華経の可能性はあるが、内容物をすべて確認していないため断言はできない。

SK 02から出土した2点の甕の内、92には内容物が無かった。しかし、甕の内面に黒色の付着物が見られるほか、92に蓋として使われていた建瓦(91)には円形に変質した箇所があることから、本来は有機物や液体などが入っていたが、腐食や蒸発によって失われてしまった可能性もある。94にはかわらけのほか、黒色に変質した有機物が入っていた。また、靱殻も確認できていることから、五穀などが入っていた可能性もある。

第2面では礎石建物跡(SB 01)などが見つかり、前身建物に関連する情報が得られた。検出した遺構は、礎石の他に石積みや犬走りとみられる痕跡も検出されている。また、SB 01西側の礎石は現在の建物よりも50cm程度内側にあることから、第2面もしくは第1面の段階で敷地を西側に拡張したことが判明した。

これまでに石見銀山遺跡地内で検出された地鎮関連資料としては、渡辺家地点で墨書された木箱と、その中に納められたとみられる球状の鉄製品が出土している。木箱には、中央に「南」、両側に「令百由旬内無諸衰患」と、法華経の一節が墨書されており、日蓮宗に関連することが窺われていた。ただし、現在の日蓮宗の地鎮祭に当たっては、経石と五穀などの供物を埋める修法が伝わっており、渡辺家についてはそれとは一致していなかった。似たような修法が想定される事例としては、島根県松江市の松江城下町遺跡(殿町287番地・殿町279番地)で、19世紀中頃の土坑から祈祷具が良好な状態で出土している。その中でも、SK 06から出土した長方形祈祷具の内箱には「□金

祭鐵丸埴丸」と墨書され、中には鉄球と土球が納められており、類似した修法が行われていた可能性が想定されている。

先述のとおり、現在の金森家住宅を建てた川北家は恵瑠寺を菩提寺としており、日蓮宗とは関わりの深い家である。地鎮に関連する資料の内容は、渡辺家のそれとは大きく異なっているものの、金森家の例は、現在伝わっている日蓮宗の修法に近い様相を呈していると言える。祭祀に関連する修法には様々な行為が存在しているが、同じ地域内で近い時期に建てられ、かつ同一宗派である可能性が高いにも関わらず、全く違うものを埋めていることは、民俗行為の多様性を示す非常に興味深い事例といえる。

第1トレンチでは深い地割れが確認できており、浜田地震の際に生じた痕跡の可能性が高い。浜田地震では本地域でも建物が倒壊したり、多くの坑道が使用不能となるなど、大きな被害が出たことが記録されている。金森家住宅は、地震発生当時は建物の倒壊は免れているが、修理前時点では北に向かって大きく傾いており、地震の影響による可能性がある。

第3節 豊栄神社地点

豊栄神社地点では、修理整備事業のための基礎資料を得ることを目的として発掘調査を実施した。今年度は、拝殿の床下部分を対象とし、拝殿建設にあたっての地業の様相を明らかとすることを目的として調査を行った。調査によって、拝殿床下の堆積状態が判明し、建設時の地業や、礎石・根石の据え方などが明らかとなった。また、床下には昭和18年水害による土砂が流れ込んでおり、中央の束石を覆っていたことなど、水害による被害が確認できた。

修理整備に際して基礎の構築に関わる基礎資料を収集するため、拝殿床下の一部が地盤沈下を起こしていることの原因究明のための調査も併せて実施した。

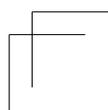
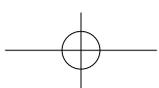
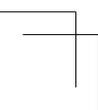
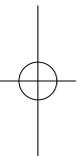
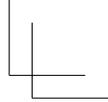
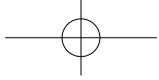
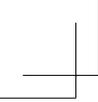
調査により、地盤沈下を引き起こしている箇所については、地盤・造成土ともに軟弱になっていることが直接的な原因であると判明したが、地盤・造成土が軟弱になった原因までは明確にできなかった。近くには境内地周辺の集水機能のあるSD01があるため、その影響を受けたことや、水害によってSD01が埋まってしまったために地下水の流れが変化したことなどが想定されているが、いずれも確定的ではない。

引用・参考文献

- 島根県教育委員会・大田市教育委員会・温泉津町教育委員会・仁摩町教育委員会 1999『石見銀山遺跡総合調査報告書』
第1冊【遺跡の概要】
- 島根県教育委員会・大田市教育委員会・温泉津町教育委員会・仁摩町教育委員会 1999『石見銀山遺跡総合調査報告書』
第2冊【発掘調査・科学調査編】
- 島根県大田市 2006『史跡石見銀山遺跡保存管理計画書』
- 島根県教育委員会・大田市教育委員会 1999『石見銀山遺跡発掘調査報告』Ⅰ
- 中田健一他 2005『石見銀山遺跡発掘調査報告書』Ⅱ 島根県教育委員会・大田市教育委員会
- 中田健一・新川 隆 2013『石見銀山遺跡発掘調査報告書』Ⅲ 島根県教育委員会・大田市教育委員会
- 島根県教育委員会・大田市教育委員会 2000～2004『石見銀山遺跡発掘調査概要』10～14
- 大田市教育委員会 2006～2017『石見銀山遺跡発掘調査概要』15～25
- 島根県大田市教育委員会 1975『石見銀山御料 大森の町並調査報告書』
- 新川 隆 2013『史跡石見銀山遺跡総合整備事業に伴う発掘調査報告書』大田市教育委員会
- 江戸遺跡研究会 2001『図説江戸考古学研究事典』
- 九州近世陶磁学会 2000『九州陶磁の編年』
- 大橋康二 1984「肥前陶磁の変遷と出土分布」『国内出土の肥前陶磁』佐賀県立九州陶磁文化館
- 大橋康二 1994『古伊万里の文様 初期肥前磁器を中心に』理工学社
- 小野正敏「15～16世紀の染付碗・皿の分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2 1982

- 尾村 勝 2014 「石見銀山遺跡昆布山谷地区の土地利用の変遷—文献史料と分布調査成果からみる—」『世界遺産石見銀山遺跡の調査研究』4 島根県教育委員会・大田市教育委員会
- 関西近世考古学研究会 2013 『関西近世考古学研究 21 中世末から近世の地鎮め遺構の諸様相』
- 熊野栄助 1973 「石見銀山御料 大森 —大田市大森町並調査速報—」『季刊文化財』第 22 号 島根県文化財愛護協会
- 西尾克己 2013 「石見銀山遺跡出土の在り系陶器・石見焼について(1)」『世界遺産石見銀山遺跡の調査研究』3 島根県教育委員会・大田市教育委員会
- 西尾克己 2014 「石見銀山遺跡出土の在り系陶器・石見焼について(2)」『世界遺産石見銀山遺跡の調査研究』4 島根県教育委員会・大田市教育委員会
- 西田宏子・大橋康二監修 1988 『古伊万里』別冊太陽 日本のこころ 63 平凡社
- 平田正典 1979 『石見粗陶器史考—原点の模索と丸物師の生活史—』黒潮社
- 松江市教育委員会・財団法人松江市教育文化振興事業団 2011 『松江城下町遺跡(殿町287番地・279番地外)発掘調査報告書』
- 松江市教育委員会・財団法人松江市教育文化振興事業団 2012 『松江城下町遺跡発掘調査報告書』1
- 松江市教育委員会・財団法人松江市教育文化振興事業団 2012 『松江城下町遺跡発掘調査報告書』2
- 守岡正司・新川 隆 2011 「陶磁器から見た石見銀山遺跡」『石見銀山遺跡テーマ別調査研究報告書』I 島根県教育委員会・大田市教育委員会

图 版





昆布山谷地区第5地点 完掘状況(南西より)



同 調査風景(北西より)



同 調査風景(南西より)



同 南端部間歩(東より)

PL. 2



昆布山谷地区第5地点 東壁(南西より)



同 南壁(北西より)



昆布山谷地区第5地点拡張部 第1遺構面検出状況(南西より)



昆布山谷地区第5地点 SK03検出状況(南東より)

PL. 4



昆布山谷地区第5地点 SK03掘下状況(南西より)



同 (西より)



昆布山谷地区第5地点 SK03掘下状況(南東より)



同 SK03南壁(北西より)



同 東西土層断面(北西より)



同 南北土層断面①(北東より)



同 南北土層断面②(北東より)



同 南北土層断面③(北東より)



同 南北土層断面②南半(北東より)



同 南北土層断面②北半(北東より)

PL. 6



昆布山谷地区第5地点 南半部完掘状況(南西より)



同 SK03完掘状況(南東より)



昆布山谷地区第5地点 SK03下層断面(北西より)



同 SK03下層(SD09)断面(北東より)



同 SK03下層断面(北東より)



同 SK03下層(SD09)断面(南東より)



同 SK03北面石積検出状況(南東より)

PL. 8



昆布山谷地区第5地点 SK04完掘状況(南東より)



同 南半完掘状況(南東より)



昆布山谷地区第5地点 SK05検出状況(北東より)



同 SK05半截状況(北東より)

PL. 10



昆布山谷地区第5地点 SK05半截状況(東より)



同 SK05東壁検出状況(南西より)



同 SK05土層断面(北西より)



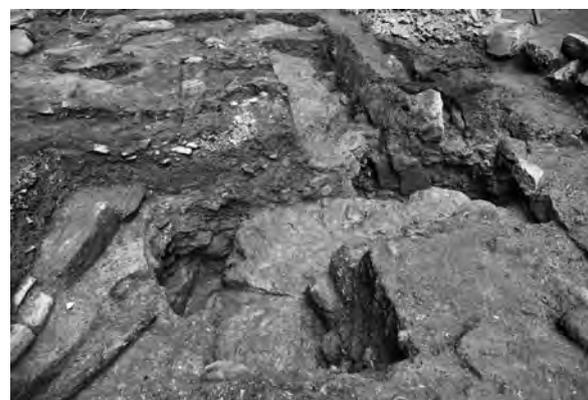
同 SK05南端付近割込み(北西より)



昆布山谷地区第5地点 第4遺構面検出状況(北より)



同 SD08完掘状況(北より)



同 トレンチ北面土層断面(南東より)



同 SD09土層断面(南東より)

PL. 12



昆布山谷地区第5地点 SX28検出状況(南西より)



同 SX28検出状況(北より)



同 SX28上層断割状況(北西より)



同 SX28上層断割状況(南西より)



同 SX28上層断割状況(南東より)



昆布山谷地区第5地点 SX28調査完了状況(南西より)



同 SX28半截状況(南より)



同 SX28底面(北西より)



同 SX28土層断面(南東より)



同 SX28炉壁(北西より)

PL. 14



昆布山谷地区第5地点 SK 06 検出状況 (南東より)



同 SK06掘下げ状況 (東より)



同 南北トレンチ西壁土層断面 (北東より)



同 調査区北端部断割り状況 (南東より)



同 発掘調査現地説明会



昆布山谷地区第5地点第1トレンチ 調査前 (北西より)



同 第1遺構面検出状況 (東より)



同 第1遺構面検出状況 (南東より)



同 瓦積遺構検出状況 (東より)



同 瓦積遺構検出状況 (北東より)

PL. 16



昆布山谷地区第5地点 第1トレンチ SW07検出状況(東より)



同 SW07検出状況(北より)



昆布山谷地区第5地点 第1トレンチ SW07検出状況(東より)



同 SW07南部検出状況(北東より)



同 SW07北部検出状況(北東より)



同 SW07上面礎石検出状況(北西より)



同 断割土層断面(北より)



昆布山谷地区第5地点 第1トレンチ 西壁(北より)



同 第1トレンチ 西壁(東より)



昆布山谷地区第5地点 第1トレンチ 東壁(南より)



同 第1トレンチ 東壁(西より)



昆布山谷地区第5地点 第1トレンチ 南壁(北西より)



同 東壁北半(南西より)



同 北端部サブトレンチ東壁(南西より)



同 北端部サブトレンチ西壁(北東より)



同 北端部サブトレンチ 北壁(南東より)



昆布山谷地区第5地点 第1トレンチ 完掘 (北より)



同 完掘 (北西より)



同 SW07・SW08検出状況 (北東より)



同 SW08検出状況 (北より)



金森家地点 北半 調査前 (西より)



同 第1・2トレンチ 建物構築面検出状況 (西より)



同 第1トレンチ断層検出状況 (西より)



金森家地点 第1・2トレンチ 完掘 (西より)



同 第1トレンチ東部北壁土層断面 (南西より)



同 第1トレンチ西部北壁土層断面 (南東より)



同 第1トレンチ中央部北壁土層断面 (南西より)



同 第1トレンチ東端北壁土層断面 (南西より)



金森家地点 第2トレンチ 完掘(東より)



同 東部南壁(北東より)



同 中央部南壁(北東より)



同 中央部南壁(北西より)



同 東部南壁(北西より)



同 東部南壁(北東より)



同 西部南壁(北西より)



金森家地点 第1トレンチ SP02検出状況 (南より)



同 第2トレンチ SP03掘下状況 (北より)



同 SP04据付痕跡断面 (北より)



同 SP04据付痕跡 (北西より)



同 SP04据付痕跡 (北西より)



同 SP05据付痕跡 (北東より)



同 SP06据付痕跡 (北より)



同 SP07据付痕跡 (北より)

PL. 26



金森家地点 南半 調査前(東より)



同 第3・4トレンチ 完掘(南より)



金森家地点 調査区北端 調査前(東より)



同 第3トレンチ南半 遺構面検出状況(南より)



同 第3トレンチ南半 西壁(北東より)



同 第3トレンチ南半 西壁(南より)



同 第3トレンチ北端石列検出状況(北東より)



同 第3トレンチ北半西壁(北東より)



金森家地点 第3・4トレンチ 完掘 (北より)



同 第4トレンチ 建物構築面検出状況 (南より)



同 第4トレンチ 完掘 (南より)



金森家地点 第4トレンチ 北端完掘 (北より)



同 第5トレンチ 木質検出状況 (南東より)



同 第4トレンチ 北半盛土 (西より)



同 第2トレンチ SP10土層断面 (北より)



同 第2トレンチ SP01検出状況 (北西より)



同 第2トレンチ SP01完掘 (北より)



同 第4トレンチ SP08掘付痕跡 (北より)



同 第4トレンチ SP08掘付痕跡 (西より)

PL. 30



金森家地点 第4トレンチ 東壁(北西より)



同 第4トレンチ北端 東壁(西より)



同 第4トレンチ北端 西壁(北東より)



同 第4トレンチ北半 東壁(北西より)



同 第4トレンチ中央部 東壁(北西より)



同 第4トレンチ南半 西壁(北東より)



同 第4トレンチ南半 東壁(南西より)



同 第4トレンチ南半 西壁(南東より)



金森家地点 第5トレンチ 完掘(北より)



同 第5トレンチ 北半東壁(西より)



同 第5トレンチ 南半東壁(北西より)



同 第5トレンチ 南半西壁(東より)



同 第5トレンチ 北側石積(北より)



同 第6トレンチ 南壁(北西より)



同 第6トレンチ 西端石列検出状況(西より)



金森家地点 SK01 甕検出状況 (南より)



同 SK01 陶板検出状況 (南西より)



同 SK01 炭化物出土状況 (南西より)



同 SK01 木箱出土状況 (南より)



同 SK01 完掘 (南より)



金森家地点 SK02 甕検出状況(南より)



同 SK02 検出状況(南より)



同 SK02 平瓦・建瓦出土状況(南より)



同 SK02 完掘(南より)



同 調査風景(西より)

PL. 34



豊栄神社地点 調査前 (西より)



同 遺構面検出状況 (西より)



豊栄神社地点 建物構築面検出状況 (西より)



同 第1トレンチ 南半土層断面 (東より)



同 第1トレンチ 北半土層断面 (東より)



同 第2トレンチ 東半土層断面 (北より)



同 第2トレンチ 西半土層断面 (北より)

PL. 36



豊栄神社地点 第1トレンチ南端礎石(北より)



同 第1トレンチ北端礎石(南より)



同 第2トレンチ東端礎石(西より)



同 第2トレンチ西端礎石(東より)



同 第3トレンチ完掘(北東より)



同 第3トレンチ南側礎石(北東より)



同 第3トレンチ東壁土層断面(東より)



同 第3トレンチ北壁土層断面(北より)



豊栄神社地点 第4トレンチ調査前 (北西より)



同 第4トレンチ完掘 (南より)



同 第4トレンチ延石除去状況 (西より)



同 第4トレンチ北壁土層断面 (北より)



同 第4トレンチ礎石・西壁土層断面 (西より)



同 第5トレンチ南側延石除去状況 (北より)



豊栄神社地点 第5トレンチ東側延石除去状況 (北より)



同 第5トレンチ東側完掘 (北より)



同 第5トレンチ完掘 (南東より)



同 第5トレンチ南側完掘 (北より)



同 第5トレンチ南壁土層断面 (南より)



同 第5トレンチ東壁土層断面 (東より)



福石家地点 SB01検出状況(南より)



同 SX01~SX03検出状況(東より)



同 SX01土層断面(南東より)



同 SX01~SX03完掘(東より)



同 SX02土層断面(東より)

PL. 40



福石家地点 SBO1石敷検出状況(北西より)



同 SBO2検出状況(南より)



同 池跡トレンチ完掘(南西より)



同 池跡トレンチ完掘(南東より)



林家地点 調査前(北より)



林家地点 第1トレンチ遺構面検出状況(南東より)



同 第1トレンチ遺構面検出状況(北西より)



同 第2トレンチ完掘(北西より)



同 第2トレンチ完掘(南西より)

PL. 42



林家地点 第2トレンチ石敷遺構検出状況(東より)



同 第3トレンチ完掘(北西より)



同 第1トレンチ南壁(北より)



同 第1トレンチ南壁(北より)



同 第2トレンチ西壁(南より)



同 第2トレンチ西壁(南より)



同 第2トレンチ南東部西壁(南東より)

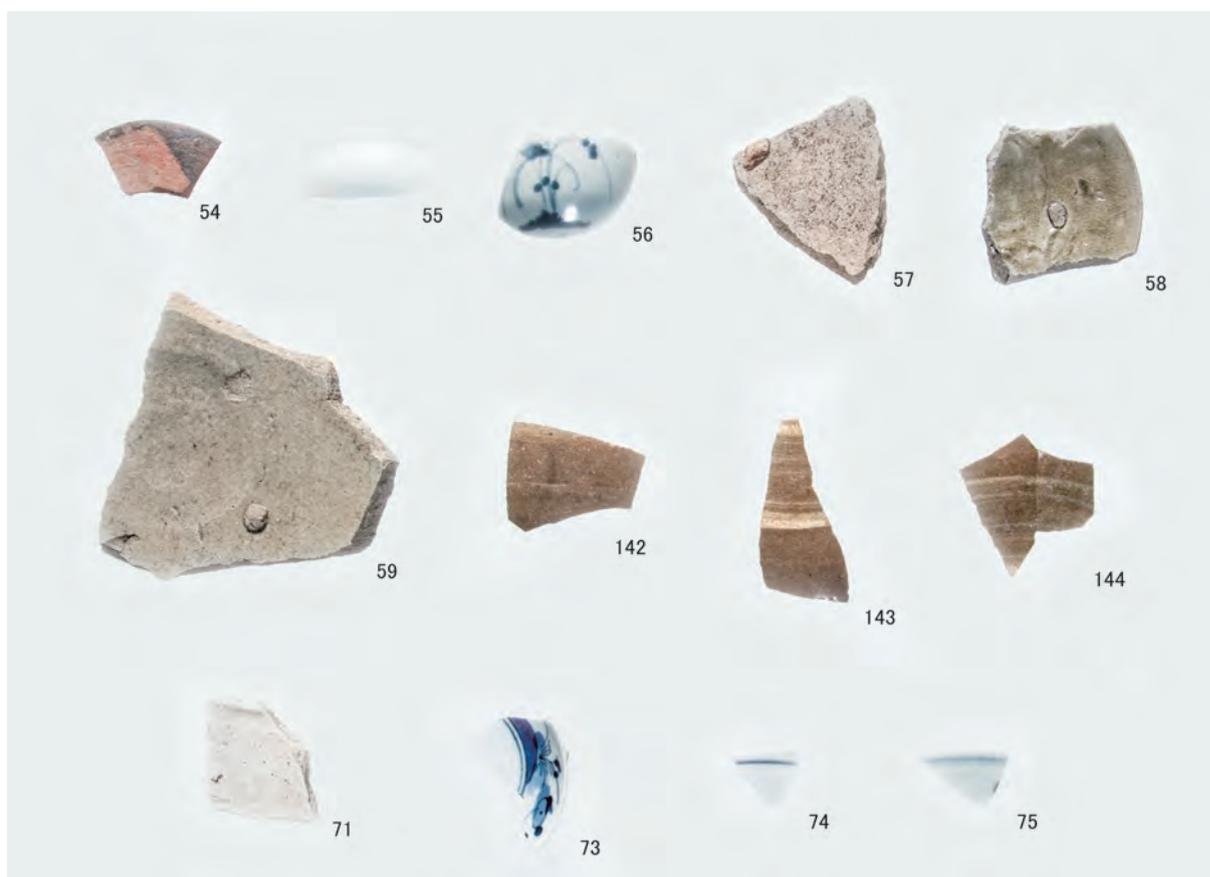


同 第2トレンチ南壁(東より)

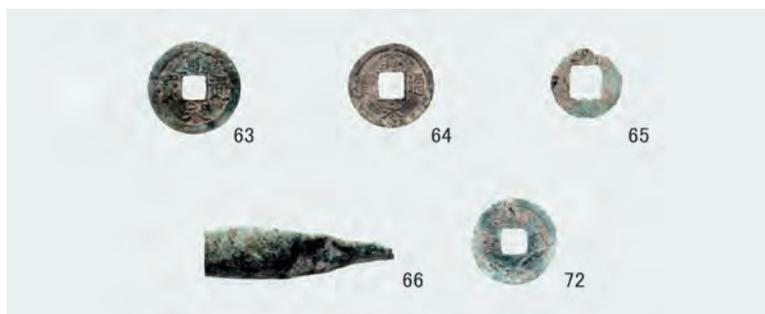


昆布山谷地区第5地点出土遗物 I

PL. 44



昆布山谷地区第5地点出土遗物II



昆布山谷地区第5地点出土遺物Ⅲ

PL. 46

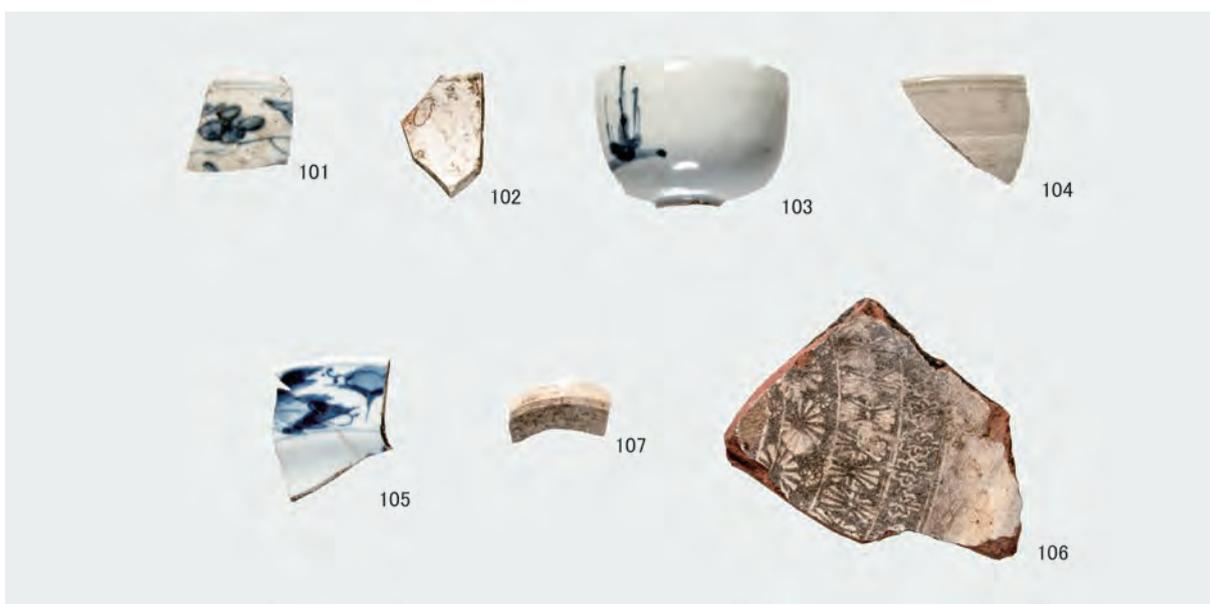


金森家地点 SK01出土遺物



金森家地点 SK02出土遺物I

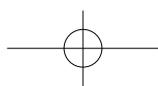
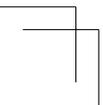
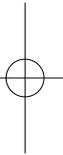
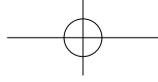
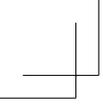
PL. 48



金森家地点SK02・豊栄神社地点・林家地点出土遺物

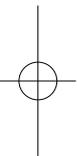
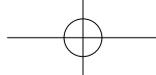


豊栄神社地点・林家地点・ひまわり館地点出土遺物



報告書抄録

| ふりがな | いわみぎんざん | | | | | |
|-----------------|------------------------------------|----------------------|---------------------|---------------------------|--|-------------------------|
| 書名 | 石見銀山 Iwami-Ginzan Silver Mine Site | | | | | |
| ふりがな | いわみぎんざんいせきはくつちょうさがいよう | | | | | |
| 副書名 | 石見銀山遺跡発掘調査概要 26 | | | | | |
| シリーズ名・巻次 | 昆布山谷地区・金森家地点・豊栄神社地点 | | | | | |
| 編著者名 | 山手貴生・新川 隆・尾村 勝 | | | | | |
| 編集機関 | 島根県大田市教育委員会 | | | | | |
| 所在地 | 〒 694-0064 島根県大田市大田町大田口 1,111 | | | | | |
| 発行年月日 | 2018年3月30日 | | | | | |
| 所収遺跡名 | 所在地 | コード | | 北緯 | 東経 | 調査年月日 |
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | |
| いわみぎんざん 石見銀山 | しまねけんおおだしおおもりちよう 島根県大田市大森町 | 32205 | A232 ～ 319 | 35° 5' 30" | 132° 26' 30" | 2017年4月 ～ 2018年1月 |
| 調査面積 | 399 m ² | | | | | |
| 調査原因 | 国庫補助事業による学術調査 | | | | | |
| 所収遺跡名 | 各種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 | |
| 石見銀山 | 鉱山遺跡 町屋跡 | 戦国時代 江戸時代 明治時代 | 礎石坑列跡 土溝石側 垣溝 | 陶磁器 金属製品 石製品 木製品 | 国指定史跡 銀生産遺跡 (1969年4月14日) (2002年3月19日、 2005年3月2日、 2005年3月14日、 2008年3月28日 追加指定) | |



石見銀山

Iwami-Ginzan-Silver Mine Site

石見銀山遺跡発掘調査概要 26



— 昆布山谷地区・金森家地点・豊栄神社地点 —

2018年3月

島根県大田市教育委員会

島根県大田市大田町大田口 1,111 番地

印刷・製本 坂根印刷

